
戦い？ しませんけどなにか？

トンヌラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦い？しませんけどなにか？

【Nコード】

N2685Q

【作者名】

トンヌラ

【あらすじ】

はいテンプレテンプレ、という感じで進みますが主人公はほとんど戦闘をしません

「戦い？嫌ですよ、だって痛そうだし」

エセ敬語口調が行く

処女作です、

生暖かい目で見てください

締め切りを決めました。

22話の後書きに追加しました

第1話（前書き）

主人公ステータス

Eは一般的な人間10人分（+は一時的に二倍、-は一時的に半減）

パラメータ

筋力 F -

耐久 F -

敏捷 A +

魔力 F -

幸運 F

宝具なし

保有スキル

気配遮断 Rank A + 自身の気配を消す能力。ただし、自らが攻撃態勢に移ると気配遮断のランクは大きく落ちる。

黄金律 Rank A

人生においてどれほどお金が付いて回るかという宿命を指す。Aランクの場合、「一生金に困ることはなく、大富豪でも十分やっていける」。

矢避けの加護 Rank B

飛び道具に対する防御スキル。

攻撃が投擲タイプであるなら、使い手を視界に捉えた状態であれば余程のレベルでないかぎり通じない。ただし超遠距離からの直接攻

撃、および広範囲の全体攻撃は該当しない。

道具作成：A

魔力を帯びた道具を作成できる。擬似的だが不死を可能にする薬を作ることできる。

基本戦闘能力はなし
逃げ足は最強

第1話

ああ、転生ですかわかります。

いきなり死んだ↓白い空間↓老人登場。という展開ですね。

痛みが無かったのはラッキーでした。上から鉄骨が落ちてきてグシヤツでしたからね

今は『白い空間』に居るっていう状況ですので、そのうち『神様』
がくるん「すまないことをした、君には何度謝っても「テンプレ乙」
……………最後まで言わせてくれんか？」

まあ、なろう読んでる人はだいたい後の展開解ってますので、ねえ

「メタな発言もやめて欲しいのう」

いや、この後『君は本来死ぬはずでは（ry』って続くんでしょ。
基本なろうでは

「いや、だからメタな発言はやめて欲しいいんじゃが、というか冷静じゃの」

基本オタはナメないほうがいいですよ
小説ですし

で、僕は口に出してないけど、なんで会話でき……………神様パワーですか、そうですよね？

「いや、そうなんじゃが、まあこの先の展開が分かっているような

ので聞くが能力は何がよい。五つまでじゃ、あと行く世界はランダムじゃ」

ランダムですか、行く世界によって能力が必要か不要が変わってきますねバカテスに戦闘系とか絶対にいらないし……………そうですね

「なんでもいいんですよ」

「うむ、神にしろなどという代物でなければの」

「じゃあ気配遮断 Rank A+

と矢避けの加護 Rank B

と黄金律 Rank A

で道具作成 Rank Aと

敏性もA+にしてください」

「…………あれ？『無限の剣製』とかはいらんのか？」

「戦いませんから、巻き込まれたら逃げます。というか『無限の剣

製』 なんかのスキルがいる世界なんですか？」

「いや、それはわからんが」

「じゃあ良いですね、では」

「…うむ、良い人生を」

そうして僕は光に包ま（ry

第2話

……暗い……それと暖かい？此処は、転生したんじゃないかなかったですか？

体が流れる！？

――――――

ぬおっ、眩しい此処は

「おお、産まれたか！よく頑張ったな雪菜」

「ええ、貴方も」

なるほど、さっきのは母親の胎内ですか。今は産まれた所ですね。さて、此処は何の世界なんでしょう

「お前の名前は慎二だ！、これから間桐を支える男になるんだぞ！」

えっ……

……っえっ……

なにiiiiiiiiiiiiiiii!?

間桐って間桐!？臓硯のMAJIDE!？確かにFateは好きだったけどこれはあんまりじゃね!？
死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ!？
怨むぞ神よおおお!？

—————

結論

同姓同名なだけでした。よかったよかった、あつはははは! いやあつつい敬語が崩れて言葉遣いが、吹っ飛んでしまいましたよ

臓硯もないし、なにより此処の地名が『麻帆良』でした。いやあれほどホッとしたのは産まれて初めてですよ。産まれた直後でしたけどね

「ほら、慎二べろべろば、かわいいなあさすが俺の息子だ」

この方が父親ですね 名前が鶴野ではなく 清吾でしたよかったよ
かった

さて、この世界がネギまだと分かったわけですが何をしましょうか

ね原作に関わりたと思うのですが、この体は超貧弱 敏捷と幸運が激高ですが不良にも勝てま……いや、そういえば何かの漫画で『握力×スピード×体重＝破壊力』って言ってましたね。ランサーもビツクリの速度で殴れば人も吹っ飛びかねませんね

ハッ！これなら気なんかなくても居合拳打てますよ多分ふふふ死にそうになることは、なさそうですね

最悪、気配遮断でトンズラ出来ますし

何より私は確実に倒せる奴しか戦いませんからね
痛いのも辛いのも嫌ですし

まずは、

「はい、慎ちゃんご飯の時間でちゅよ」

この状況をどうにかせねば！母さんが美人すぎます！食事の時間が目に毒すぎます

実の母親に欲情……首を吊りたくなってきました

早く成長せねば、くう！

第2話（後書き）

外見は最終的にワカメじゃない慎二になります
若い臍硯の更に若い姿的な
イメージはできる慎二

第3話（前書き）

少しキンクリ

第3話

二歳になりました！もはや離乳食なれてきましたよ、いやああのままでは私はあまりの恥ずかしさで 死んでる所でした

なにが恥ずかしかったか？

聞かないでくださいよ本当に死にそうだったんですから、食事に下の世話など

死因・恥死……嫌ですよそんなの

あと赤ん坊って寝返りが全然出来なかったんですよ一回うつぶせになつて死にかけました

肺が潰れるかと思いましたがよ

赤ん坊って辛い

色々と

改めて自分の状況を振り返って見ましょう

家は何とゆうか洋館といった感じですねお金は結構あるみたいですが外見は……すごく……間桐です。という感じですぶっちゃけFat eの間桐家ですね、まあ蟲がないから全然OKですけどね
父さんは間桐清吾、学校で教師をしているらしいです………これ

はフラグなんでしょうか？
後、外見は雁夜っぽいですね

母さんは間桐雪菜

普通に主婦をしています

イメージ的にはリリカルのメガーヌさんみたいな感じですが
超美人すぎます。父さんはどうやって母さんを捕まえるたんでしょう？

魔法使いかどうかはイマイチわかりません

まあ、リリカル・Fateと魔法関係っぽい外見の人が両親なので
ここで一般人といったらそれは嘘というものです

今は敏捷の凄さを実感していますね二歳児が家の中を爆走している光
景はなかなか見れませんよ

道具作成は作りたいと思った物の設計図が頭に浮かんできます、ま
だ何も作れないんですけどね

とりあえず間桐の地下室を探しましたが見つかりませんでした
元々無いのか、それとも隠してあるのか間桐が使う魔法が蟲で無い
なら後者であって欲しいです
赤松ワールドに間桐の蟲なんてゆうものはないと思いますが

……無いと信じたいです

まずは

「慎ちゃん。ご飯出来ましたよ、清吾さんも」

「ふぁーい」

「ああ、今行くよ!」

幼児ライフを満喫しますか

S i d e 間桐清吾

俺は幸せ者だと思っっている仕事も順調だし『副業』のほうも良い感じだ

雪菜は俺にはもったいないくらいの女性だ、プロポーズに応えてもらった時に本当にいいのかと聞いて呆れられたぐらいだ

この『力』に会わなかったら彼女にも会うことは無かっただろう。

愛おしい妻が居る、愛すべき息子がいる

俺は昔『■■■■■■■■■■』《■■■■■■■■■■・■■■■》に憧れていたが、
今はそんなことはどうでもいい、

俺は見知らぬ誰かよりも大事な家族を守る為にこの『力』を使って
生きて行きたい

この『力』のことを何時か慎二に話す時が来たときには

、遠い理想ではなく身近な現実の為に使うことを教えていこうと思う

慎二も幸せな人生を送ることを願おう

今は

「慎ちゃん。ご飯出来ましたよ、清吾さんも」

飯にしよう！

第3話（後書き）

『力』（笑）

分からない人は絶対いませんね

清吾が少しカッコよすぎですかね？

第4話（前書き）

三人称できてます……よね？

第4話

(三年前) (慎二、現在二歳)

麻帆良の居酒屋で三人の男が座っていた。

「話したい事というのは、何なんだ？ 清吾」

「私が力になれる事なら構わず言ってくれ、私と君の仲だろう？」

三人の内二人、眼鏡をかけた黒人男性である『ガンドルフイーニ』と、スーツを着込みサングラスにヒゲといったイロイロと『濃い』、『神多羅木』という名前の麻帆良に勤める魔法先生である。

そして色素の薄い髪 of 男性『間桐清吾』が口を開いた

「ああ、その、なんだ、『悠久の風』を抜けようと思うんだ」

「ッ！？、どうしたんだ急に！」

「何か理由でも有るのか？」

驚くガンドルフィーニと、理由を聞く神多羅木、その二人に

「悠久の風での大仕事があつてな、その時に……」

とある犯罪組織の捕縛、かなりの規模があるため多くの魔法使いが集められた

「ああ、かなり危なかったんだろ。高畑くんが居なかったら死人が出ていた、と言われてるらしいな」

「それは私も聞いたぞ、しかしそういう事は今まででも少ないとはいえ、有ったらしいじゃないか？」

二人は疑問に思う、死にかけた事は今までに数回有ったと、清吾自身に聞いていたからだ

「ああ、確かに死にかけた。俺自身魔法使いとしてはあまり強い方では無いからな

【魔力暴走】（オーバードライブ）を駆けっぱなしで戦ったんだが、かなり長時間駆け続けた所為か最近魔力量が低下し続けてるんだ」

「「なッ!?!」」

「後数年もしたら前線でサポートする事すら不可能になる、だから……な」

「そうか、それが……」

「ああ、俺は弱い。神多羅木やガンドルフィーニには全く敵わないし、麻帆良でも下から数えたほうが早いくらいだ。それがまともに戦う事すら出来なくなっただ……後方に下がる事にした」

少しの間を置き神多羅木が言った

「そうか、もう決めたんだろう？」

「怒らないのか？」

「お前が決めたことなんだろう？なら俺は友人として応援するだけだ」

「私も同意見だな、それに何か言ってもそれは変わらないんだろ？」

「そうか、ありがとう二人とも……そうだな、これからは皆のサポートとして後方で魔法をつかう」

「そうか……よし！、今日は飲み明かそう！暗い雰囲気はよくない！」

「お前は酒が強くないだろう、ガンドルフィーニ」

「ははっそうだな、相談の礼だ今日は奢ろう！飲み明かすぞ！」

「ふえんはふめひた、あふえほんほふあな？（変な夢みた……、あれ本当かな？）」

（父さんってあんま強く無いんですね……、まあ、外見が雁夜っぽいからしかたないでしょうが……）

（というかガンドルフィーニも神多羅木も若かったですね、今は原作の何年前でしょう？）

（しかしこの夢が本当なら魔法生徒フラグっぽいですね、魔法は使ってみたけど、痛いのも辛いのも苦しいのも嫌なんです……）

「慎二、何処だ！」

「ん！」

(まあそのうち分かりますよね)

第4話（後書き）

ガンドルフィーニは清吾の件もあって原作時には、正義より家族を重視しています

第5話

『キングクリムゾン』

『キング・クリムゾン』の能力の中では、この世の時間は消し飛び

……

そして全ての人間は、この時間の中で動いた足跡を覚えていないッ！

『空の雲は、ちぎれ飛んだ事に気づかず！』……

『消えた炎は、消えた瞬間を炎自身さえ認識しない！』

『結果』だけだ！！この世には『結果』だけが残る！！

……ふう

と、まあそういう事で、幼児から児童に進化しました

今現在は小学校の入学式の真っ最中です

人人人人人人人人人人人人、人ばかりです、

つつい『ハハッ見る人がゴミのようだ！』と叫びたくなります

……いや、しませんよ？もししたなら完全にイタイ人ですし

多分1000人以上居るんじゃないでしょうか？
保護者を含めたら軽く2000〜3000人以上、

……3000人近い人達からイタイ人を見る目で見られる。

軽くトラウマになりますね。

「……………これにて麻帆良大学附属小学校の入学式を閉会する」

おっともつすぐ終わりますか

人の波に流されない様にしないといけませんね
父さんと母さんはあつちですか、少し間を置いて行ったほうがいい
ですね

あ痛っ、って大丈夫ですか？ああ、大丈夫、気をつけてくださいね
危ないですから

痛ッ、足を踏まないでください、痛いでしょう気をつけてください！

ッッ！、痛えなコラッ！？今ケツ蹴った奴誰だボケッ！シバくぞ
！ゴラア！

ッハ！ついつい汚い言葉遣いになってしまいましたよ、危ない危つ
て痛エつつつてんだろ！？気をつけやがれクソガキ！？アア！？何
見てんだよさっさと散れボケッ！
たく、ガキがぶん殴るぞ

つと、ああ、はい、今の事は忘れてくれるとうれしいですね
というか忘れてください

「どうしたんだ？急にボーっとして？」

「いや、何でもないですよ父さん、ただ若さ故の過ちを悔いていた
だけですから」

「？、それじゃ母さんの所に行こうか」

「ええ、早く行きましょ」

さっさと忘れたいので、ね

S i d e 雪菜

清吾さんに連れられてやつてくる愛息子を見る

周りの子供に比べて凄く落ち着いているけど、そういう所は清吾さんに似たのかしら？

落ち着いた顔は清吾さんによく似てるわ♪

慎二を連れている清吾さんとは8年以上のも付き合いだわ

昔、村が犯罪者に襲われたとき助けてくれたのが清吾さんだったのよ、ね、

私、村が襲われた時は凄く動揺して杖を持つ事すら忘れて、逃げていったせいで

村を襲った人達に追いつかれた時は、もう死んじゃうんだって思ってたんだけど

そこを助けてくれたのが、

その犯罪者を追ってきた清吾さん達なのよね♪

言っちゃ何だけど、私より弱い清吾さんが私を護るために、必死で戦うところをみてビビッと来たのよね。

何て言うか、背中ポ？あの戦う背中に……………（1時間以上褒めっぱなし）……………というわけで

清吾さんに、ついて行っただけで清吾さんったら全然気づいてくれないんだもの

いくら、アプローチしても全然気づいてくれないし何て言うのかしら？

鈍感？唐変木？

だから、プロポーズして貰った時はやっとかゝて思ってたわよ

私の苦勞がやっと報われるとホッとしたわよ

慎ちゃんは、女の子をやキモキさせる人にならないで欲しいわ

さあ帰って入学祝いをしましょうか、ね？

S i d e O u t

S i d e 慎二

？何か母さんが妙に上機嫌ですね？

はて？何が有ったんでしょう

「帰ったら一緒に入学祝いをしましょうね」

はあ、まあ、いいですがならさつさと帰りましょうかね

「雪菜、話しが有るんだ、慎二は少し待っててくれるか？」

はあ、良いですけど？

何の話なんですか

「悪い、ちょっと、な」

行ってしまいましたよ、仕方ないので気長に待ち……そうだ！

気配遮断を使ってついていけばいいじゃないですか！

さすが僕ですね♪

ではスニーキングミッション、スタートです

路地裏にて

さて何の話しなんでしょうか？

「どうしたの貴方？」

「いや、慎二に話そうと思うんだ、『あの話』」

あの話？どの話しなんでしょう

「ッ！それって」

「そう『魔法』の話だよ」

何イ！やはりあの夢は正夢……いや、どちらかと言えば過去視になるんでしょうか

とはいえ来ました〜〜！

「あの子にはまだ早くないかしら？」

「俺もまだ早いと思ってたんだけど、慎二は子供とは思えないほど

聡明だ、慎二なら危険な使い方をしないと思ってる、今日の夜にでも言うつもりだ」

「……はあ、じゃあ言っても無駄ね清吾さんは無駄に頑固なんだから」

「悪いな、雪菜」

「いいわ、そういう所も好きな所だもの」

「……雪菜」

「……清吾さん」

ううむ、路地裏がなんともいえないストロベリー空間に

仕方ない撤退するか

母さんと父さんが帰って来たのは30分後だった、

そこまで長くないので多分あの後ずっとイチャイチャしてたんじゃないだろうか？

しかし、今日の夜が楽しみです

でも、僕が今、魔法を知っているというのは、おかしい話ですか
らイロイロ、ごまかさないといけませんね

ふふふ、

「慎二！待ったか？」

「ええ、かなり」

「ぐうっ！そこはもう少しオブラートに包んで言って欲しいな、慎
二」

「ゴメンなさいね、慎ちゃん」

ふう、では帰りましょっかね

第5話（後書き）

雪菜はラカン表では400、後衛方の魔法使いで
清吾はラカン表で220、前後衛どちらも一応できるぐらいです

第6話

S i d e 慎二

とうとう夜になりました！夜になったんです！
大事な事なので二回言いました

いやいや、とうとう魔法バレですか、どういつ反応しましょうかね？

私が魔法の存在を知っていることは誰も知りませんし、さてさてどうしましょう

やっぱりアレですかね？ふふふ

「慎二、少しいいかな？大事な話があるんだ」

キターーーー！！！！！！

さて父さんはどう切り出すつもりでしょう

「なんですか？父さん、妙に改まって何の話ですか？」

ここは普通に返すのが正しい展開でしょう、さて

「慎二、聞いて欲しいんだが、もし『魔法』があり、俺は『魔法使い』なんだ、と言ったらどうする?」

ふっ、答えはこうです

S i d e O u t

S i d e 清吾

「慎二、聞いて欲しいんだが、もし『魔法』があり、俺は『魔法使い』なんだ、と言ったらどうする?」

慎二はどういう反応をするんだろうか?

普段から落ち着いた子だからはしゃぐという事は無いと思うんだが? 目を閉じて待つ

.....

.....

.....？

なんだ、なんで何の反応も無いんだ？慎二はどんな顔をしてるんだ？

目の前には、妙に生暖かい笑顔を浮かべた慎二がいる
どうしたんだ、一体？

「.....父さん」

「っなんだ、慎二？」

ん、これは、まさか、

「父さん、父さんがどんな人だろうと、僕は父さんの息子です、母さんに相談出来ないなら僕に言ってください」

正気を疑われてるうううううう！？

S i d e O u t

「父さん、父さんがどんな人だろうと、僕は父さんの息子です、母さんに相談出来ないなら僕に言ってください」

これが僕の答えです！

目の前には変な汗をかいている父さん

「いやっ、待つんだ慎二、俺は正気だ、『魔法』は本当にあるんだ」

「そうですねー、とりあえず母さんと一緒に話しましょう父さん」
棒読みで口にしてやる、ヤヴァイ、超楽しい！

「だから俺は正気だ！『魔法』は実在するんだよ！」

「そーですかー、テクマクマヤコンですか？
それともホロレチュチュパレロですか？

ああ、それとも

ゆうて いみや おうきむ

こうほ りいゆ うじとり

やまあ きらぺ ペペペペ

ペペペ ペペペ ペペペペ

ペペペ ペペペ ペペペペ ペペ、ですか？」

「なんで、例えば妙に古いんだ！
後、最後のは魔法じゃないし、あんな最強呪文認めない！」

… やってるんですか、ドラクエ？

「まあ、冗談はこれくらいにして、……… 本気で言ってるんですか？」

「ハア、ハア、ああ、本気で本当だ、お前には『魔法使い』になっ

て欲しいとおもってる」

「はあ、『魔法使い』ですか、具体的にどのような存在なんですか？」

まあ、分かっているんですけどね

「そうだな、魔法使いというのは……………（説明中）……………
という感じの存在だ」

「世を忍び、世のため人のために日夜働く人達の事で、多くの人を
助ける魔法使いは『立派な魔法使い』と呼ばれると？」

「まあ、そんな感じで思っていてくれたらいい」

まあ、ここまでは良いとして何故、僕に魔法を教えようと思ったか
が重要ですね

「何故、父さんは僕に魔法の存在を教えたんですか、『立派な魔法

使い》になつてほしいからですか？」

まあ多分そうなんでしょうけど、自分が夢半ばで諦め「いいや、違う」

えっ？

「魔法を覚えて欲しいと思つたのは自分が大切に思う存在を護るためだ」

っ！？

「俺は《立派な魔法使い》よりも、大事な者を家族を、護れる人間になつてほしい」

「魔法と言う『力』があれば、大事な者を護りやすくなる、だからだ」

……そう、ですか、父さんの気持ちは分かりました、僕は間桐慎二として答えをだします

「父さんの考えは分かりました、……私は父さんに魔法を教えるも
らいたいです、今は、家族以外に大事な者はいませんが、大事な者
が出来た時それを護り通すために、僕に魔法を教えてください！」

駄目ならすっぱり諦める。

色々考えていた自分が恥ずかしいです

「……………ああ、さっそく明日から修業を始めようと思う」

「ついて来れるか！」

「父さんこそついて来てください！」

僕は大切な者を護り通す魔法使いになってみせます

これから僕の魔法使いとしての日々の始まりでした

そう

僕も

そう思っていた時期がありました

第6話（後書き）

テクマクマヤコン

ひみつのアッコちゃんより

ホロレチュチュパレロ

魔動王グランゾートより

ゆうて いみや おうきむ

こうほ りいゆ うじとり

やまあ きらぺ ぺぺぺぺ

ぺぺぺ ぺぺぺ ぺぺぺぺ

ぺぺぺ ぺぺぺぺ ぺ

ドラクエ？より復活の呪文

主人公は改心して真面目になったりしません

あくまで

「痛いのも辛いのも苦しいのも嫌なんです」というキャラですので、

次話でキャラも戻ります

第7話

Side 慎二

ふう、はあくダリ〜ですね〜

えっ？ 護るための存在ですか？

あ〜ありましたね、そんなこと、半年ぐらい前ですか？
いやっ、僕は護るためとかいうレベルではないんですよ

具体的に言いますと、なんというか、その

……………才能がありませんでした

――――（半年前）――――

今日から魔法デビューですか楽しみですね

ん？

「父さん、その手帳は何ですか？」

「これか？これは間桐に伝わる、魔法使いの得意属性を調べるための魔術道具だ」

ああ、F a t eのサーヴァントのステータスを見るやつみたいな物ですか

「ふむ、なるほどな」

「一人で納得しないで教えてくださいよ」

「…そうだな、お前の属性はおそらく、影と風だろう。影は俺、風

は雪菜ゆずりらしいな」

なるほど、影と風ですか、影はレアらしいですけど父さんはレアモ
ノなんですね

「影は具体的にどどういう事ができるんですか？」

「影か？そうだな、影は基本的に呪文がないことが利点だ、有った
としても短いしな」

「正式な名前は操影術と言う、具体的な魔法の例は影槍といった影
でできた槍や、
影を体に纏って攻防どちらもあげるといった事、
影で人工的な使い魔を召喚して戦わせること、とかだな」

高音やカゲタロウ、デユナミスがやってたやつですね
と、いう事は影ってかなり強くないですか？

「しかしデメリットもある、使う人間が少ない為師事できることが
難しいし、影は使いこなし難い」

「父さんが教えてくれれば良いじゃないですか？」

ん？

あれ？父さん？

「……………その、俺は魔法使いとしては、その、強く無いんだ
……………」

……………ああ、そういえば夢では自分は弱いって言ってたもんな

えっ？じゃあ修業は？

「修業はどうするんですか！？」

「いやっ、まずはこの杖で初級の魔法を使って魔法を使うという感覚を覚えてもらう」

「お前は風の属性も持つてるから、風から始めよう」

「呪文は『プラ・クテ・ビギナル、風よ吹け』だ」

『風よ吹け』ですか、『火よ灯れ』は知ってましたが、他にも有ったんですね、

「まあ、1週間あればできるだろう、できる様になったら教えてくれ」

ふう、楽勝ですねオリ主の力を見せてやりましょう

――――（初日）――――

「プラ・クテ・ビギナル、風よ吹け」

「プラ・クテ・ビギナル、風よ吹け」

まあ、初日ですしね

――――（5日後）――――

「……プラ・クテ・ビギナル、風よ吹け！」

「プラ・クテ・ビギナル！風よ吹けエ！」

まっ、まあまだ二日ありますしね

――――（2週間後）――――

「プウラァ！・クウテエエエ！・ヴィイギナァアルウー！！風よ吹け

「エエエエエエ！」

.....

-----（一ヶ月後）-----

「ボソボソ（.....プラ・クテ・ビギナル、風よ吹け.....）」

ヒュウッ

ッッ！？

.....やっとですか長く苦しい闘いでした.....

父さんに報告しに行きましょう.....

「やっとできましたよ、父さん……」

「っ！そうか、（音も無く背後に立たないでくれ！？）」

「………慎二、お前は魔法の才能まで父さんに似たようだな………」

「………つまり、それは」

「ああ、お前の持つ魔法の才能はかっとなり低い………かなりの時間賭けないと強くはなれないだろう………」

ふう、まあ気長に頑張りますか……

S i d e O u t

S i d e 清吾

やはり雪菜の血が混じっても才能が無いことは変わらないんだな…

…

しかし俺は、初級呪文でさえ二ヶ月近くかかったから、俺よりはマシだろう。

努力次第で取り返しのつくレベルだ……

俺は涙が出るほど才能が無かったからな

まあ投げ出さない様だし、

15〜6くらいには、ある程度の腕前にはなるだろう

ただでさえ弱いんだ、そろそろ戦闘訓練を始めたほうが良いか？

これも慎二の為だ、頑張って貰おう

半年前に音も無く俺の背後に立ってきたんだ、戦闘方面の才能はかなりの物だろう

はあ、羨ましいぞ慎二、戦闘方面でも俺は二流だったからな

S i d e O u t

第7話（後書き）

作中に出て来る『風よ吹け』は作者がテキストに考えたものです

第8話

S i d e 慎二

ビュウオッ！

おっとッ！、危ない！全く、実の息子にする攻撃ですかッ！？

今現在は間桐家の地下室（隠してありました）で戦闘訓練中です、

「コラッ！慎二逃げるんじゃない、避けるんだ！」

無理に決まってるでしょう！、『魔法の射手』が当たったら どう
す……………あれ？

そつえば、僕は矢避けの加護 R a n k B が有るから、『魔法の
射手』は当たらないじゃ？

「『魔法の射手・戒めの風矢』!」

ッ!、試してみますが、急ストップの後におもいきり、逆走ッ!

「ッ!?」

おお!『魔法の射手』が不自然になら無い程度でズレていきます!

貰っておいてよかった!

くらえッ!

ダイナマイト・キック! (又は南斗獄屠拳!)

S i d e O u t

S i d e 清吾

「コラッ！ 慎二逃げるんじゃない、避けるんだ！」

まったく、逃げることに關しては天才的だな

魔法による強化もしてないのにかなりの速さだ、
あいつ本当に子供か？

……やはり、氣を使っている様には見えない、ただの脚力でこれか！

とりあえず、体力が尽きるまでやってみるか

風はあまり得意じゃ無いんだが、（バル・バリ・バル・バーサー
ク、風の精霊5人。縛鎖となつて敵を捕らえる。）

「『魔法の射手・戒めの風矢』！」

さあ、どうする？ 慎二、……なにッ！、逆走ッ！

「ッ!？」

なっ、走りながら全部避けたとッ!

だが、甘いッ!それではカウンターを喰らっただけだ!

「ふんッ!！」

ボッ!

「へ?、くわらばッ!？」

……あ、つつ、ついカウンターをいれてしまった

大丈夫かな、慎二……

S i d e O u t

S i d e 慎二

「ふんッ!」

ボッ!

「へ?、くわらばッ!」

ドンッ!ゴロゴロッ!

ぐっはッ!体がッ!主に腹のあたりがッ!痛い、痛すぎるッ!

「だ、大丈夫か慎二、飛んで来るからつい」

つい、じゃないでしょう、ヤバ、気持ち悪い

「本当に大丈夫か？
少し休憩しよう」

ふう、ようやく治りましたが、というかそれよりも

「父さんは弱いんじゃないや無かったんですかッ！」

普通に落ち着いてカウンターしてきたんですけど！

「魔法はあまり得意じゃ無かったからな、ちょっとした武術をかじってただ」

今までずっと、な」

つ、つまり『石の上にも三年』といった所ですか

これが年の功ですか、痛た、

「先に言ってくださいよ、おもいきりキックしに行ってしまったじゃないですか」

「バーカ！自分の手の内を晒すアホがいるか！」

「今のが、実戦だったら死んでるところだ！」

むう、しかし

「まだほとんど魔法が使えない子供に言う事じゃありませんよ！」

「自分のことを子供と言う子供がいるか！」

クッ！

「ほら、まだまだ逝くぞ！」

「字が違うッ！」

こうして小学校一年生の、一年間を過ごしていった

第8話（後書き）

魔法の射手は

通常の魔法の射手では

『。の精霊、。柱』と詠唱なんですが

三巻では、戒めの風矢は

『。の精霊、。人』

なんです、戒めの風矢だけ詠唱が違うんでしょうか？

第9話（前書き）

慎二はワカメヘアを嫌がっているので、若い頃の臙碇やディルムツドの様に髪を後ろに流しています

第9話

Side 慎二（9歳）

はあ、修業が辛いです、面倒くさいです、あと早く瞬動を使いたい
ですね

あれがあれば、ただでさえ速い逃げ足が更に速くなりますからね

まだまだ成功率が低いんですけどね、ふう

「帰ったよ、ただいま」

む、帰って来たようですね……………あれは、

「お帰りなさい、お客さんですか」

「ん、慎二か、ああ二人とも同僚だ」

「……………どちらの？」

「裏も表も同僚だよ、かれこれ十年近い付き合いだ」

なるほど夢で見たとおり、神多羅木さんとガンドルフィーニさんと仲がいいようですね

「なっ、清吾もう教えてるのか!？」

「いきなり『裏も表も』とか言った時は驚いたぞ」

二人が驚いている様ですね

「2年くらい前にな、教えたんだ」

「そうか、はじめまして、かなり幼い時に会ったんだが、覚えてないだろうからね

私はガンドルフィーニと言う、清吾の同僚で友達だよ」

「俺は神多羅木と言う、ガンドルフィーニと同じく、清吾の同僚で友人だ、よろしく頼む」

昔に会ったことが有ったようですね、昔の記憶は黒歴史として封印してるので、覚えてないみたいです

「これは、ご丁寧にも、間桐慎二ですはじめまして」

とりあえず挨拶しときましょう

「ほう、中々礼儀正しい子じゃないか」

「まったくだ、清吾の子供とは思えないな」

「どういう意味だ、ガンドルフィーニ」

ふふふ

仲がいいようですね

「慎二、これから二人と飲みに行くから
雪菜に晩飯は要らないと言っておいてくれ」

はあ、

「分かりました、伝えておきますね」

「ああ、頼んだぞ」

はいはい

「ってもう行くんですか？」

早すぎでしょう！

「ああ、財布を取りに來ただけだからな、じゃあ」

「はい、いつてらっしゃい」

……母さんが帰って来たら言っておきますか

S i d e O u t

S i d e 清吾

「いい子じゃないか、魔法の方はどうなんだ」

ガンドルフィーニが聞いてくる、

そうだな、

「魔法に関しては俺より少し良いぐらいだけど、体力やスピードに関しては大人顔負けだ」

「本当か!？」

驚くガンドルフィーニ

「ああ、このまま修業すれば中学生になるころには、かなり化けるぞ」

「ハハッ、じゃあ慎二さんと一緒に仕事できる様になることを期待してるよ」

「そうだな、期待していよう、…………お前が裏方に周ってもう十年近くなるな」

ッ、そうかもう十年近く経つのか

「お前の事だ、まだずっと訓練を欠かしてないんじゃないか？」

「そうだな、慎二との訓練で魔法を使うのが、懐かしく感じるわけだ」

体は動かしていたけど魔法はずいぶん久しぶりだったみたいだしな

「ガンドルフィーニも子供が生まれたんだろ、その所はどうなんだ」

「ああ、かわいい娘だ、そのせいで妻が、かまってくれないけどね」

苦笑いするガンドルフィーニ

「ハハッ、お前は子煩悩になりそうだからな、お預けしてるんじゃないか？」

笑う神多羅木

こうやってみんなで飲むのも久しぶりだな

今日ぐらいハメを外すか！

「よしッ！今日はのみまくるぞ！」

「そうこなくちな！」

飲んで飲んで飲みまくる、こんな機会そうそう無いからな！

S i d e O u t

第9話（後書き）

間桐慎二の獲得スキル

【ネギま魔法】：E -

ネギまの魔法を少し使える

今現在は

『魔法の射手・風の○矢』

『魔法の射手・戒めの風矢』

『薄めの魔法障壁』

【操影術】：E -

影を媒体とする魔法
今現在は

『○の影槍』

『薄めの影で作った防御壁』

【瞬動】：D -

通常時に50%の確率で失敗する

第10話（前書き）

慎二は基本的には戦いませんが避けられない戦い、
所謂イベント戦はあります

ただイベント戦でも、相手を倒すのを目的とするのではなく、勝利
条件を達成することを目的としていますので、戦闘？みたいな戦い
になります

第10話

Side 慎二

「父さん、父さんは『影を媒介した転移魔法』って出来ますか？」

あれが有ったなら、逃げるのがかなり楽になるんですけど、

父さんは使えないだろうけどやり方が分かれば、頑張って修業するんですけどね

81

「ん？影の転移か？一応できるぞ」

そつですかやっぱり分かりませんよね、すいま……………えっ？

「出来るんですかッ！転移魔法！教えてくださいよ！」

なんだ、言ってみるもんですね！、これで逃走用の技が増えます！

「それがな、慎二、……………一応って言っただろう？」

えっ？

「何か、欠点でもあるんですか？」

「9年近く賭けても、…40？四方の正方形ほどのゲートしか、開かん……………」

うわっ、ダメじゃんそれ

「そう、ですか、すいません、父さん……」

「一応、修業してみるか？、お前ならあるいは、俺より早く完成させる事が出来るかもしれんぞ？」

そう、ですね……、一応やるだけやってみますが、

「はい、一応やってみます、父さん」

もしかしたら、使える様になるかもしれせんし

そして、やっぱり、原作が始まるまでに完成させる事は、出来ませんでしたが、

それは後の話です

S i d e O u t

S i d e 清吾

――― (一年後) ―――

「慎二、慎二は身体強化の魔法は覚えたりしないのか？」

そのままでは、効率が悪いと思うんだが……、

「えっ、嫌ですよ、殴り合いなんか絶対しませんし、

そんなの覚えるくらいなら、魔法障壁を厚くしたり、魔法障壁の数を増やしたりするほうが絶対良いじゃないですか」

はあ、お前という奴は、そうだな

「慎二、身体強化は攻撃力を上げるだけじゃないんだ
身体強化は文字通り、『身体』を強化する、防御力や素早さも上がるんだぞ？」

こう言えば、

「さあ、父さんッ！僕に身体強化を教えてくださいッ！」

……………最近、慎二の扱い方が解ってきた、これは誇って良いことなのだろうか

……………やはり、呆れるべき事なんだろうな

Side Out

Side 慎二

「さあ、父さんッ！僕に身体強化を教えてくださいッ！」

そうでした、ネギまでは『身体強化』殴り合い』でしたからすっかり忘れてましたが、

脚力の強化もできるじゃないですか！

さすが、父さん！

「はあ、身体強化は基本的に『戦いの歌』と言われる、全身を強化する魔法と

『戦いの旋律』と言う身体の関節部分を強化して素早さをあげる魔法だ、どちらもメリット、デメリットがある

よく考えてから決めるんだな」

『戦いの旋律』？……………ああ！魔法世界編で酒場でネギに吹っ飛ばされた、えっと、バルガス？いえバルガスでしたっけ？

まあ、良いでしょうその人が使っていた魔法ですね

ふむ、

「メリット、デメリットは何ですか？」

「『戦いの歌』のメリットは全身をくまなく強化してくれることだが『戦いの旋律』ほど強化はしてくれない」

「『戦いの旋律』は『戦いの歌』より強化率が高いが、『戦いの歌』のような満遍なく強化はできない、身体の関節部分だけを強化して素早さを上げるだ」

ふむ、成る程、

「『戦いの旋律』ですかね、やはり」

「ふう、そう言っと思ったよ、良いか戦いの旋律は………（説明中）………と、まあこんな感じだやってみろ、まずは二倍からだ」

「ふむ、そうですね『戦いの旋律・二倍速』ッ！」

………

………「『戦いの旋律・二倍速』ッ！」

「………ああ、出来るようになったら言ってくれ」

「………はい」

「まあ俺も一週間近くかかったからな、魔力を大分感じ取れるようになったから一週間もかからんだろう」

せめて後一週間で覚えたいです……………はあ

ん？

『戦いの旋律』って使用者の素早さを上げる呪文ですよね？

『戦いの旋律』って 衛宮切嗣の『固有時制御』に似てませんか？

どちらも、二倍速とか言いますし、素早さが跳ね上がりますし！

ヤッバツ！みなぎってキターー！

これは覚えなければ、気合い入った！

そうだコンテNDERを起源弾を手に入れなければッ！

ああッ！こちらには魔術回路が無いんでした……………

しかし気合いが入りましたね、三日で覚えて見せますッ！

S i d e O u t

S i d e 清吾

なんだ？急に元気になったな、

しかしただでさえ速いのにな『戦いの旋律』なんか使われたら、こっ

ちも本気にならないとな、

中学2～3年になる時には追いつけなくなりそうだ、

何故か妙に気配の消し方も上手いし、逃げる才能に関しては、麻帆良で1番じゃないのか？

はあ……、まあ、どんな状況でも生き残れるように鍛えるだけだな。

魔法生徒としての仕事もあと4～5年で出来るようになるだろう

ガンドルフィーニが言っていた事がもうすぐ実現しそうだな

とりあえず慎二が『戦いの旋律』を出来る様になるまで、気長に待つか、

「ッ！、で、出来たッ！」

は？

……は、早ッ！

「ちょ、ちょっと見せてみるッ！」

………まったく、逃げる事に関する才能は高すぎるぞ！

Side Out

S i d e 慎二

「ッ！、で、出来たッ！」

ふっ、ふふふふふふッ！

出来たッ！出来ましたよッ！、

これこそ、僕の『F a t e』への愛の力ですッ！

やはり、興味の有ることになると、魔法も気合いの入りが違いますね、

「ちょ、ちよつと見せてみるッ！」

む、父さんが走って来ますね

「いきますよ、『戦いの旋律・二倍速』ッ!、」

タッ!

父さんの目の前まで移動します、というか、瞬動並に速いんですけど……

「ッ!、危なッ!急に突っ込んで来るんじゃない!」

ふふふ、これで瞬動を完璧に使いこなせるようになったら、

某兄貴の名言である

『お前に足りないものは、それは!

情熱・思想・理念・頭脳・気品・優雅さ・勤勉さ!そしてなによりもオオオオオオオッ!!

速さが足りない!!!』

が実際に言える、スピードの持ち主になれそうですね

ヤバッ！超楽しみです！

「はあ……、じゃあ実際に使って感覚を覚えるんだ、
今から回避訓練を始めるぞ」

ふむ、成る程確かに戦いで使えなかったら意味がありませんからね

とりあえず、少し離れますか、

「行くぞ、バル・バリ・バル・バーサーク、風の精霊20人。縛
鎖となつて敵を捕らえる。

『魔法の射手・戒めの風矢』！」

ちよ、20本とか生きなり多過ぎるでしょう……

……というか『魔法の射手』は 矢避けの加護 Rank Bのお

蔭で当たらないんですが……

まあ、少し遊びながら『戦いの旋律・二倍速』の調子を確かめますか

タツ！

タタンツ！

避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける避ける
ツ！

「見える、私にも敵（魔法の射手）が見えるぞッ！」

フウウウツハアアアツ！！

「コラッ！、ふざけるんじゃない！、まったく……まあその調子じやあ実際は使いこなてるみたいだな」

この調子でどんどん三倍速や四倍速も覚えて見せます！

S
i
d
e
O
u
t

第10話（後書き）

獲得スキル

【戦いの旋律】：C

二倍速まで自身の速度を上げる事ができる

【影の転移】：G

まだゲートを開く事すら出来ない

戦いの旋律が素早さアップ

戦いの歌が全体強化

うんぬんは作者の妄想です

単行本に書かれていたことを読んで『これってこういう意味じゃね？』と思って書いたので

本当かどうかは知りません

第11話（前書き）

戦いの描写が全然出来ません

ぶっちゃけ、シヨボーです

第11話

Side 慎二

と、まあ、こんなふうに過ごしてきた訳ですが、

結局『戦いの旋律・四倍速』は出来ませんでした。三倍速まではきたんですけどね

『影の転移』に関しては、もう4年になるのに30？四方のゲートしか作れませんが、

まあ、父さんよりは才能有るんでしょうが無いモノは無いと言ったのでしょうか？

ああ、後『影の刃』という魔法を覚えました…………… Fateで『間桐慎二』がやっていた地面を這う刃を飛ばすやつですね

明日からは中学生ですから、頑張って中学生の間にゲートを作りたいものです

それにしても、明日から寮生活ですか、

原作では女子寮が有るんですから、男子寮が有っても不思議じゃないんですけどね

運よく一人部屋を獲得することが出来ましたよ

それよりも一人部屋を手に入れたからには、ネット環境を整えて『株』をしませんとね……

『黄金律：A』の力で莫大な富を築きあげてやります！

もう、夢が広がりまくりですッ！

ただ、欠点があるとすれば、………もう、声が完全に『間桐慎二』になってしまったことでしょうか………

声変わり早すぎでしょう………

『うるさいんだよ！僕に命令するなよな！衛宮アッ！』

『くそッ！くそッ！なにが「私の宝具は最強です」だよッ！ライダーの奴ッ！』

『いいぜ、やってやれよ、ギルガメッシュ！』

……鬱だ

せめてもの抵抗として髪型はワカメではなく後ろに流した

ディルムツドや若い頃の臓硯みたいな髪型にしていますが、

……前に髪を下ろしてワカメにすれば完全に『慎二』です

はあ

「おい、慎二、何一人で百面相してるんだ？今日は大事な話があるんだって言ったろ？、行くぞ」

ええ、分かってますよ、行きま………って

「と、父さん！？今から行くんですか！？もう、夜中ですよ！」

「良いから行くぞ、早くしろ！」

まっ、待って下さい！

――――（移動中）――――

ここは、世界樹広場？あれ結構人がいますね？

ゾクッ！

ッ！、なんか嫌な予感がヒシヒシとするんですが？！

「あ、あの、父さん？」

いやいや、そんなまさか、

「今日からお前も、みんなと一緒に魔法生徒として、警備員として働いて貰うんだ、ほら、挨拶をしろ」

「ボソボソ（だっ、騙しましたねッ！父さん！）」

実の息子を騙すなんて最低ですよ！

「ボソボソ（騙してなんか無いさ、これは『大事な話』だからな、）」

グッ！

確かにッ！

「ボソボソ（逃げたらどうなるか……分かるな？）」

クウ！

「ど、どうもはじめまして、皆さんと一緒に働く事になりました、
間桐慎二です

よろしくお願いします」

「ふおっふおっふおっ中々礼儀正しい少年じゃのう、

直接会うのは初めてになるのかのう、麻帆良の学園長をしておる
近衛近衛門と言う、気軽に学園長と呼んで欲しいのう」

やはりエイリアンですか！危険な事はしたく無かったんですけど！

「他にも大勢おるが、挨拶は後回しにして、君の実力を計りたいと
思う」

「清吾くんからは、遊撃手として単独行動させるのが良いと聞いておるが、
なにぶん一人じゃと危険な仕事じゃからの、本当に大丈夫かどうか調べさせてもらう」

父さん！？そんな、みんなと一緒にの警備員で良いじゃないですか！？

「と、言うわけで高畑くんと戦ってもらうが、彼が認めるようなら遊撃手として存分に働いてもらうぞ？」

なッ！！デスメガネ相手とか冗談でしょう！？

「よろしく頼むよ、全力を出しきってね？」

グッ！ もう、戦うしか選択肢がないじゃないですか！

「では、始めるぞ、用意はいいかの？」

えっ、ちょ、待っ

「始めッ！」

ッ！？、とりあえず走り回って避けまくるッ！

タッ！

S i d e O u t

S i d e 学園長

ふおっふおっ、清吾くんは『素早さと気配の消し方はかなりの代物です』と、言っておったが、どれほどの代物かのう？

「始めッ！」

タッ！

む、スピードは中々じゃな、しかしそのままでは手痛いカウンターを喰らうぞ？

フェイントを入れて動き回っているだけでは、高畑くんはすぐに見切ってしまうからのう

決め手となる大技は使えないようじゃし

そろそろ高畑くんもあの速度に慣れてきた頃じゃろう

「フウッ！」

ヒュッ！

「グッ！痛ッ！」

ふむ、速いんじやが一人でまかすには少しばかり………のう

む、清吾くん？

「慎二ッ！本気を出せッ！このまま手の内を隠したままなら寮の一人暮らしは無しだッ！」

ほッ！中学１年生には中々厳しい話じゃのう

「うえっ！それは困ります……………はあ、仕方ありませんか、高畑さん、本気でいきますよ」

む、慎二くんの本気が、どれほどの物が見てみるか

タンッ！！

何ッ！速い！？

S i d e O u t

S i d e 慎二

「慎二ッ！本気を出せッ！このまま手の内を隠したままなら寮での一人暮らしは無しだッ！」

「うえっ！それは困ります……………はぁ、仕方ありませんか、高畑さん、本気でいきますよ」

一人暮らしのために犠牲になってもらいます

高畑さん！

タンッ！

今度は全力で走る！走る！走る！

タッ！

タッ！タッ！

(ライラ・ライル・ライド・ペルフォーン、『戦いの旋律・二倍速』
ッ！)

これでもう高畑さんと言えど僕の姿を見ることは出来ません

相手の目の前まで移動ッ！

すかさずバックステップ

やはり、高畑さんは気配で僕を探している様ですね

なら、分からなくするまでです

行きますよッ！

気配遮断、発動ッ！

S i d e O u t

S i d e 高畑

クッ！、 速いッ！

さっきまでとは、大違いだッ！

確かに、この速度ならそうそう負けることなど無いだろう

しかしまだ、気配を探ればまだ戦えッ！

気配が消えた！？

馬鹿なッ！クソッ！ もう目では見ることが出来そうにないな

いつか、必ず集中力を欠くはずだ、

落ち着いて気配を感じ取れるように、自然体で構える

来るといい、慎二くん、見極めてみせるッ！

S i d e O u t

S i d e エヴァンジェリン

何ッ！、気配が探れなくなった、だと？

「おい、茶々丸、あいつがどこにいるか分かるか！？」

「すみません、マスター速過ぎてセンサーで捉えられません」

なつ、茶々丸のセンサーでさえ捉えられない速度だと？

あの速さに、完璧な気配遮断か

本当に中学生か？

面白い、妙に隙だらけだと思ったら、あの動き、あまりにもちぐはぐだ

確か間桐清吾の息子の慎二と言っていたか？

ふ、中々面白い人間が入って来たものだ

しかし私の邪魔するようなら叩き潰すだけだ、

しかし、この私が捉えられぬほどのスピードか、

あの間桐清吾の息子なのだ、どうせ甘い奴なのだろう、手駒として使えないだろうか？

はあ、こつも十何年中学生をしていると暇で困る、

今度見つけたなら、少しからかってみるか？

S i d e O u t

S i d e 慎二

これで決まりですッ！

「ライラ・ライル・ライド・ペルフォーン、風の精霊5人。縛鎖と
なつて敵を捕ら
「そこかッ！」

えっ

「えっ、ちょ、あぶるばあッ！？」

ドンッ！ゴロゴロッ！

は、腹がツ！あれ？なんかデジャビュ！？

「攻撃する時は気配が消せないみたいだね、後、魔法は無詠唱を覚えてたほうがいいよ、位置がすぐバレるからね」

そういえば『気配遮断』は攻撃体制に移ると効果が下がるんですた………

それと、そう簡単に無詠唱が出来たら苦労しませんよ

「いやいや、危なかったよ、最後の魔法の時に気付けなかったらそのまま負けてる所だったよ」

くう、デスメガネハンパネエ

「学園長！彼なら大丈夫だと思いますよ」

「そうじゃのう、油断さえしなければ大抵の相手には勝てそうじゃ」

し、君には遊撃手として働いてもらっぞ慎二くん」

あっ

あああああッ！

結局一人で警備することになってしまったじゃないですか、そんなッ！

これは罠だッ！

戦いに負けたのに一人で遊撃手をやるだなんて可笑しいじゃないかッ！

「では、これから、警備員として頑張ってもらっぞ！」

バカなアアアッ！

第11話（後書き）

現在、中学一年生ですが茶々丸は生まれてることになってます

第12話（前書き）

前後半に分れます

第12話

Side 刹那

最後は見る事が出来なかったが最初のあの動き、

瞬動の様に見えたが何か違和感が……

「龍宮あの動きが見えたか？」

私は最初の動きしか見えなかったが、何か違和感がしなかったか？」

「私の魔眼でも最後はほとんど見ることが出来なかったよ、

多分、刹那が言っている違和感は動きが直線的ではないからだろう」

っそうか！瞬動だしたら小回りが効き過ぎてるんだ

………しかし、何故？

「なあ、龍「彼は瞬動を使っていないよ」み、っな、なんだと？」

どういう事だ？瞬動を使わずにあの様な動き、何等かのアーティファクトか？

「言った通りだよ、彼はただ走ってるだけだ、信じがたいが、な」

なッ！

「馬鹿なッ！、ただ走ってあれだけの速度が「出てるんだよ、本当に」………確かなのか？」

「間違いない、彼はただ走ってるだけだよ」

「最後の動きも同じだ。瞬動では無く身体強化を使って、走り回っているだけだ」

そんな……

「『お嬢様』が心配か？刹那」

……いや

「それに関しては特に無い、
彼はむしろこちら側の人間だし、あれ程の実力ならば、
逆に『お嬢様』を狙う関西の手の者を捕らえる事も出来る」

そう……

……問題は……無い。

S i d e O u t

S i d e 三 人 称

――（次の日）――

麻帆良女子中学校へと続く道のりをまるで『死んだ魚の様な目』をした、男子中学生がゆっくりと歩いている

その人物こそ、我等が間桐慎二である

「『我等が』って何ですか！？、っと言うか何で僕は一人で虚空に向かって叫んでるんですか……………」

不思議そうに頭を傾げる姿はまるで不審者のようだった

男子禁制の女子中へ向かっている理由はいかがわしい考えが有る訳では無く、しっかり理由があった

ホワン、ホワン、ホワン、ホワン

――（30分前）――

爽やかな朝の光に包まれながら

起きた慎二のもとに一通の電話があった

pullllll! pullllll!

「っはい、もしもどちら様ですか？」

「『ふおっふおっ、慎二くんか？わしじゃ』」

とてつもなく聞き覚えが有る特徴的な笑い声に、慎二のテンションが一気に下がった

「……………何で僕の携帯の番号を知ってるんですか？……………学園長」

怒りを押し殺せないまま、話す慎二

「『ふおっ？携帯の番号なら清吾くんに聞いたぞ？』」

（父さん…、何やってるんですか……………）

「『昨日伝え忘れていた事が有ったの、

学校の方にはわしが言っておくから今からわしの部屋に来てほしいのじゃ、

頼むぞ?』」

言いたい事だけ言っつて、電話を切る学園長

「えっ? ちょ、「『ガチャン、ツー、ツー』」……………学園長室の場所、僕知らないんですけど……………」

「……………はあ、鬱だ」

と、いう理由の元に学園長室へ、記憶の下に進む慎二

（確か原作だと、女子中に有るんですけどよね?、女子中の場所は案内板で確認したんですが……………周りの視線が痛い……………）

男子禁制の空間に踏み込む慎二の存在は、明らかな異物であり

……よってこの反応も不思議な事では無かった

「ちょっとアンタッ！ここは男子禁制よッ！さっさと出ていきなさいッー！」

（……とうとう突っ込まれましたか……しかしこちらには大義名分があります）

「すみません、こちらにある学え「さあッ！帰った帰ったッ！」ん………」

（話を聞いてくれませんかよこの人！？

ってアレ？オレンジのツインテにオッドアイ、そんでもって鈴の髪飾り………まさか………確かめて見ますか……）

「ああッ！、あんな所に高畑先生がッ！」

適当な方向を指差し、叫ぶ慎二

「えっッ！どこ、どこどこ？高畑先生ッ！？」

そして真に受け辺りを見回す、ツインテオッドアイ少女（仮）

「すみません、その黒髪の人、学園長室に行きたいんですけど場所が分かりますか？」

その隙を突き隣に立っていた黒髪の少女に聞く、内心では

（まあ、間違いなく『近衛木乃香』さんでしょうが）

等と考えているが

「ん〜？おじいちゃんの所にいきたいん？」

後、うちは『黒髪の人』やのうて『近衛木乃香』って言うんよ」

ほんわかした空気を醸し出す京都風の関西弁で話す少女

「近衛、おじいちゃん、……………つまり学園長のお孫さんで…」

（知ってるんですが…………、やはり『神楽坂アスナ』さんと『近衛木乃香』さんでしたか、……………初めて女性の原作キャラと話しましたね、

『エヴァンジェリン』さんや『桜咲刹那』さん、『龍宮真名』さんは昨日見たんですが話してはいませんからね…………

……………ちょっと感動しました

オリ主らしく幼なじみフラグとか期待してたんですが、そんなもの全くありませんでしたからね）

いろいろと悦に入っている様子の慎二

それを不思議そうに見る近衛木乃香と、まだ高畑教諭を探している神楽坂アスナ

「急にボーっとしてどうしたん？」

「ッ！いえいえ、何でもありませんよ？、それで学園長室の場所は分かりますか？」

慌ててごまかす慎二

「あつ、うん、わかるえ、案内したげよか？」

「そうですか！、じゃあ頼めますか？」

「わかったえ、まかしとき！」

見事に案内を頼む事に成功する慎二のもとに詰め寄る影が……

「ちょっとアンタッ！どこに高畑先生がいんのよッ！」

お目当ての人物を見つける事が出来ずご立腹のアスナである

「あゝ、あれは実は「おゝい慎二くん！、ゴメンゴメン、場所を教えて無かったよね？」へっ？」

まさにナイスタイミングで慎二の危機を（知らない内に）救った高畑が現れる

（ははっ、こういうのを嘘から出た真っていうんですかね？）

「たっ！、高畑先生ッ！」

「アスナくんも木乃香くんもすまなかったね、彼は学園長が呼んだお客さんだよ」

「いえっ、全然そんなことないですッ！」

一気にキャラが変わるアスナ（恋する乙女）

「慎二くんも悪かったね、一人で来させてしまって」

高畑がすまなさそうに謝る

「いえいえ、そんなことはありませんよ、気にしてませんので、早く学園長室に行きましょう」

せかす、慎二

「近衛さんもすみませんでした、高畑先生に送ってもらうので、案内はなくていいですよ」

「ん、ほうか？じゃあ学校あるから、先に行かせてもらっな？」

「はっ！待ちなさいよ、木乃香ッ！、それじゃあ高畑先生、失礼しますッ！」

走っていく二人組とそれを見る二人組、

「じゃあ行こうか？」

「ええ、行きましょう」

（学園長の用と言うのは何なんでしょうね？）

そうしてまた、二人も『私立麻帆良大学附属中学校』へと向かって
行った

S
i
d
e
O
u
t

第12話（後書き）

次回とうとう『エターナルロリータ』が登場します……………やっ
と慎二と絡ませれる

第13話

Side 慎二

「ここが学園長室だよ、それじゃ僕は担当クラスのHRがあるからね、失礼するよ」

「あつ、はい、案内ありがとうございました」

「気にしないでいいよ、呼んだのはこっちだからね」

そう言って去って行く高畑先生、しかし学園長は何の用があるんでしょうか？

昨日言い忘れた事、ですか……

まあ、直接聞けば良いでしょう。さて

コンッ！コンッ！

「ただ今着きました、間桐慎二です、入ってもよろしいでしょうか？」

とりあえず最低限の礼儀は必要ですよな

「うむ、開いておる、入って構わんぞ」

ガチャ！

「失礼します、ご用件があるという事で、伺いました用件とは？」

結局、思いつかなかったんですね、用件、何なんでしょう？

「用と言つのは簡単な事じゃ警備のローテーションを教えて置かなければと思つての、」

あつ

ああああ、そういえば聞いてませんでしたね、ローテーション、

「確かに、聞いてませんでした僕の担当は何時なんでしょう？」

「うむ、慎二くんは、まだ新米じゃからの来月から入ってもらう。
慎二くんに警備してもらう日は基本的には月曜日・水曜日・金曜日
じゃ」

まあ、確かに準備期間が必要ですよね、それと月・水・金ですか、
……週に3回もあるんですね……

「それと、慎二くんにはある人物と組んでもらう」

ん？

「僕は遊撃手じゃ無かったんですか？」

あれ？確か遊撃手と聞いてましたが、

「バカもん！いくら優秀じゃからといって一人でさせるかッ！、ちやんとフォロー出来る者もつけるわい」

ッ！学園長ッ！いまこの時ほど貴方を尊敬したことはありませんッ！貴方ちゃんとした教育者だったんですねッ！（凄く失礼）

しかしフォロー出来る人物ですか……………はて？どなたでし「じじいッ！来てやったぞ、学園長ともあるうものがHR前に生徒を呼び出すなど何事だッ！」よう……………

えっ、

「別にいいじやろう、どうせサボるつもりなのじゃろ？」

「ふんッ！まあそうだがな、でじじい、何のよ……………貴様は確か、間桐慎二だったか何故ここに居る？」

えっ、僕にきかれても………

「おお、そのことじゃ慎二くんはエヴァと組んでもらう」

M A J I D E ! ?

「理由をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

フォローとかしてくれませんよこの人、多分ですが！

「エヴァが、この学園に入った侵入者を1番に感知するからじゃ」

「相手の位置が分らんなら、遊撃手にならんからのう」

確か、学園結界にリンクしてるんではしたか？
いやしかしッ！

「それに茶々丸くんもおるしの、大抵のことは退けられる」

ああ、なるほどフオローの件は全部、茶々丸さんに任せるつもりです
ねッ！

アンタ最低だッ！

「……分かりま「何、勝手に決めてるんだッ！ガキの子守だなんて嫌だぞ私はッ！」した……ガキは無いでしょうガキは」

さすがにイラッ！ときますよ、今は

「ガキをガキと言って何が悪い、事実を言ったただけだ、それに私を誰だと思ってるッ！」

「まあまあ、エヴァ頼む、慎二くんの事を任せられるのはエヴァし

かおらんし、エヴァの下なら慎二くんは最大限の力を発揮出来るはずじゃ」

まあ、敵の位置がすぐ分かるというのはかなりの利点ですしね

「チッ！じじいッ！貸しーだッ！いいな」

「仕方ないのう、わかった貸しーじゃ」

あの、なんか僕の事なのに僕、全然絡めて無いんですけど……

S i d e O u t

S i d e エヴァンジェリン

クククッ！中々面白くなつたな、

じじいから貸し一つ手に入れたし、間桐慎二について直接本人にイロイロと聞くことが出来る

最初に断っておいて正解だったな

「行くぞッ！間桐慎二ッ！じじい、今日の授業は全てサボらせてもらつ、こいつに聞かなきゃならんことがイロイロあるからな」

「何が『今日の』じゃ何時もずっとサボつとるじゃろつに」

ふん、当たり前だ何年も中学生などやつとれるかッ！

「ちよつ、ちよつと待って下さいよ、僕はまだ学校が……………」

「じじいが適当に理由を作るだろう、さっさと行くぞ」

「いや、だから何処に？」

ええい、やかましい奴だ

「屋上だッ！四の五の言わずさっさとついて来いッ！」

まったくうるさい奴だ

――――――屋上――――――

「お帰りなさいませマスター」

屋上に上がった瞬間に茶々丸が出迎える

「ああ、今戻った、

ああ、こいつの名前は茶々丸だ、私の従者をしている」

「絡繰茶々丸と申します、はじめまして間桐慎二さん」

「ああ、これはご丁寧にも、間桐慎二で……って、あれ？名前言いましたっけ？」

「魔法生徒のデータはインプットしてあります、間桐さんのデータは昨日更新されました」

「ああ、そうなんですか（なんか、思ったよりロボットッ！と感じがしますね）」

自己紹介は済んだか

「まず、お前が他にどういう事を出来るか聞かせてもらっぞ」

他にも秘密を抱えてそうだから、一つ残らず吐いてもらうぞ、間桐慎二、

「他つて、僕は速く動く事と、気配を消すことしか出来ませんよ？」

はっ？

「いや、得意な魔法とかは無いのか？」

いやいや、さすがにあれだけということは無いだろっ。

「得意な魔法は影ですけど精々出来て『十の影槍』ぐらいですよ？」

なっ！

「ふざけるなッ！飯にも私と組む者がそんな雑魚でいてたまるかッ！」

ふざけおって、じじいの奴私を嵌めたなッ！

「特訓だッ！その辺の魔法使いごとき瞬殺できるくらいになってもらうぞッ！」

「ええッ！！」

当たり前だバカものめッ！

S i d e O u t

第13話（後書き）

エヴァとの特訓でもあまりの才能の無さに逆にエヴァの方が折れま
す

ネギは一ヶ月かかることを数時間で覚えて

慎二は一ヶ月かかることを数ヶ月かけます

第14話（前書き）

『幸運』A+を

『道具作成』A+
に変更しました

この作品の中では『道具作成』は自分の作りたい物の材料や設計図
が頭の中に浮かんでくる

という、設定です

第14話

Side 慎二

あゝ、暇です。ダリ〜です

えっ？エヴァさんとの修業ですか、ああ、ありましたねそんなこと

あれ？なんかこの言いまわし、デジャヴユ？

ああ、エヴァンジェリンさんだと長いんで、エヴァさん、と言う許可をとりました

エヴァさんとの仲は良好？です

ああ、エヴァさんとの修業の話でしたね、エヴァさんは厳し過ぎるんですよ

修業が厳しいッ！

やる気が無くなる

←

エヴァさんが怒る

←

さらにやる気が無くなる

←

←

エンドレス

という感じで、繰り返す内にエヴァさんが折れちゃいました

もう一ヶ月近く前の話です、

今ではエヴァさんの家でゲームしたり、ゲームしたり、ゲームしたり、と楽しく遊んでいます

ブブブブブ　ブブブブブ

「ああ、はい慎二ですエヴァさんですか？侵入者はどの辺りですか」

今は夜の警備員としての仕事をしています

何だか、もう慣れてきちゃいました

「『そうだな、だいたいAの4地点辺りださっさと終わらせて来い』」

はあ、だったら家に籠ってないで手伝って下さいよ
僕と組んでから楽だからって家に居てばかりで

「はい、はい、すぐ終わらせて来ますよ」

気配遮断、発動ッ！

S i d e O u t

S i d e 三人称

夜の帳があり、黒色に染められた森で、多くの異形の怪物がひしめき合う

「何や、またここかいな、諦めの悪いやつちゃのう」

「言つてやんなや、術者も必死やねんな」

「まあ、こっちはどうせ暴れるだけや、べつにいいやろ」

……………中々親近感が持てそうな奴ばかりだった

そのはるか後方にて札を構える中年男性が見える

この異形をこちらに召喚した存在の様だ

（こいつらに罠をさせて俺は『お嬢様』の確保だッ！）

「行けッ！」

命令を飛ばす男と

「ッシャア！いくでッ！お前らッ！」

その命令を聞き辺りの木々を吹き飛ばしながら進む異形達

異形達は麻帆良に侵入して行った

その背後に潜む一人の存在に気付かずに

S i d e O u t

S i d e 慎二

……と、まあ心の中でそれっぽいナレーションしましたが、

『鬼』達はほとんど行ってしまいましたね

ここに居るのは僕と中年男性の術者だけです

さあ、はじめますか

「よし、じゃあ俺は別ルートでいくギャッアッ!」

バチバチバチバチッ!

「か、あ、グッ!」

バタンッ!

さすが、麻帆良大学のマッド達がつたスタンガンを道具作成のスキルで改造した

『一撃必殺・痴漢抹殺用・ジェノサイドスタンガン改』です

呪術使いも一撃KOですね

pulllllll pulllllll

「学園長ですか？ 慎二です、関西呪術協会の手の者らしき人間を捕らえました、
そちらに送ります」

「『そうか、はあ、何時かは手を取り合わねばならんのう、わかつた送ってくれるかの』」

転移符を張って、

「転移ッ！」

……ふう、今日の仕事は終わりですかね

関西呪術が召喚した『鬼』は術者の魔力又は気を送って召喚させ続けているので

術者が居なければすぐに消えてしまいます

その特性を利用した術者を倒せば『鬼』も侵入者もどっちも倒せる
という

素晴らしい戦法を取っています

あ、転移符ですか？

黄金律を使って『株』でボロ儲けしてます、

最近は預金残高の0の数が10個を超えました

さあ、帰って魔道具を作成したりマホネットで魔法薬を仕入れたり
しないといけませんからね

さあ、帰ろ♪

S i d e O u t

S i d e E n d

飛ばしていたコウモリとの視覚の共有を切る

はあ、まったく真面目に修業したなら少なからず強くなるはずなのに、なんでああもやる気が無いんだ

「マスター？どうかしましたか？」

「いや、何でもないあのバカの様子を見ていただけだ」

「そうですか…、慎二さんは……」

「何時もどつり怪我どころか戦闘すらしてない、不意打ちで終わんだ」

もっと、こつ、誇りと言うものは無いのかッ！

………無いんだろうな………

「そうですか、では大丈夫ですね」

「ああ」

と言うか何故、茶々丸の奴はあいつと妙に仲がいいんだ？

クソッ！闇の福音の手下（エヴァだけがそう思ってる）が不意打ちしか出来ん雑魚では話しにならんッ！

これは？

ふむ、【褒めて伸ばす子供の育て方】か、

ふむ、まず無闇に叱ることはせずしっかりと……………

……

「（ああ、マスターがあんなに真剣に）」

S i d e O u t

S i d e 慎二

ふう、やることは有りませんし、帰って熱いお茶でも飲んでから寝ますか

「慎二くんッ！怪我なんかは無いかい？有ったなら治癒魔法をかけるが？」

おっ、あれはガンドルフィーニ先生じゃないですか

「いえ、別にありませんよ、ガンドルフィーニ先生」

「そうか、それは良かった。……………しかし、まだエヴァンジェリンと交流しているのかい？
本当に危険は無いのかい？」

ふう、心配性ですね

「そんなにエヴァさんが信用出来ませんか？」

「いや、…信用はしているよ、彼女は今まで13年近く麻帆良の平和を守ってきている、それは信じているが、訓練など何かとさじ加減が出来ず怪我をさせてしまうかも知れないだろう？」

ああ、そういう事ですか、

今は殆どしてませんが、最初の訓練なんかは逃げまくってたらエヴァさんがキレて『闇の吹雪』を連発されましたからね

「大丈夫ですよ、心配ありません、話してみると中々面白い人ですから」

「そうか、ならいいんだ。気を悪くさせてしまったね、すまない慎二くん」

「いえいえ、僕は気にしてませんから」

「じゃあ、私は学園長に用があるから先に行くよ、また明日」

「ええ、お先に失礼します」

ガンドルフィーニ先生も心配性ですね、まあ、娘さんが居るから過剰に反応するのはわかりますが

ああ、結構時間かかりましたね、さっさと帰りますか

明日も早いですし

S i d e O u t

第14話（後書き）

原作までまだかかる……………
はあ

第15話

S i d e 慎二

週に3回ある夜の警備、大抵は侵入者を察知するまではエヴァさん家で待機です

そういう時は時間を持て余すので漫画を読んだり、ゲームをしたり、茶々丸さんにカロリー控えめの夜食を作ってもらって食べたりしています

これがまた美味しいんですよ、さすが茶々丸さんです、胃袋を掴んで放さないというか

まあ、それは置いて、

今はエヴァさんとまったりゲームをしています

『チェックするわよ

覚悟なさい

イケてないわねえ 全然ダメねえ

ちよつと話聞してるのぉ？

もう我慢できない 出直してらっしゃい 顔を洗ってらっしゃい
死んでおしまい！ アバンギャルド！ サイケデリック』

.....

「.....エヴァさん、.....もうちよつと手加減してくださいよ」

「ハッ！なんで私が手加減などしてやらねばならんのだ」

いやいや、常識的に考えて今のは無いでしょうッ！

「始まって2分で11連鎖とか本気で勘弁してくださいよ！？、何
ですかアレッ！僕は

『チェックするわよ

覚悟なさい

イケてないわねえ 全然ダメねえ

もう我慢できない

サイケデリック

」

までしか見たことありませんよッ！

強すぎるでしょうッ！

普通は無理でしょうあんなのッ！

「フンッ！あんな物は少しの時間と頭を使えばどうにでもなる、

世の中には始まって1分で画面の見えない所を使って15連鎖以上
する奴だっているんだ」

それはもう人間じゃ無いでしょう……

「別のやりましょう、別の」

「なんだ？逃げるのか？」

むっ

「いいでしょうやってやります、後おしゃね」ウズはやめて下さい
掛け声がムカつくので」

「ハッ！、10年以上やり続けた力をみせてやるわッ！」

.....

.....

.....

「.....言って悲しくありませんか？」

「.....少しな」

あ、あは、あはは、

pulllllll pulllllll

「ッ！」

ガチャ

「はい、慎二です、学園長ですか？」

エヴァさんから侵入者が来たとは聞いていませんか？」

「『そうじゃないッ！刹那くん達がピンチなんじゃッ！今すぐ助けに向かつてくれッ！』」

ッ！？

「場所は何処ですかッ！」

「『G・5地点じゃッ！急いでくれッ！』」

なるほど、

「では、行ってきますエヴァさん」

「フン！さつさとかたずけて来い」

ここは、少しでも心配の言葉をかけるべきでしょうに

「ライラ・ライル・ライド・ペルフォーン

『戦いの旋律・二倍速』

……………急ぎますか

Side Out

S i d e 刹那

ドンッ！

グッ！

クソッ！体に力が入らないッ！

それに気も練ることが出来ないだとッ！

さっき、張られた札のせいか……ッ！

「ひひっ、なんで気が練れねんだッ！って顔してるな、その札は特別製だ。」

気はだけじゃなく体全体に力が入んねえだろ？」

クソッ！剥がれないッ！

「無理無理、そう簡単には剥がれねえよ、それにしても……」

ゾクッ！

体が木に押し付けられる

体に力が入らず抵抗することができないッ！

「貴様なにをするつもりだッ！？」

この様な体制にされてされる事

考えたくはないが……、

「ああん、そんなもん分かってんだろ？、

ひひっ、俺はどっちかと言つと、

俺の式達の相手をしてる姉ちゃんの方が好みなんだがな」

チッ！やはりか、この…

「……………下種がッ！」

「ひひッ！その下種にヤられるカスに言われたくねえなあ」

クソッ！チャンスを待つんだ。落ち着いて油断した所で切り「げっ
ひゃあッ！？」

バチバチバチバチッ！

え？

「あゝ、大丈夫ですか？桜咲さん」

私が顔を上げると、何時だかに見た優しげな顔があった

……………間桐……………さん？

S i d e O u t

Side 慎二

「あの、大丈夫ですか？桜咲さん」

いや、間に合って良かった。赤松ワールドにもこういう下種な奴はいるんですね

「えっと、これは？」

混乱してますね、

まあ気が付いたら敵が気絶してたら

誰でも驚きますか

「学園長から要請が有って来たんです、お怪我は？」

「あ、いや、大丈夫です、ありがとうございます」

おそらく桜咲さんの腕に張ってある、お札が今回の原因みたいですね

……剥がしますか

「このお札、剥がしても良いですよね？」

こついうのは張られた人以外だと直ぐに剥がれるっていうのが基本です」

……ですよね？

「あ、はい、お願いします」

ベリッ！

ほら、簡単に剥がれましたよ

「本当にありが「無事かッ！刹那ッ！」と……龍宮か、もう大丈夫だ、間桐さんに助けてもらった」

ん？龍宮さんも来たみたいですね

急いで来たようですが、体中、木か何かに擦った様に傷だらけですよ

「そうか、良かった。」

あの式を操っていた術者を倒してくれたのは貴方だったのか、
ありがとう、助かったよ」

落ち着いて、冷静になったのでしょうか、こちらにお礼を言う龍宮さん

「いえいえ、別にお仕事ですし

ああ、後、龍宮さんお願いしたい事があるんですが」

これは中々に重要な事ですよ

「何かな？、今回は助けられた事だし、私に出来る事なら言うてくれて構わないよ？」

このお願いが通ればかなり助かるし新しい逃走技もできますしね

「武器、というか兵器を売ってくれませんか？、ちゃんと金は払うので」

主にスタングレネードとか障壁破壊用のアイテムとか

「それくらいなら構わないよ、ちゃんと代金は払ってくれるんだろ
う？」

「当然ですよ」

僕を物盗りか何かかと、思ってるんですか

「なら、構わないよ」

よしッ！これで逃走用の技が増えますッ！

とりあえず学園長に報告して二人の無事を知らせますが、

「立てますか？、桜咲さん」

未だに木に寄り掛かっているからもしかしたら、まだ、立てないの
かもしれませんね

「あ、もう大丈夫です、改めて本当にありがとうございました」

「気にしないでいいですよ？、僕は気にしません」

本当に大丈夫そうですね

それでは

ピッポッパッと

pulllllll。 pulllllll

ガチャ

「『もしもしッ！間桐くんか？二人はどうだったのじゃッ！？』」

「学園長ですか？落ち着いてください、

桜咲さんと龍宮さんは無事です、安心してください」

「『ふう、良かったわい、何か有ったらと心配しておったのじゃ、二人の怪我の様子はどうじゃ？』」

ええっと、

「二人とも少し、切り傷があるので

学園長室に治癒魔法が使える人を連れて来ておいってください、これから向かうつもりなので」

女の子の体に傷が残ったりしたら大変ですからね

「『あいわかった、それでは頼んだぞ?』」

「任せてください、」

ちゃんと学園長室まで送りますよ」

「『うむ、ではまた後での』」

「ええ、また後で、」

ガチャ

ふう、報告は済みましたし、後は一人を送るだけですか

「では、学園長室に向かいましょうか、桜咲さん、龍宮さん」

振り向いて二人に言う

「はい、わかりました」

「ああ、行こうか」

これで今週の仕事は終わりましたね

ふあ~~~~あ、
.....眠、

S i d e O u t

第15話（後書き）

刹那フラグ？

いやいや、刹那は『このちゃん』の嫁でしょうっ？

第16話（前書き）

後書きを見てねッ！

第16話

『凝固凝固凝固アムルバス無理無理無駄無駄ぎひひひひ』

ガツガガガッ！

『瞬間的な精神の集中によって発生する莫大な魔素の暴発がッ！！』

ガガガッ！

『価しないぞ』

ダンッ！ガッ！

『腐れ』

ガガガッ！

『這え』

ガガガガッ！

『進め』

ガッ！ガンッ！

『来い』

む、……何か電波が

「おい」

ああ、こちらにも有りましたよ？BLAZBLUE

………何故か間桐慎二になってから妙にアラクネが使い易いんです……

「おい、」

………やはり、蟲繋がりでしょうか？

「おいッ！慎二ッ！」

「ッ！？………何ですかエヴァさん？」

急に耳元で叫ばないでくださいよ、耳がキーンってするじゃないで

すか

「『何ですか』、じゃないわッ！何だこのクソゲーッ！」

なっ失礼なッ！

「『BLAZBLUE』はクソゲーなんかじゃないですよッ！面白いじゃないですかッ！」

「お前はなッ！ボコボコにされてる私は全然楽しくないわッ！

何だ100ヒット以上って、こんなもんだのイジメだろうがッ！

もう少し手加減しろッ！」

「ぶよぶよの時は全然手加減してくれなかったじゃないですか」

あの後、1回も勝てなかったんですよ？

「格ゲーと落ちモノはジャンルが違うだろうがッ！

落ちモノは頭を使えば出来るが、格ゲーは慣れるまで時間が掛かるだろうがッ！」

「もう何回もしてるじゃないですかッ！」

そもそも初心者の癖にレイチェルを極めようだなんて片腹痛いですよ」

思わず立ち上がって、怒鳴ってしまう

「うるさいッ！、一目で気に入ったんだ、別に良いだろうがッ！」

エヴァさんも同じく立ち上がって、怒鳴り合う

ヒュウウウウッ！

「「寒ッ！」「」

慌てて炬燵に転がり込む、いきなり立ち上がったせいで体が冷えてしまいました………寒、

「まったく、冬休みになったから、修業をつけようと呼んだのに、何故ゲームをしてるんだ」

と炬燵に入りタレながら言うエヴァさん

「何故でしょうね？」

「お前が全くやる気を出さないからだろうがッ！１年前となんら変わらんぞッ！」

失礼なッ！変わりましたよッ！逃げ型も上手くなりましたし

影を体に纏って防御力や素早さを上げたり出来るようになりましたよッ！

……………道具作成のスキルを使ってイロイロとネタに走ったりしましたが……………

ああ、後、今は中学２年生の冬休みになります、

おそらく後数ヶ月で『主人公』が麻帆良にやって来る事でしょう、

……エヴァさんはまだ、知らないみたいですね、

「どうした？急に真面目な顔をして、気味が悪いぞ」

……いや、酷いですよエヴァさん………

しかしもうすぐ原作入りですが、

少しでも『主人公』に強くなって貰って『ハッピーエンド』に導いて貰わないといけませんからね、

その為なら多少なりとも手伝わないこともありませんよ

「む、侵入者だ、J-9地点に行ってこい慎二」

ええ、このクソ寒いなか、ですか？

「いやですよ、この約2年間、1回も仕事してないじゃないですか、エヴァさんが行って下さい」

「主人を顎で使うなど何事だッ！」

怒鳴るエヴァさん

いや、主人って

「主人も何も仮契約すらしてないじゃないですか、ほらさっさと行つて下さい」

「貴様ッ！私をこの聖域から追い出すつもりかッ！この悪魔めッ！」

いやいや、何故悪魔？それより

「吸血鬼が聖域に居るなんておかしいですよ、GO！、行つて来なさいッ！」

そうやって言い合っている内に

p u l l l l l l p u l l l l l l

「『慎二くん、侵入者を捕まえに行って欲しいのじゃが』」

……え〜、このタイミングで普通電話なんかしないでしょう

「学園長、侵入者さえ捕まれば別に僕じゃ無くて良いですよね？」

学園長に確認を取ります

「『む、別に構わんがエヴァはそうそ

ガチャ

ソッコーで切りますその後、

ピッポッパっとな

pulllllll

pulllllll

「『間桐さんかい？今侵入者を捕らえた所なんだが』」

「龍宮さん、J-9地点にいる僕の分の侵入者、捕まえてきてくれませんか？」

「『……間桐さん……、いくら外が寒いからって、200万だします』……安心して任せてくれ間桐さんッ！』」

これで安心ですね、

ん？、龍宮さんとはいい仲ですよ

主に、金払いの良い客と武器屋の店主的な

200万ですか？そんなもの僕にとっては軽く支払える額ですよ

ユニセフとかに年間、億単位で寄付してますから

おそらく僕ほど世界に貢献している魔法使いはいませんか？

ある意味では確実に

『立派な魔法使い』ですよ、

「おい、慎二、馬鹿か貴様？」

「こんなもの僕にとっては大した出費ではありませんよ？エヴァさん」

「そういえば、お前は大金持ちだったな、……………無駄な使い方だな」

「有意義な使い方と言って下さいよ、有意義と」

しかし、原作が始まったら出来る限り死ぬような目には会いたくありませんね

まず、最初の山場は修学旅行ですか、とりあえずワイハく辺りに行って回避

ヘルマンの時はコンサート会場にさえ行かなければ回避可能

麻帆良祭の時は原作キャラに任せてれば何とかなるでしょう

何より、魔法世界編は死んでも回避しないと

本当に死んじゃいますからね

しかし何よりも注意しなければいけないのが『オリ主』ですね、

もし『主人公』に双子の兄弟とか居たら最悪ですからね

何故か、双子の弟という存在は兄よりも強いですからね。

……無いでしょうね

第16話（後書き）

『オリ主』は出てきませんッ！

ただ慎二が不安に思っただけです

BLAZBLUEのアラクネってメチャメチャ強いんですよね？
得にアンリミテッドの方は

第17話

Side 慎二

「手伝え、慎二」

…………へ？

エヴァさん家に着いた早々に一言宣言されました、というか命令なんでしょうか……

「えっと、具体的には何を手伝えば良いんでしょうか？」

一応、考えられる事はありますが、僕に言っても意味が無いでしょうし

「もちろん、ぼーや、つまりネギ・スプリングフィールドの血液を奪う事に関してだ」

やっぱりですか、しかし、戦闘力の無い人間を連れて行っても意味無いでしょうに

そもそも、僕が戦いが嫌いなのを忘れてませんか？、僕は『痛いのも

苦しいのも辛いのも嫌』なんですよ。

ネギくんって原作を見る限り『賢い子供』ですし、絶対に手加減とかしてくれませんか？

多分、周りの魔法使いの人は皆、自分と同じ位の障壁を張っている
と思っ

普通に全力で攻撃して来そうじゃないですか

「協力してもらっぞ、これでこの忌ま忌ましい呪いを解けるッ！」

「これから、どんな事をやるつもりですか？」

というか、何処までやったかが重要なんですけどね

「何、適当にクラスメイトの血を吸うだけだよ、
魔力を残せば、確実に調べにクラスメイトが襲われた現場に来る、
そこを襲えばいい」

成る程、つまり佐々木さんを襲う前ですか、
男子中に女子中の情報は殆ど入って来ませんからね

つまり、明日から『桜通りの吸血鬼編』が始まるということですか

えっ、今までの原作イベント？、

イベントの発生場所は女子中ですよ？

無断で入ったりしたら

高畑先生にO H A N A S H Iされちゃいますよ、

仮にも高畑先生に見つからなくても

新田先生にS E K K Y Oされてしまいます

それにしてもネギ先生ですか……………

「成る程、理由は分かりました」

「ああ、それじゃあこれから打ち合わせを

「だが断るッ！」

何ッ！」

1回言っただけで見たかったんですね『だが断るッ！』いや、満足です

「どついう事だッ！下僕ッ！」

いや、下僕って、あんた

「麻帆良でそんな事をすると益々立場が悪くなりますよ？」

それに学園長辺りが裏で何か考えてるでしょう

そんな、自分から罠に飛び込む様な真似はしたくありませんよ」

もし、エヴァさんに加担すれば絶対に後で

『桜通りの件で』って言われてこき使われるでしょう

容易に想像できます

「む、確かにそうだがそんなもの、解呪さえしてしまえばどうにでもなるッ！」

それが無理なんですよね、何らかのイレギュラーが無い限り100%の確率で負ける事が解ってるんですから

どんなに追い詰めても、途中で学園長の手の者から横槍が入りますし、

「そもそも、桜通りは女子中の校区内じゃないですか、嫌ですよ僕、不審者の称号を貰うのは」

何よりも怖いのは、女子中校区内での『武装解除』ですね

女子中校区内にいる、全裸の男子中学生、

………一瞬でタイーホです、人生終了のお知らせですね

「そもそも、エヴァさんは油断や慢心が在りすぎですよ
そんなんじゃない勝てる者も勝てません」

真面目にやれば負ける事なんて無いのに、油断して大事な所で凡ミスするんですね

………遠坂？………いや、ギルガメッシュ？
………どっちもか、

「なッ！油断では無いッ！これは余裕と言う物だッ！」

焦った様にまくし立てるエヴァさん
またギルガメッシュみたいな事言っ

「まあ、僕は絶対に協力しませんよ？厄介事は嫌ですから」

キツパリと宣言してやります、
原作を近場で見たいという気持ちが無いわけではありませんが
やはり、厄介事は嫌です

エヴァさんは少し啞然とした後、怒り狂った様に

「解ったッ！解ったよッ！、
良いだろう。
完全に復活したあかつきには『真祖の吸血鬼』としての力でギャフ
ンと言わせてやるッ！」

「ギャフン」

「~~~~~ッ！？、さっさと出てけッ！
次にこの家に来て良い時はお前をボコボコにする時だけだッ！」

ダンッ！

叩き出されてしまいました、
しかし今まで時間が空いた時は、いつもエヴァさん家に行ってまし
たからね、

.....やることが無い、暇

數日後

[illegible]

「はい、もしも慎二ですけど、どなたですか？」

こんな日に電話なんて珍しいですね、誰でしょう？

「間桐さんですか？ 絡繰です」

マスターの事で頼みたい事があるのですが」

「はあ、何でしょう?」

珍しいですね、茶々丸さんから電話なんて、初めてじゃないでしょうか

頼み事……何でしょう？

エヴァさんに関わる事だと

…………… ああ！風邪の事ですか

「『マスターが風邪を引いてしまったので、薬を取りに行きたいのですが

その間、マスターのお世話を頼んでも良いでしょうか？』」

ふむ、出来ればネギ先生と会うことはしたくないですからね、

「あの、す」『間桐さんしか頼める人が居ないのです、お願いします。間桐さん…』「…………… 任せて下さい。

今は暇ですから、大丈夫ですよ」

「『ありがとうございます間桐さん、では待っています』」

…………… やってしまいました、しかしこれは仕方ない事でしょう
茶々丸さんに、あんなふうに頼まれたら誰だって断れませんよ

仕方ありません、ネギ先生が来たときは居留守を決め込みますか

…………… (移動中) ……………

……………

私、慎二さん、今あなたの家の前に居るの

と、いう訳で、エヴァさん家に到着です

ピンポン

「慎二ですけど、来ましたよ、茶々丸さん」

とインターホンの傍にあるマイクに話す

「『今開けます、少々お待ち下さい』」

と茶々丸さんの声が聞こえて来ました

早いんですね、もしかして待っていてくれたんでしょうか

ガチャ

「ようこそ、おいで下さいました慎二さん」

「まあ、エヴァさんを一人で置いていく訳には行きませんかからね」

「すみません、今から薬を貰いに行くので、マスターのお世話をお願いします」

「ああ、はい。分かりました、とりあえずエヴァさんの所に行つて
ますね」

そのままエヴァさんの部屋に真つ直ぐ進み、扉を開けます

「エヴァさん、生きてますか？お見舞いに来ましたよ」

そこには、毛布に包まれているエヴァさんが苦しそうにしている姿
がッ！

「何勝手に入ってるんだ……ケホッ…この馬鹿が」

「茶々丸さんに薬を取りに行く間の世話を任されたんですよ」

「ケホッ、茶々丸の奴、余計な…ケホッ…事を」

「ほら、さっきから咳が出てるじゃないですか、大人しくしてくだ
さい」

そう言ってエヴァさんを寝かしつける、

「眠くないんだ…ケホッ…それよりもケホッ…腹が減った…何か作れ」

こんな時でも態度が変わらないとか、何処まで体に染み付いてるんですか……

…風邪の時はやっぱりお粥ですよ

「卵粥で良いですよ？」

「卵多めでな……ケホッ」

「はいはい」

そのまま部屋を出てキッチンへ行きます。
卵粥ですか、中々作る機会なんて無いですからね
上手く出来るでしょうか？

カチンッ、カチャ、カタカタ、コトコト、

………タターンッ！

『慎二特製卵粥』

を手に入れた

さっさとエヴァさんに食べさせてあげますか
そのままエヴァさんの部屋へ

「出来ましたよ、卵粥」

「遅いわ…ケホッ、喰わせろ」

はあ、何で一々偉そう何でしょう？
これも一種の才能でしょうか？

「はいはい、ホラ、あーん」

エヴァさんの口に卵粥を近ずける

「むッ！、アッ！ア、熱いわ、アホッ！
ゲホッゲホッ！」

真っ赤な顔をして怒鳴るエヴァさん

む、そんなに熱かったですか？

「わがままですね、なら自分で食べたらどうですか」

「下僕が主人の世話をするのは当たり前だろうが」

ま、まだですか…

「下僕になったつもりはありませんよ、フーフー、はいあーん」

今度は適度に冷ましてからエヴァさんの口に持っていきます

「むあー、ん、茶々丸の方が美味しいな、ほら次だ早くよこせ」

「茶々丸さんと比べないで下さいよ、フーフー、はい」

なんて言うんでしょうか？

大人しくお粥を食べるエヴァさんが妙に愛らしく見えます

この、胸の奥から湧き出るこの感じ

まさか、これが『萌え』でしょうか？

何と言うか、癒されます

「何だ、急にニヤニヤして、気味が悪いぞ」

む、少しからかってやりますか

「ふふ、なに、エヴァさんは可愛いなあって思いまして」

「ぶふっ！ふざけた事を言うな、殺すぞッ！ゲホッ」

顔を真っ赤にして可愛いですねえ

……ずっと風邪を引いて、居てくれないでしょうか？

やっと食べ終わりましたか

「で、風邪を引いている、という事は血を吸うのは失敗したんですね」

「グッ！」

「どうせ、調子に乗って不意を突かれたんでしょう？」

「グアッ！」

悶えるエヴァさん、ヤバイ

……… 凄く……… 楽しいです……

「あ、あれは、その」

慌てて取り繕おうとするエヴァさん

「それでは僕は、この食器を洗ってきますね」

「あ、おいッ！、待て」

「病人は休んでなさい、クスクスッ」

そのまま、キッチンに行って食器を洗います

ふう、ガチャガチャ、シャー、ガチャガチャ

ピンポーン

むッ！とうとう来ましたかネギ先生、

僕は貴方の対応に『居留守』を選択します

ピンポーン

ピンポーン

「『あれ、おかしいな。此処に居るはずなんだけど』」

ガチャッ！

「『あれ？開いてる、お邪魔しますよ』エヴァンジェリンさん？』」

………おいしいッ！

おかしいのは貴方の頭ですよッ！

何勝手に入って来てるんですかッ！

それでも自称『英国紳士』ですかッ！

そんなんだから影で『変態紳士』なんて呼ばれるんですよッ！

普通は勝手に入ったりは………長谷川さんという前例がありましたね………

「あれ？貴方は誰ですか？」

そんな、聞いて当然、みたいな顔して言うてんじゃないですよッ！
バカですかッ！？バカなんですか？

頭おかしいでしょう

「それはこちらの台詞です、何勝手に入ってるんですか」

今の僕に間違った事は言っていない………居留守の事以外は

「あわわ、すいませんッ！エヴァンジェリンさんに用があった者で
………」

だからと言って入って来ないでくださいよ

「エヴァさんは、風邪で寝込んでます、僕はエヴァさんの友人ですよ」

「え！？真祖の吸血鬼が……」
ガチャ

「すみません。遅れました、慎二さん」

茶々丸さんッ！ナイスタイミングです
貴女は神かッ！

というか、関係者か、確認出来て無いのに『真祖の吸血鬼』なんて
言っちゃダメでしょうッ！

「すみませんッ！茶々丸さん急用が出来てしまいましたッ！行っても
良いですかね？」

此処から脱出する事が1番大事ですからね

「ええ、構いません
元々無理を言ったのはこちらですから」

「それでは、失礼します」

「えっ！？あのー」

ダッ
シュッ！、
ダッ
シュッ！

[illegible]

ふう、顔を見られてしまいましたか、

巻き込まれる事は避けたいんですが……

まさか勝手に入って来るとは思いませんでした

はあ、何か幸先わるいですね

Side Out

第17話（後書き）

ネギくんは茶々丸さんが晩御飯の仕込みをしている間に

ちやっかりエヴァさんの記憶を覗いてます

というか、原作の長谷川の話で

開いてるからと言って勝手に女の子の部屋に入ったら最低だろ

と思ったのは自分だけじゃないはずですよ！

第18話（前書き）

戦いはありますが
少ないしシヨボいです

第18話

Side 慎二

現在、大停電が始まって2時間ほどたった所です
麻帆良大橋にて気配遮断を発動しながらネギ先生とエヴァさんを待
っています

僕が此処に隠れている事を知っている人はいません

やはり、原作で最初の山場ですからね
これを見学しないなんて嘘というものです

停電している時に麻帆良にやって来る侵入者を捕まえねばなりません
それは、僕が道具作成のスキルで作った『紙形慎二くん』が頑張っ
ている事でしょう

『紙形慎二くん』は、
黄金律を使って築き上げた莫大な額の金と
道具作成のスキルを使い改造した『身代わりの紙形』
で作った身代わりです

元々ある『身代わりの紙形』を魔改造して本人とほぼ同じ能力を持った人形です

本当はもつと強いのが作りたかったんですけど

材料が全然足りないんですよ

道具作成のスキルも万能では無いということでしょうか？

なお、値段に換算すると1000万を超えています

……と、まあ説明しているうちにネギ先生とエヴァさんが来たみたいですね、

まだ停電してから2時間ほどしか経ってないんですが？

ん？

あれ？

何かネギ先生すっごいボロボロなんですけど……………何故？

「『闇の吹雪』ッ！」

って、ネギ先生吹っ飛んで来ましたッ！

「この私からここまで逃げる事が出来たことは褒めてやろう、しかし、これで終わりだ、……………その罠も必要はあるまい？」

「ッ！？」

何か妙なカリスマオーラを醸し出しているエヴァさん

あれ？エヴァさんが格好イイ、なんで？

って言うか、原作では引っ掛かった罠に気付いてるんですけどッ！？

「そ、そんな…………」

「終わりだ、リク・ラク・ララック・ライラック、来れ氷精、闇の」

「いけないッ！マスター、戻ってッ！」

焦った様に叫ぶ茶々丸さん

「予定より停電の復旧が早い！マスターッ！」

あれっ？復旧はやッ！なんで？

「バカなッ！まだ2時間以上あるんだぞッ！？」

バシンッ！

「きゃんッ！」

あ、でもこの後でネギ先生がエヴァさんを……………

ってアレッ！？ネギ先生、

気が抜けたのか気絶してるんですけどッ！

エヴァさんはどうするんですかッ！？

え！、まさか僕？

そのまま落下していくエヴァさん、
茶々丸さんは間に合いそうにない

「ああッ！もう」

原作とズレてばかりなんですけどッ！

S i d e O u t

S i d e 三 人 称

「 」（ 2 時 間 前 ）

夜遅く、麻帆良の大浴場で動く三つの影があった

「エヴァンジェリンさんッ！

……どこですか？

まき絵さんを放してください……！」

生徒を救いに来た、ネギ・スプリングフィールドと

「よく来たな、ぼーや

安心しろ、佐々木はぼーやを呼ぶための存在だ
すぐに解放するさ」

（ああ、そうだ、用があるのはぼーやだけだからな）

『闇の福音』と呼ばれた頃のエヴァンジェリンがいた

「あなたは、どなたですかッ！？」

明らかに雰囲気をぶち壊す発言をするネギをエヴァは冷たい目で見下し言った

「私の夢を覗き見たなら、分かるだろう?」

「ま、まさか、エヴァンジェリンさんッ!？」

いまさら気づき、驚くネギ、それを鼻で笑いながら、

「ああ、本当なら少し遊んでやるんだが、これ以上、あいつに呆れられる訳にはいかんからな、下僕に呆れられる主人など最低だ」

そう、宣言する

「あいつ?下僕?」

急に言われた発言に疑問をもつネギ、しかしそれを

「ぼーやは知らなくてもいいことだ行くぞ?」

特別に『闇の福音』の力を見せてやろう」

「む、僕が勝つたら悪い事はやめてもらいま」

あまりにも場違いな発言を続よつとするネギ、しかしそれを

ゴッウウウウッ！

莫大な魔力の奔流が遮った。

「なッ！」

「茶々丸は手を出すなよ、アレは私の獲物だ」

「はい、マスター」

「そら、行くぞ、リク・ラク・ラック・ライラック、氷の精霊6
1頭、」

「ラス・テル・マ・スキッ！、って、61ッ！？」あまりの数に詠
唱の途中で意識を逸らすネギ

「遅い。集い来たりて、敵を切り裂けッ！魔法の射手・連弾・氷の
61矢ッ！」

真租としての莫大な魔力を内包した魔法の射手がネギに直進してい
く

（そんな、くッ！）

「風花・風障壁ッ！」

（これならッ！）

エヴァの打ち出した大量の魔法の射手に驚いた、ネギが繰り出した選択は、

普通の魔法使いを相手にしているなら、的確な選択であつたが

今回は……

ミシッミシミシ、バキャンッ！

「なッ！盾がッ！」

相手が悪すぎた……

盾を粉碎され、吹き飛ぶネギ

（そんな、数日前とは、段違いだッ！）

「驚いている暇はない、避けるよ死にたく無ければな、『氷爆』ッ
ッ！」

（まあ、殺すつもりは無いがな）

ネギがいる辺りに爆風が生まれる

（あの場所まで逃げなくちゃッ！）

杖に跨がり逃げるネギと、

「逃がすか……ッ！」

それを追うエヴァ、

夜はまだ深まったばかりであつた

S i d e O u t

S i d e エヴァ

中々に速いな、まあ、慎二とは比べるまでもないが

「リク・ラク・ラック・ライラック闇の射手・連弾・23矢ッ！」

まだ、ぼーやには無詠唱は出来まい？
一気に叩き落とすッ！

ガウウンッ！ガウウンッ！ガウウンッ！
ダダダッ！ダンッ！

何イ？、魔法銃か珍しい物を使う。しかし、そんな物があるならば吹き飛ばすだけだッ！

「リク・ラク・ラック・ライラック、『氷結・武装解除』」

数日前ならレジスト位出来ただろうが、今は違う。
真租の力は伊達では無いぞ？

ヒュウウウウッ！

パキイイイインッ！

「なっ、レジストしきれないッ！？」

ふ、ほとんどの武装は吹き飛んだか、
だが容赦はせん

「リク・ラク・ラック・ライラックッ！

闇の精霊43柱、集い来たりて、敵を撃てッ！魔法の射手・連弾・
闇の43矢ッ！」

その程度の速度では、

慎二を相手にしている私を振り切れんぞッ！

「グウツ！、あ、後、ちょっとで」

ふん、罨か何か、なら使う前に撃ち落としてやろう

この先は麻帆良大橋か、辿り着けるかな、ネギ・スプリングフィールド

「リク・ラク・ラック・ライラック、来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ、常夜の氷雪。『闇の吹雪』ッ！」

終わりだ、吹き飛べッ！

あれは、魔法薬ッ！

ギリギリで防いだか、

忌ま忌ましい奴だ、

さっさと吹き飛ばせば良いものをッ！

チィッ！もう麻帆良大橋が見えて来たか

ふん、物量で押し潰すッ！

「それ、もう一度だッ！リク・ラク・ラック・ライラック来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ、常夜の氷雪。『闇の吹雪』ッ！」

潔く、吹き飛ばが良いッ！

ゴッウウウウッ！

「よし、ってああッ！」

ようやく墜ちたか、

しかし麻帆良大橋に着いてしまったな

何か罨は、ふん、アレか。

「この私からここまで逃げる事が出来たことは褒めてやろう、しかし、これで終わりだ、……………その罨も必要はあるまい？」

「ッ！？」

さあ、『闇の福音』の復活だッ！

「そ、そんな…………」

「終わりだ、リク・ラク・ララック・ライラック、来れ氷精、闇の」

「いけないッ！マスター、戻ってッ！」

何ッ！どうしたんだ茶々丸ッ！？

「予定より停電の復旧が早い！マスターッ！」

何イッ！？

「バカなッ！まだ2時間以上あるんだぞッ！？」

ふと慎二が言っ言っていた事を思い出した

『麻帆良でそんな事をすると益々立場が悪くなりますよ？
それに学園長辺りが裏で何か考えてるでしょう
そんな、自分から畏に飛び込む様な真似はしたくありませんよ』

……そうか。そういう事がッ！、じじいッ！

バシンッ！

「きゃんッ！」

クソッ！…… 慎二の言った通りになっ たな……、

情けない、これでも『闇の福音』か

そういえば、昔似たような事があつ たな、あの時は…… ナギに

ガシッ！

「エヴァさんッ！、大丈夫ですかッ！？」

そう言つて私の腕を掴んだバカが、ずいぶん昔の全然似ていない、
アイツの顔に 重なつて見えた

「…… 生意気だ、 慎二のくせに」

S i d e O u t

S i d e 慎二

「…… 生意気だ、 慎二のくせに」

…… はあ

「こんな時でも態度を変えらるうことは無いんですね
そこは『ありがと』かせめて『すまんな』でしょう?。」

「ふん、下僕が主人を助けるのは当然だ」

「……ふう、では行きましょうか?お嬢さん」

「む、否定せんのか」

「しても聞かないでしょう?。」

そう言つて橋の上まで跳び上がります

全く一体何があつたんでしょう?

大分原作とズレが生じてますね……

しかし、結果的にネギ先生に挫折を感じさせる事が出来たのでOK
でしょう、

エヴァさんの強さも実感したようですし

「ネギー……ッ!」

む、神楽坂さんですか、さつさと引き上げますかね

「あ、あんたッ!あの時のッ!エヴァちゃんの仲間だったのね

ネギの血はやらないわよッ！」

何か、微妙に間違っていない言い掛かりですね

「もう、結構ですよ、時間切れで引き分けと言う所ですか、」

「へ？」

ポカーンとしてますね、まあ、
今から戦いを始めようとした相手から『引き分け』とか言われたら
ポカーンとしますよね
普通は

「ですから引き分けです僕は……まあエヴァさんの仲間が良いですよ」

「引き分けじゃない、私の勝ちだっ」

「魔力がすつからかんでまともに立てない人が何を言ってるんですか、

それに牙が無いから血も吸えないでしょう」

全く少しは考えてくださいよ

ん？

「聞きやしたか姐さんっ、今のエヴァンジェリンなら簡単に倒せやすぜッ！」

アイツも弱そうだしやっちまいやしようッ！」

「え、でも」

む、確かに僕はあまり強く無いですし、

基本は不意打ちですし、

卑怯汚いは敗者の戯言だと思ってますが、

オコジヨごときに弱そうとか言われたく無いですよ

ふむ、

ブウオンッ！

ガシッ

「「なッ！」」

軽く瞬動でオコジヨを掴み取ります

ああ、瞬動ならかなり出来る様になりました
敏捷A+も追加されますので、

裏の関係者でもそうそう反応出来ません

「僕を……なんですって？」

「ヒイイッ！すいやせん、つい出来心だったんです、許してください、

（エヴァンジェリンの仲間って奴が弱い訳無いだろうがッ！俺っちのバカアアッ！）」

ふう、スッキリしました、

「では僕はエヴァさんを連れて行きます
では、ネギ先生を頼みますね？」

オコジヨを放り投げます

「え、はい」

「そついう事で、さようなら」

パツと移動します、もう見えなくなっていましたね

「エヴァさん、これから帰りますよ……エヴァさん？……寝ちゃったんですか」

はあ、中々ままならない物ですね

あれ？もしかして僕、神楽坂さんの従者フラグ折りました？

S i d e O u t

S i d e ?

やはり、私のいる時とは少し違うネ

1 番のイレギュラーは『間桐慎二』の存在ネ

あんな存在は私の時代に残された情報には載ってないヨ

敵になるか、それとも……………

S i d e O u t

第18話（後書き）

獲得スキル

【瞬動】B

精神が不安定な状態に成らなければ、

99%の確率で成功

不安定なら - 50%減少

【操影術】C+

影の使い魔召喚は出来ないが、

影を纏って戦う事が出来る

影の転移は現在50%？四方の正方形ほど開けれる

第19話（前書き）

短いです

後、大分後まで慎二は戦いません

第19話

Side 慎二

さあ、さあ、さあ、さあッ！

もうすぐ修学旅行ですよ。

ワイハ〜が僕を待ってますッ！

まだ決まった訳では無いですが
前に全員で希望を取った時は皆、
ハワイを希望してましたからね

京都とか危険な場所はスルーですね

「それじゃ、修学旅行何処に行くのか集計とるぞ〜」

む、始まりましたか

「まず、京都、奈良が良い奴〜」

バツバババツバババツ！！

「じゃあ、賛成多数で決定な」

なッ！

「ちょ、ちよつと。皆さんッ!?

少し前まで、ハワイが良いって言ってたじゃないですかッ!」

何で急に意見が変わってるんですかッ!?

「バカかッ! 慎二ッ!

今回、京都・奈良には3ーAが行くことになったんだぞッ!

3ーAのAは【容姿Aランク】のAと言われるほどの美人揃いなんだぞッ!

これはもう行くしか無いでしょうよッ!」

な、ナニイイイツ!

まさかそれが原因ですかッ!

「そんなッ! 裏切ったな! 僕の気持ちを裏切ったな! 父さんと同じに裏切ったんだ!」

「何を言ってるんだかこのクラスの人間は皆、京都・奈良が大好きだぜッ! な、皆ッ!」

「奈良はいいね、奈良は心を潤してくれる。リリンの生み出した文化の極みだよ。そう感じないか? 間桐シンジ君」

確かに僕はシンジで臆病者ですけどもッ!

「何を言ってるんですかッ！ネタに走ってる場合じゃないですよ」

「おいおい、そこは『何を…カヲル君、君が何を言っているのか分かんないよ…カヲル君…』だろ？」

「何がカヲルですかッ！貴方の名前はコウジでしょうが」

貴方はアルビノ美少年じゃないでしょうがッ！

「ホントに惜しいよな、一文字違えば、お前をぶん殴れるんだけどなあ」

「その代わり、内臓破裂で死にますがね……」

「……………やっぱコウジで良いや……………」

ですよー

「と、そんな事は良いんですッ！、ハワイですよッ！ハワイッ！」

「もう、決まった事だ、諦めろ」

ばっ、バカなああああッ！

「修学旅行当日」

「嫌です、僕は家に帰るんですッ！、京都なんか行きません」

放してくださいッ！電車になんか乗りません

「乗れ。シンジ。」

「お前は顔が良いんだ、その甘いマスクで3-Aの女子を虜にしてこい」

クソッ！放せ放せよ 動け、動け、動いてよ、（僕の足）今やらなきゃ、今逃げなきゃ、僕が死んじゃうんだよッ！

「はい、間桐慎二君一名、電車に入りまーす」

嫌だああああッ！

「大人しくしろッ！」

「さっさと乗れッ！」

プシュウウ、ガタン

クソッ！、電車の中に閉じ込められた。

こうなったら修学旅行を楽しみ倒しますよッ！

「お姉さん、駅弁一つください」

「はい、400円になりますえ」

え？

な、なんで貴女が此処にいるんですかッ！

天ヶ崎ッ！

「どないしました？」

「いえ、はい400円」

「まいど」

最悪ですッ！顔を見られてしまいましたよッ！おしまいですッ！

.....

.....あれ？

今此处で、天ヶ崎を倒せば、修学旅行編終わりませんか？

いやいや、まてまて、フェイトがいるじゃないか、

何故、京都編にいるか分からないですが、彼は僕の倒せる存在じゃないですからね

って、

事はこの弁当はカエル弁当ですか、

はあ、僕は絶対に関わりませんよ.....絶対に、...

あれ？、これフラグ？

S i d e O u t

S i d e エヴァ

はあ、暇だ、

慎二は修学旅行に行ってしまったしな、
最近は慎二とつるんばかりいたからな

慎二がいなくなると急に暇になったな

「マスター、慎二さんと一緒に修学旅行に行けなくて残念でしたね」

「別に残念なんかではないッ！」

そうだ別に慎二なんか必要ではないし
寂しくなんか全然ないッ！

まったく何を言ってるんだッ！茶々丸のバカめッ！

「クソッ！暇だ、土産がショボかったらただではおかんぞッ！」

あのバカめ、主人を思って、行かないという選択肢はないのか

ああ、クソッ！暇だ

Side Out

Side 慎二

はあ、最悪です

なにもかもを無に帰してしまいたいです

「「「「「きやあああッ！」「」「」」

ああ、カエルパニックですか

確か桜咲さんを疑って、今日の夜に桜咲さんと和解するんですっけ

でその後、近衛さんがさらわれると、

面倒臭いから、原作メンバーに頼みますかね、

む、噂をすれば影がさす、というやつですか

燕とそれを追っていくネギ先生が走っていきましたね

頑張ってくださいッ！

主に僕の平和のために

む、帰って来ましたが、

とりあえず無視

アイマスクをして寝たふりをしますか

ゆさゆさ

「すいません、間桐さん」

ん？
げっ

「何ですか、桜咲さん？」

まあ、言いたい事は大体分かるんですけども

「ネギ先生があまり期待出来そうに無いので、手を貸して頂けませんか？」

やっぱりですか

「すいませんが、桜咲さん今の僕はただの生徒として此処にいます、ネギ先生の手伝いは最悪の状況に陥った時のみです」

「なっ！そんな……………（…お嬢様の件は無理そうですね…）」

ぐ、女の子にそんなショック受けられると心が痛むんですが

「最悪の場合は手を貸します、が、僕は関わりたくありません」
「すいません、間桐さん」

「いえ、では」

「はい、わかりました（間桐さんの協力を仰ぎたかったが、仕方ないか……）」

ふう、行きましたか……

しかし、巻き込まれそうな臭いがぷんぷんしますね

まあ、絶対に協力しませんかね

臆病者と言われようと絶対に戦いからは逃げ続けると決めましたからね

しかし、後、はもう修学旅行編ですか

ああ、……………憂鬱です

Side Out

第19話（後書き）

一 応 慎二は常日頃から何が起こっても大丈夫なように準備しています

第20話（前書き）

修学旅行編は短いのを

ちまちまと投稿するつもりです

まあ、基本的にどの話も短いんですが…

すいません

第20話

Side 慎二

「京都おーッ!」

「これが噂の飛び降りるアレッ!」

「誰かッ! 飛び降りれっ!」

「では拙者が……」

「おやめなさいッ!」

はあ、見学場所も同じですか……

まあ、同じ学校の生徒は一括りにした方が良いでしょう……

ただでさえ騒がしいクラスがありますから、色んな所に行かれたら厄介な事になりますしね

「よし、慎二、3-Aの生徒と一緒に回らないか誘って来いッ! 狙いは4班だッ!」

はあ、やっぱり僕なんですか……

「自分で言えば良いじゃないですか、僕を巻き込まないで下さいよ……」
「大体何で4班何ですか……？」

龍宮さんが居るしあまり関わりたく無いんですが

（4班のメンバーは

大河内アキラ

龍宮真名

和泉亜子

明石裕奈

佐々木まき絵

の五人です）

「お前ッ！、あの班のメンバーは美人揃いで彼氏の話も聞かないかなッ！」

「クールな眼差しの龍宮さんッ！

本当に中学生かと思う位のわがままボディッ！

是非ともお近づきになりたいッ！」

「水泳部に所属している大河内さんッ！

水泳によって無駄な脂肪は削ぎ落としているのに、

驚くほどのナイスボディだッ！」

「明石はどうだッ！？バスケット部に所属しているスポーツガールだッ！
今でこそ普通サイズだが、俺の勘が言っているッ！
将来はかなりの巨乳になるとッ！」

「和泉も良いぞッ！あの守ってやりたくなるオーラは男を狂わせるッ！

失恋したそうだが、振った相手は眼が腐ってるか、ホモだったかのどちらかだッ！」

「佐々木も捨て難いッ！あんな天真爛漫な子が近くに居るだけで元気になるッ！」

子供っぽいと言われているが逆にそれが良いッ！」

……………うわぁ……………明らかにバカ居ますよバカが

「……………死ねばいいのに、というか、そんなに好きなら自分で行けば良いじゃないですか……………」

「……………バカッ！恥ずかしいだろッ！……………」

……………死ねよ、

「何で僕が行かなくちゃならないんですか…」

……………勝手にやってください」

そもそも、こんな奴らと一緒に居たくないし、

こんなと同じ奴だとも思われたくもありません

「ふっ、そんな事言って良いのか？間桐……」

「な、なんだって言うんですか……」

なんか妙な凄みが……

いや、気のせいですこのバカからそんな物は出ません

……多分、

「お前、マクダウエルさんと仲良いよな」

「っ、それがなんだって言うんですか……」

エヴァさんと仲が良くて、困る事なんてありません……多分

「それでいて、絡繰さんとも仲が良いよな……」

「だっ、だからそれがどうしたんですかつ」

勿体振らずに言えば良いじゃないですか……

「……………お前が二人を囲ってハーレムを形成中だという噂を流す……………」

なっ！？

「な、何を言ってるんですか……
二人はただの友達ですよ……」

「容疑者の言葉を……
誰が信じる？」

なっ！？そんな……

「ひ、卑怯者め……」

汚い過ぎるッ！

そんな事になったら男子中は敵だらけになるじゃないですかッ！

「なに、お前が4班を誘って来るだけでいいんだ
結果に問わず、この件は忘れよう……」

「クッ、………わかりました、良いでしょう………」

やれば良いんでしょう、やれば……

「さすがっ慎二君ッ！君ならやってくれと信じていたよッ！」「
キラッ！

……うわ、こいつ殺してえ

……はあ、行くか、

(移動中)

「あの、龍宮さん、それに4班の皆さん、少し良いですか？」

「ん？、どうしたんだい、間桐さん？」

「龍宮さん、その人は？」

「ああ、僕は間桐慎二と言います、

…はあ、内の班員が皆さんと一緒に回りたと言っているんですが、その、……どうでしょう？」

……予想以上に恥ずかしい……
早く帰りたいです……

「ふっ、大変だな間桐さんも、私は別に構わないが他の班員の意見次第だな」

「私は別に構わないけど」

「う、うち？…うちもかまへんよ？」

「そうだなー、うん別に良いよ」

「私はネギくんと回りたいから

ネギくんを追いかけれる事になっても良いなら、良いけど」

よかった、全員OKみたいですネ

「本当にすいません……」

ありがとうございます……」

ほら、さっさと来なさいッ！」

後ろで覗いてるバカに声を掛けます

「よくやった慎二ッ！良い友達を持ったものだ」

「都合の良い時だけの友達は友達と言いませんよ……」

「そんな事より、皆さんッ！はじめまして！鈴原コウジです」

「僕は相田ケイスケって言いますッ！

仲良くしてねッ」

「僕は……」

我先にと挨拶を続けるクラスメイト、

……見てて恥ずかしいですよ……

後、何でエヴァ関係の名前が多いんでしょう？……………偶然？

「……………本当に大変そうだな、間桐さん……」

「言わないで下さいよ龍宮さん、言われると余計に疲れます……」

こんなのが後、何日も続くんですか？

やばい、胃が痛い……………

S i d e O u t

S i d e 龍宮

いきなり声を掛けて来た時は驚いたが、

……………中々大変そうだ

「間桐さん、ネギ先生の方はどうするつもりだい？」

普段から考えていることがイマイチ分かりにくい人だからな…

今回の事はどうするつもりだい？

「ネギ先生の事ですか……」

……今の僕はただの麻帆良の男子中学生ですからね、
学園長クラスの人間から命令が来ない限り無視です」

ほう、無視と来たか、

「それは、……何故？」

「スプリングフィールドの名前に関わると
ロクな事にならないでしょう？」

なるほどな……しかし、
そこまでスプリングフィールドの名を嫌える人は珍しいな

「何故そこまでネ」「有名人と一緒に居るとイロイロと巻き込まれる
でしょう？……普通に平和が1番ですよ、関わるとロクな事になり
ません」「……………成る程ね」

やはり彼は、中々面白い思考回路をしてる

そんなに厄介事が嫌ならエヴァンジェリンには関わらないだろうに

……仲良くなってしまったからかな？

非情に成り切れない、甘い人間だ

本当に関わりたく無いならちゃんとしないと、『ネギ先生以外』の手によって、

渦の中心に投げ込まれるよ、間桐さん……

S i d e O u t

第20話（後書き）

慎二は元一般人ですから基本的に誰かを見捨てたり出来ません

今回の事は、皆無事で終わる事が分かっているからです

第21話（前書き）

…全然進まない…

第21話

Side 慎二

「ホラ、ネギくん、行こ行こーッ!」

「あ、コラッ! まき絵さ…

その人達ッ!

ぬけが……いえ

団体行動を……ッ!」

佐々木さんが積極的にネギ先生を誘っていますね
他の人達もかなり積極的ですな

「さ、佐々木さん……」

……諦めなさい

貴方じゃ勝ち目はありません

他の人達も一緒に回る事になったのは良いですが

……見事に相手にされてませんね

まあ、釣り合わないと言うか、美女と野獣と言うか

「クソッ！こんなはずではッ！」

……いえ、こんなものでしょうよ…

ん？、次は恋占いの石ですか

「いざ、行かん恋の成熟のためにッ！」

「おうとも、行くぞッ！」

ああ、バカが進んで行きます。

原作では雪広さんと佐々木さんが落ちる落とし穴があるんですが…

…

「ぬおおおッ！」

「な、なんじゃこりゃあッ！」

……嵌まりましたか、まあ、女子を守って嵌まるなんて名誉な事ですし…

良いでしょう

「すみませんね、騒がしくて、龍宮さん」

「いや、気にしてないよ

内のクラスメイト達も騒がしいし中学生なら仕方ないだろう」

.....

「.....そんな悟った様な物言いをしてるから、年上に見られてしまうんですよ？」

「なッ！.....それは私に喧嘩を売っているのかな？間桐さんッ！」

凄いで睨んでくる龍宮さん

.....怖ッ！

「ただの忠告ですよ、ちゃんと中学生として見られたいならもっとキャピキャピしないと」

まあ、キャピキャピした龍宮さんなんて全然想像出来ませんが.....

「.....今時『キャピキャピ』なんて使っている人は初めて見たよ.....」

.....

ぬぐうッ！

「意趣返しのもりですか？龍宮さん.....」

「さあ、どうだろうね、間桐さん.....」

『ふふふふふふふふふふふふふふふふ』

「おい、なんか背筋が寒くないか？」

「奇遇だな、俺もだ」

「やばい！なんか知らんがやばい！」

……………どこかで何か言ってますがどうでも良いですね

「貴女は僕が『古臭い』と、そう言いたいんですか？」

「そう間桐さんが思ったのならそうなんじゃないか？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！

「ほらほら、龍宮さんも間桐さんもそんな怖い顔してないで楽しもうよッ！」

せっかくの修学旅行なんだしさッ」

明るい雰囲気での緊張した空気を打ち砕いた明石さん

「明石さん………そうですね、せっかくの修学旅行です！
すいませんでした、龍宮さん」

「……………私も言うべきでは無い事を言った
気を悪くしないでくれ」

自分を抑え切れませんでした
さすがに精神年齢が高いとは言え、古臭いはかなりイロイロとキテ
しまったので

（というか、なんで間桐は女の子達と仲良くなってんだッ！）

（顔かッ！顔なのかッ！）

（畜生ッ！しかし、まだ時間は有るッ！
今まで相手にされてなかったなら
今から仲良くなるだけだッ！）

ん？

「何やってるんですかッ！行きますよッ！」

|||||（移動中）|||||

次は音羽の滝ですか

……………酒樽をエヴァさんのお土産にしたら喜びますかね？

……………封が開いてるし逆に怒られますか

「ゆえゆえっ

どれが何だっけッ！」

「右から健康・学業・縁結びです」

……酒樽は縁結びだけでしたね

……やはり健康ですか

原作が終わるまで怪我無く過ごしたい物です

「「「「ふっははッ！縁結びは貰った」「」「」

またバカ五人が行きましたか、
しかし3ーAの人間も飲んでるし、
ここは原作通り嵐山行きですかね

「「「「ひやはははっ何か気分が良いぜッ！ひゃっほッッ！」「」「」
「」

……完璧に酔っ払ったバカどもの図ですね

「コラアッ！お前ら学生の身で酒を……」

「あわわ、これはその甘酒で……」

ネギ先生がごまかしてますが…

……無駄でしょうね

修学旅行をこんな所で終わらせる訳には行きませんし

……はあ、仕方ないかあ

「新田先生、音羽の滝に悪戯で酒が仕込んであったようです」

「飲むなど……何ですと、……確かに、

……まったく迷惑な悪戯だッ！」

「どうすれば良いでしょう?」

「仕方ない、……予定を繰り上げてホテル嵐山に行くしかないでしょうな

生徒に非はないのだから」

「成る程わかりました、それで男子は?

運が良いのか酒を飲んだのは僕の班の数人ですが……」

もしかして僕も付き添いとして行かなくちゃならないとか無いですよね?

「君には悪いが君も嵐山に行ってもらう事になる……」

「……仕方ありませんか」

「悪いな……」

「気にしないでください、悪いのは酒を仕掛けた人間ですから」

「…そうか？…それでもすまないな」

さつさとこのバカどもをホテルに運びますか

「あ、あの、貴方はエヴァンジェリンさんの時の」

あ、ネギ先生もいましたね……

「お久しぶりです、

しかし、僕はただの生徒して修学旅行を楽しみたいので僕を巻き込まないでくださいね、ネギ先生？」

一気にまくし立てその後、

すぐさまバカどもを引きずり移動します

「え、あ、はい。ってええッ！……いなくなっちゃった」

はあ、なんでこのバカどもの世話をしなければならんでしょう？

S i d e O u t

S i d e ネギ

確か、アスナさんに聞いた話だと、エヴァンジェリンさんと戦った後、エヴァンジェリンさんを運んでいった

確か……………間桐慎二さん

「ボソボソ（兄貴もしかしたらアイツも親書を狙う奴かもしれないねえ、気をつけてくたせえ）」

「ボソボソ（ええッ！でも、この修学旅行にはエヴァンジェリンさんは居ないし、

それにあの人はとっても強いんでしょ？

こんな事するかな？）」

「ボソボソ（確かに、あれだけ速く動けるなら兄貴から親書を奪い取るのも訳ねえか、

だけど気をつけるに越した事はありませんぜッ！）」

カモくんは心配性だなあ、でももしかしたら桜咲さんと一緒に親書を狙ってるのかも

……………気をつけた方が良いよね

エヴァンジェリンさんの仲間であっても強いってカモくんが言ってたから、戦いたくは無いけど……………

「ネギく〜んッ！皆をバスに乗せるの手伝って〜ッ！」

「あ、はいッ！」

しっかりしなくちゃッ！

Side Out

第21話（後書き）

慎二は古い人扱いされるのは嫌いです

精神年齢が高いので、たまに人が使わない言葉を言って恥ずかしい
思いをします

それが原因です

第22話（前書き）

かなり後の方の話ですが、アーティファクトのアンケートを後書きで行います

第22話

Side ちび慎二

皆さんどうもはじめまして。

マスター（慎二）から密命を受けてネギ先生一行を追跡している
ちび慎二です

原作との相違点やズレ、さらには所謂『オリキャラ』がないか
観察及び報告の命令を受けてます

今は電車の上に乗ってネギ先生達が出てくるのを待っていますが、

……まだ出てきませんね……

ついでに言うと

この体はマスターが改造した特別な札を使用しているので、
マスターの様に気配遮断は行えるのですが、

……さすがに濡れたくは無いので、此处で出てくるのを待ってます

神楽坂さんは、『桜通りの吸血鬼編』で何があったのか原作とズレ
てしまい、仮契約を行っていなかったのですが……

……近衛さんを助ける為にすぐさま仮契約を行った様です

刹那さんは近衛さんを追って先に走って行ったので、

仮契約したのは神楽坂さんだけの様です

その後、杖に乗ったネギ先生と神楽坂さんが刹那さんに合流して、今の状況です

原作とのズレは少なくなってますね、

……………こう言うのを歴史の修正力と言うんでしょうか？

「『斬空閃』ッ！」

ドパンッッ！

ザアアアーーッ

む、次の展開に入っただけですね

「み、見たか。

そのデカザル女

嫌がらせは諦めて大人しくお嬢様を返すがいいッ！」

「ハアハア、中々やりますな、

しかし、木乃香お嬢様は返しまへんえ」

「「え……、木乃香お嬢様？」」

ザッ！

「あ、待てッ！」

あ、天ヶ崎が逃げましたね、

……ネギ先生より天ヶ崎を追いますか、ネギ先生の方は原作とあまり変わらない様ですし

|||||（移動中）|||||

「チツ！しつこい女は嫌われますえ、

……まあ、集合場所に着いたら他の奴に任せて、
うちは木乃香お嬢様を連れて行けばいいだけやから別に良いんやけど……」

……成る程、原作であつた。

階段の場所は偶然仲間が来たのでは無く、仲間が待ち構えて居たんですか……

……特に原作との相違点は未だありませんね

「ッ！来おつたか……」

ん、ネギ先生達が来た様ですね、

「フフ…、よーここまで追って来れましたな、
そやけど、それもここまでですえ
三枚目のお札ちゃんいかせてもらいますえ」

「おのれ、させるかッ！」

「『おれさん、おれさん、うちを逃がしておくれやす』」

「喰らいなはれッ！」

『三枚符術、京都大文字焼き』ッ！」

「うぁッ！」

「桜咲さんッ！」

ふむ、『紅き焰』よりは上、『奈落の業火』よりは下……と言った所でしょうか？

まあ、符術は基本的に無詠唱ですから
一瞬でここまで出来るなら中々の代物ですね……

「ホホホ、並の術者では、その炎は越えられまへんえ
ほなさいなら」

「ラス・テルマ・スキル・マギステルッ！
吹け、一陣の風
『風花・風塵乱舞』ッ！」

うおッ！スゲー風…

「な、何やッ！」

「逃がしませんよッ！」

木乃香さんは僕の生徒で……
大事な友達ですッ！」

おー
パチパチパチ

カッコイですね、さすが主人公……

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 (数十分後) 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

「覚えてなはれーッ！」

ふむ、原作との相違点は無しと、眼福、眼福

え？、今までの展開ですか？……原作通りですよ

ふむ、もうやる事はありませんしマスターの所に帰りますか

「轉移符、起動……」

シュンツ！

暗い……ここは、マスターのカバンの中ですか

「マスター？」

「ああ、帰って来ましたか……
でどうでした？」

ああ、他の皆は寝てますよ」

「原作との相違点は特に無し…

…神楽坂さんは近衛さんが攫われた直後にネギ先生と仮契約を行いました」

「……成る程、ご苦労様です」

これで僕の任務は終了ですね

ボンッ！

S i d e O u t

S i d e 慎二

原作との相違点はほとんど無しですか

やはり僕の他にイレギュラーは居ない様ですね

ならばしかし何故『桜通りの吸血鬼編』では原作との乖離が起こったのでしょうか？

（慎二は自分が原因だとは思っていません、ネギとは関わらない様に過ごして来たので

自分が何かする事など無いだろうと思ってます)

ふむ、原作との相違点は特に無し

ならば修学旅行編で気をつけねばならないのは、やはりフェイトですか……

あんなのと戦う事になったら間違いなく死ねます

全力で防御しても一発で打ち砕かれて

見るも無残な『慎二だったもの』にされてしまいますよ

「むあー、ん？、どうしたんだ慎二？便所か？」

ッ！

「いや、何でもありませんよ、少し眼が覚めてしまっただけです」

「ほうか、じゃあ、ん~~~~」

……驚きました、まさか、急に起きるなんて思いもしませんでした

しかし、準備だけはしておきますか……

S i d e O u t

S i d e ネギ

何とか木乃香さんを取り戻す事が出来ました。

だけど刹那さんは敵じゃなかったんですね

アレ？じゃあ間桐さんは？

「あ、あの刹那さん、間桐さんは敵なんですか？」

「は？間桐さんですか？彼は敵ではありませんよ、ネギ先生と同じ魔法使いです」

やっぱり敵じゃなかったんだ……
よかったあ……

あッ！

「間桐さんにも木乃香さんを守る事を手伝って貰ったらどうでしょう！？」

カモくんがとっても強いって言ってたし、凄くありがたいんだけど

………

「彼は……恐らく協力してはくれないでしょう」

え？

「な、なんですかッ！」

「彼は危険な可能性がある事はやりたがりませんから、言っても無駄でしょう……」

彼は『立派な魔法使い』に興味を抱いていませんし……」

そ、そんな……

魔法使いは皆の為に働くのが仕事なのに……

「ん、んうん」

あ、木乃香さんッ！

目を覚ましたみたいですね

だけど、間桐さんが協力してさえくれたら、

木乃香さんが危険な目に会っ事ももっと減るのに……

S i d e O u t

第22話（後書き）

慎二のアーティファクト案

（1）『アヴァロン（偽）』

従者の受けた傷が吸血鬼並とは行かないがかなりのスピードで回復する

傷を負いながら逃げれる

（2）

『痛覚遮断の腕輪』

付けている間は従者の痛覚を消す

傷を負いながら逃げれる

（3）『その他』

何か良い案があったらくださいッ！

『これだぁッ！』と言う物があつたらそれを使わせてもらいます

アーティファクトは逃走を補助する物をお願いします

締め切りは1月31日の22時までをお願いしますッ！

第23話（前書き）

ふははッ！

やっと終わったぜ

皆3番選^び過ぎだッ！

後書きで更にアンケートがッ！

第23話

S i d e 慎二

『いただきますッ!』

今の所、変な事は起こっていませんね

概ね原作通りです

しかしあえて言うならば……………

チラッチラッ

……さつきから、ネギ先生が凄く意味ありげな目を向けてくるんですが……

僕は嫌ですよ、関わるの、死人すら出ずに終わるのが分かってるのに、わざわざ僕が出る必要は無いでしょう…

後、ホテルの話ですが、男子は2階、女子は1階に泊まっています

え？男女で泊まる所が違わないのか？

……………麻帆良ですよ、麻帆良……

……犠牲となるホテルは一つで十分でしょう

「ネギくんッ！今日ウチの班と見学しよーッ！」

「ちよっ、まき絵さんッ！ネギ先生はウチの3班と見学をッ！」

「あ、何よーッ！」

私が先に誘ったのにーッ！」

「ずるーいッ！だったら僕の班もーッ！」

……人気ですねえ、ネギ先生。

まあ、可愛い先生ですしね……

それに比べてコイツらは……

「くそッ！憎しみて人が殺せたらッ！」

「殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる」

「何がイギリス紳士かッ！あのむつつりがッ！」

「ああ、俺のまき絵さんが……」

「慎二ッ！あいつを抹殺して来いッ！あいつはハーレム属性持ちだッ！」

……バカばかりだ……

「自分で殺って来なさい、僕を巻き込まない様に」

後、佐々木さんは貴方の物じゃありません……
一人アス力交ざってませんでしたか？

「バカッ！そんな事したら女子に嫌われちゃうだろッ！」

「つまり貴方は僕に女子に嫌われて来い、とそう言いたいんですかッ！？」

「……うん」「……」

……僕、なんでコイツラと友達やってるんだろっ………？

「あ……、あのネギ先生ッ！」

ん？宮崎さんが動きましたね……

彼女のアーティファクトは、かなりのキーアイテムになるので、これから頑張っ欲しいものです

赤松ワールドの住人ですのでイレギュラーの僕と違って死ぬ様な目には会わないでしょうし

頑張ってください

僕は応援しますよ。主に僕の平和の為に……

「よ、よろしければ、今日の自由行動……
私達と一緒に回りませんかーッ！？」

「「「「「な、何イーッ!」「」「」」

うおッ!?

なんですか急にッ!

「バ、バカな……」

「『麻帆良隠れ美少女』の宮崎さんがッ!」

「素顔ならばA A A - は行くであろう美少女がッ!」

「あの野菜野郎の毒牙にッ!」

「かけられて……いた……だと……ッ!」

うわ……息ピッタリ……

……キモ

あ、ネギ先生が返事を出したみたいですね

「わかりました、宮崎さん、

今日はぼく、宮崎さんの5班と回ることになりますッ!」

『おー』

何か見ててほのぼのしますね、

というか原作では従者作りまくってたけど最終的にどうするつもり
でしょうか?

……やっぱハーレムENDでしょうか?

「「「「「ま、……抹殺せねば……」」」」」

「やめなさい」

今日は敵襲は無かったんでしたっけ？

だったら、今日1日、平和に過ごせそうですね

山場は、明日か……

「異端審問の用意を……」

「「「「はっ……」」」」

「だから、やめなさい」

……はあ、

「「「「「（場所移動）」」」」」

「は、放せっ！慎二ッ！アイツを異端審問に掛けねばッ！」

「そうだぞッ！慎二ッ！アイツは人の心を惑わす魔女だッ！」

「火炙りだッ！」

…まったく…

なにげに間違つてない例えですね…

………ふんッ！

「ようやく放したかッ！、

ん？な、何だッ！来るな来るなよッ！」

「ま、待て、髪の毛は食い物じゃなっ痛ッ！」

「鹿せんべいを後でやるからッ！やめろッ！」

バカに群がる鹿の大群、
中々シユールですね……

「し、慎二ッ！たすけッ！」

……さて、バカは放っておいて、楽しみますかッ！

ん？おおッ！

「龍宮さんではないですか…奇遇ですね」

「間桐さんか、また会ったね」

ん？他の人がいませんね

「他の班員はどうしたんですか？」

辺りには、…いないようですね
団体行動だったと思ったんですが……

「他の皆は奈良の美味しい物を食い倒すって言っていたからね、
私は少し別行動として美味しい餡蜜を探してるんだよ」

成る程……

そっすいえば餡蜜好きでしたね…

「そっすいう間桐さんの班員はどうしたんだい？」

ん？

「僕の班員ですか？」

アレですけど？」

鹿の塊、もはや鹿団子と言っても良いものを指差します

「あ、アレかい？」

いや、確かに鹿の隙間から人の体が見えるが………」

龍宮さんでも軽く引く様な物体が少し蠢きます

「そ、その美しい声は龍宮さんッ！
たす………」

ズズズズザザザ

「んあッ！」

……また鹿の波に埋もれて行きましたね……

「な、なあ、間桐さん……助け「龍宮さんッ！美味しい餡蜜屋さん、一緒に探しましょうか？」………そうかい？…それは助かるよ」

あんな物は助けられない方が世のためですよ

「慎二ッ！貴様裏切」

モサモサモサモサッ！

「ふげッ！」

「さあ、行きましょうか、餡蜜屋探し」

「あ、ああ」

やっぱり修学旅行は遊ぶに限りますね

何か美味しい漬物屋さんも有ると嬉しいんですが………

S i d e O u t

S i d e 龍宮

間桐さんは他人を見捨てられない人だと思っていたが……
認識を改める必要があるみたいだね

…いや、彼等だけが例外なのかな？

「あ、ありましたよッ！」

ん？

「餡蜜屋は見つかったのかい？」

できれば美味しい餡蜜が食べたいんだが……

そこにはボロそうに見えて中々に手入れが行き届いている甘味屋が
あった

「ふむ、中々良さそうな店だな……」

あまり売れてなさそうでいてしっかりと繁盛してる

……中々良い店だな

「ありがとう、間桐さん……一緒に食べるかい？」

「あ、良いんですか？じゃあ僕、奢りますよ」

何ッ！？

「良いのかい？私はかなり食べるよ？」

「まあ、男の甲斐性というか、お金はかなり多めに持ってきたので大丈夫ですよ？」

間桐さん……………、

君はいい人だな…

このままだとかなりの確率で間桐さんはネギ先生に巻き込まれるだろうが…………

まあ、安くて雇われようかな…………

間桐さんは中々金払いのいいお客さんだしね

…………さあ、食べるかッ！

S i d e O u t

第23話（後書き）

どれがいいでしょうか？

なお、一人一票です

『痛覚遮断の腕輪』

『星降る腕輪』

（スピードUP）

『ATフィールド』

『偽臣の書（偽）』

（相手の血を書につける事で1回だけ絶対命令権を得る）

『十二の試練（劣化）』

『偽臣の書』（2）

（サーヴァント召喚（制限付き）又は相手の従者を一時的に奪う）

『偽りの聖杯』

（望んだ事と逆の幻を見せる）

『ペガサス召喚』

（ライダーアタック＋逃走用）

『ステルス迷彩改』

（気・魔力・姿を完璧に消せる、5時間使うと1時間使えない）

『デス・のーと』

（名前を書くと恥ずかしい過去が浮かんで来て社会的に死ぬ）

『T-1000』

（ターミネーター、液体金属化、一定時間無敵モード）

『逆撫』 BLEACH

『蛇のダンボール』

『一瞬だけ絶対に慎二を認識できなくなる（名称不明）』

『箱舟』 D・Gray-man

（どこでもワープ）

『固定化・保存（名称不明）』

（実体が有るもの無いもの固めたりできる）

『幽霊化スーツ』

（攻撃効かない、攻撃できない壁をすり抜け）

『偽臣の書』（3）

（他人の従者の奪取又は仲間の仮マスター権）

『逃走者の隠れ家』

(HUNTER×HUNTERのノヴみたいやつ)

『怪盗は二度死ぬ』

(死んだふり、その後転移、相手は死んでない事に気づけない)

『獣の首輪』

(Black Catのイヴの変身能力)

『悪戯な片眼鏡』

(マップに罠を設置する)

『アラクネ召喚』

『PC版Fateの蟲』

ワカメ関連は抜いてあります

締め切りは2月1日の夜9時です

第24話（前書き）

今回の学園長は黒？ 灰色？

第24話

S i d e 慎二

ハハハハッ

今は修学旅行3日目の夜ですね

ホテルでゆつたりとしています

え？原作？

今頃は『鍋將軍』こと近衛詠春が石にされた辺じゃないでしょうか？

もし、もしの話ですがフェイトに姿を見られたら困るのでネギ先生達は追い掛けていません

だって可能性しては1%未満ですが、もしフェイトに顔を見られたら終わりですし……

ハハハハッ 楽でいいですねッ！

後はネギ先生達が頑張ってフェイトと宿敵フラグを立てて、

エヴァさんが両面宿敵をフルボッコにするだけですネッ！

p u l l l l l l l l p u l l l l l l l l

ん？

電話ですか……

ガチャ

「はい、もしもし、慎二ですけど」

ふうわあああ

眠、さつさと話を終えて眠るが吉ですね

「『慎二くんかッ！、木乃香を助けてくれッ！』」

は？

S i d e O u t

S i d e 刹那

「刹那さんッ！早く木乃香さんを助けに行きましょうッ！」

クッ！

私という者が居ながらお嬢様を攫われてしまうとは……………ッ！

このまま行っても、あの白髪の少年を相手にするのはかなり難しい……………ッ！

クソッ！

何か無いのかッ！

ふと、二日前のとある人物の言葉が頭に響いた

『すいませんが、桜咲さん、今の僕はただの生徒として此処にいます、ネギ先生の手伝いは最悪の状況に陥った時のみです』

最悪の状況……………

そうだ、今ッ！、今この瞬間こそ最悪の状況だッ！

早く間桐さんに連絡を……………

……………いや、私が言うよりも、もっと上の人間

……………学園長にお願いしてもらった方が良いか？

彼ならばあの白髪の少年に気付かれずに近づき、お嬢様を奪還出来るかもしれない……………

それに麻帆良から援軍を送ってもらう必要がある……………

他は、他にやる事は無いか……………？

「刹那さんッ！早く木乃香さんを追い掛けないとッ！」

…ッ！もう時間が無いッ！

「ネギ先生ッ！学園長に助っ人を要請してくださいッ！それと、間桐さんの協力が欲しい、説得して貰いたいという事を学園長に伝える様にッ！」

「えッ！あ、はいッ！」

今この場でやれる事はやったッ！

お嬢様を追い掛けねばッ！

S i d e O u t

S i d e 慎二

「『慎二くんかッ！、木乃香を助けてくれッ！』」

は？

ちよっ、マジですかッ！僕を巻き込まないでくださいよッ！

「い、一体全体何があったんですかッ！木乃香さんがどうかしたん

ですかッ!？」

木乃香さんが攫われた事を僕が知っているのはおかしいですからね

……

ちゃんとごまかさないと……

「『木乃香が攫われてしまったのじゃッ!」

今は関西呪術協会の近くにある大きな湖に向かっておるはずじゃッ

!』」

「ま、待ってくださいよッ!『サムライマスター』は、関西呪術協会の長はどうしたんですかッ!？」

まあ、知ってるんですがね……

「『婿殿は……やられてしもうた……』」

ですよー知ってます

「はッ!?『サムライマスター』でもやられる様な相手に僕が行っても無駄でしょうッ!」

ここまで言えば僕に協力しろなんて言わないでしょう……

「『……慎二くん……君の気配遮断能力やスピードは婿殿を超えておる……」

君ならば……」

くッ！まだ食い下がりますか……

「そんな事知りませんッ！そんな死ぬかもしれない所、行きたくありませんよッ！」

「『……………』」

む、返事がありませんね……

諦めましたか……

「『慎二くん……確かにわしの行って欲しいと言っている場所は死の危険がある……
君にお願いするのは間違っておる……』」

そりゃ、そうでしょう

「『こんな事を言うのは人としても

麻帆良の学園長としても

関東魔法協会の長としても、間違っているのは分かっておる……

それでも、

わしはただの近衛門として、君に頼みたい……

…木乃香を助けてやってくれ……』」

…な………

「汚いですよ学園長……」

そんな事言われたら断れないじゃないですか……」

「『……すまん、慎二くん……』」

本当に汚いですよッ！

いくら無事に終わるのが分かってても、こんな事言われて断ったら、修学旅行が終わって帰って来た時に学園長とギクシャクしちゃうじゃないですかッ！

僕は嫌ですよッ！

「あ、が、学園長、来ました、間桐です」

「ん、う、うむ、よく来てくれた……」

みたいな空気になるのッ！

汚いッ！さすが学園長汚いッ！

「場所は多分分かります……」

「『すまん、……ん？エヴァが伝えたい事があるそうじゃ……』」

は？エヴァさんですか……

「『慎二ッ！敵は近衛木乃香を使って両面宿儵とやらを呼び出すつもりの様だ』」

知ってますよ、エヴァさんが『おわるせかい』でぶっ飛ばすんですよ……

「『私の下僕なら、それを阻止してみるッ！出来なかったらOS H I O K Iだッ！』」

え？、

ええええええッ！

そんな、それじゃあ、

『頑張ったけど木乃香さんの奪還は無理でした、作戦』が使えないじゃないですかッ！

そんなエヴァさんッ！

「『安心しろ、詠春を倒した奴は私が倒してやる、しかしそちら側に行くのに少し時間が掛かる、私が行くまでに近衛木乃香を奪還し、守りきって見せるッ！』」

そ、そんなッ！

「『ほら、急いで近衛木乃香を奪還して来いッ！』」

チ、チックシヨオオオオオッ！

S i d e O u t

S i d e 近衛門

「『ほら、急いで近衛木乃香を奪還して来いッ!』」

……………く、

……………くくく

くくくく、

計画通りじゃッ!

事は今、わしの計画通りに進んでおる

今回の事で慎二くんが情に弱いことに確信が持てた……

(学園長は慎二がOKした理由を理解していません)

そもそも木乃香を魔法に関わらせずに過ごさせる事など不可能だったのじゃ

仮に魔法に関わらずに過ごす事が出来たとしても
大学生まで、それを過ぎたら関西に戻らねばならん
そうすれば木乃香を操って関西を牛耳ろうとする者が必ずや出て来る

魔法に触れさせようとしても、関東魔法協会の保護しか無ければ、穴を突くのも簡単じゃ

そのためのネギくん、ネギくんは『サウンドマスター』の息子故に敵は多い……

しかし、逆に味方は敵以上に多い……

ネギくんのパートナーになれば……気に食わんがMMの庇護も得られる

しかしネギくんには不安要素もある

そのための慎二くんじゃッ！

彼はネギくんにも、ネギくんパートナー候補達にも、無いものを持つておる

あの素早さや気配遮断は勿論

なにより

『彼我の戦力差を見分ける眼』と

『危険になれば意地や誇りも投げ出し逃げる事の出来る精神』

この二つはネギくん達には絶対と言って良いほど無い……

ネギくんもネギくんのパートナー候補もまだまだ子供じゃ挑発に乗ってしまふ事もあるじゃろう

慎二くんは中学生なのに、妙に大人びておるからのもうその点は安心じゃ

それに慎二くんがネギくん達と関係をもてば、木乃香の身も安全になる

それに、助けられた木乃香に意識があれば、吊橋効果とやらで良い雰囲気になるやもしれん

慎二くんの中で木乃香が『特別な存在』になれば木乃香の安全は保障されたも同然じゃ

慎二くんが木乃香を嫁に欲しいと言った時は殺す気で腕試しをさせてもらうがの

……悪いな、慎二くん

わしは慎二くんの人生よりも
ネギくんの将来よりも
木乃香の事が大事なのじゃ…

………すまん、慎二くん………

S i d e O u t

第24話（後書き）

ふはははッ！

アンケートが終わったぜッ！

慎二のアーティファクトはッ！

アンケート第1位

ATフィールドに決定だッ！

ジャンジャンパフパフッ！

皆さん

アンケートありがとうございました

第25話

Side三人称

辺り一面が黒に染まった森に四人……いや三人と一体の人影が動いていた

「千草さん、両面宿儵が封印されている大岩まで後どれくらいあるのかな？」

一人は、一度見たなら忘れる事が出来そうにない、白髪的美少年、
フェイト・アーウェルンクス

「そうだな、このままやったら後5分くらいちゃうか？」

京都訛りの眼鏡を掛けたイロイロとアウトなんじゃないか
と思う魔改造された和服を着た女性、天ヶ崎千草と

「ん、むっ、ん」

口に札を貼られた和服の少女近衛木乃香そして、それを抱える大きな猿の着ぐるみである

「ふふ、安心しなはれお嬢様、お嬢様のお友達は痛め付けるだけで命まで取るような事はしまへんよ……」

愉悦を堪え切れない声で優しく呟く天ヶ崎、そして

「……………」

何の感情も抱いていない様に見える冷たい目で見るフェイト

「ほな、さつさと両面宿儺の封印を解きにいきまひよか……、行くでッ！」

「ウキッ！」

急いで両面宿儺の封印を解きに行こうとする天ヶ崎、
式紙が抱えている近衛木乃香の魔力が封印を破る要の役目をして
いる大事な鍵である

その近衛木乃香が……………

ヒュッ！

「ウキッ!？」

一瞬にして猿の腕から掻き消えた……

「……………ッ!？」

「なッ!？なんやとッ!？」

あまりの異常事態に思考が止まる二人、
そこに

「キキッ」

影の様に黒いローブを被り、まるで夜に浮かぶ満月の様な骸骨の面をした男の様な存在……

「この娘は貰っていくぞ、魔術師殿」

ハサン・サッバーハの姿がそこにあった

Side Out

Side 慎二

うわっ怖えー

マジで、フェイトとか、主人公のライバルキャラ相手に近衛さんを奪還して来いとか学園長マジ鬼畜

姿は見られない様に変装してますけどこのまま、

逃げ切れずにアポーンって展開も十分ありますからね

え？アサシンですか？

全身を影で覆った後、前にふざけて道具作成のスキルで作った『アサシンマスク』を着用してます

ふざけて作った割には声まで変わり、セリフも自動でアサシンっぽくなるステキ仕様、
作ってよかった……

ただ体が震えたりすると普通に分かってしまうので注意が必要です
けどね

「お、お嬢様を返しなれッ！」

「千草さん、彼は危険だ、下がって……（僕が気づけない程の気配
隠蔽能力…ッ！）」

む、天ヶ崎の方は怖くないんですが（基本的にギャグキャラですし）
フェイトの方が怖いんですね
戦いになったら逃げる以外無いですし
さっさと逃げますか…

「では失礼させて貰うぞ魔術師殿」
訳

（それじゃあ失礼します、逃げさして貰います）

「逃がすと思ってるのかい……？」

「魔術師殿こそ、逃げられぬと思ってるのか……？」

訳

（マジ勘弁してくださいよ、戦うのとかスゲー嫌なんですけど、マジで）

さすが『アサシンマスク』、セリフが無駄にアサシンっぽくなってますね……

客観的に見たら凄い強そうに見える気がしますよ

「やってみなくては分からないだろう？
ヴィシユ・タル・リ・シユタル……」

うわッ！来たッ！呪文詠唱ってか早ッ！もう始動キー殆ど詠唱しますよッ！

よし、行けッ！

ヒュッ！ ヒュッ！ヒュッ！

「ヴァンゲ…何ッ！」

ガンッ！ガンガンッ！

驚いてますね……

そりゃ今まで気にしてなかった背後や真横から急に刃物が飛んで来たら誰だって驚きますか…

「キキッ、やはり」「この程度では」「倒せぬか……」

「なッ！」

辺りを見れば何故今まで気付かなかったんだと思う程に、森に広がる仮面仮面仮面仮面仮面仮面仮面

これこそ間桐逃走術四十八手の内の一つッ！

（本当に四十八手あるかどうかは置いといて）

『なんちゃって妄想幻像ッ！』

魔改造に魔改造を加えた『身代わりの紙型』を使用し、

総勢80人もの身代わりが時間稼ぎをしているうちに、本体は遠くに逃げるといふ

必逃技ッ！

ちゃんと改造してあるので本体の僕には及びませんが、それでもかなり高い気配遮断能力と敏捷を持っています

80人使用した場合、総費用約8億円ッ！

今回は約40人なので約4億円ッ！

素晴らしくリッチな技です

「な、なんやこれッ！？」

「……………チッ！（数が多い、分身？いや身代わりか……………？）」

「では、失礼する。魔術師殿」

「行かせな…ッ！」

ヒュッ！ヒュッ！ヒュッ！

「それは」「我等の」「台詞だ…」

アディオスッ！

フェイトくん、僕は逃げさせて貰うよッ！

ははははははッ！

|||||||（移動中）|||||||

ハッハッ……

ここまで逃げれば大丈夫でしょうか？

「ん、ん〜んッ！」

おわッ！

暴れないで……ん？

猿に抱えられていて、気付いたら黒マントの骸骨野郎に抱えられていた……

さて、では、骸骨野郎は？

完璧に悪者ですね……

「暴れないで欲しい、私は学園長殿に貴殿の奪還を頼まれた者だ……」

ベリッ！

「ん、おじいちゃんが……？」

ええ、貴女のおじいちゃんの、ぬらりひょんから頼まれてきました……

「これから、安全な場所に「せつちゃんッ！せつちゃん」が危ないんやせつちゃんの所に連れてつてッ！」運ぶ……自分の立場を理解しているのか？」

まったく桜咲さんの所は鬼がたくさんいて危ないっていうのに……
………ん？待てよ

このまま近衛さんを抱えていればフェイトに狙われる、………桜咲
さんに押し付けねば……

そっだッ！そうですよッ！

桜咲さんに近衛さんを押し付けて、僕は遠くから近衛さんが攫われないように監視してればいいじゃないですかッ！

危なくなったら『なんちゃって妄想幻像』をもう一度使ってネギ先生一行を抱えてトンズラすれば良いし………

「分かった……桜咲殿の所へ連れて行こう」

「ほんまッ！早くお願いッ！」

ふははは、待つてなさい！桜咲さんッ！

今から愛しのお嬢様を連れてつてあげますよッ！

このまま抱えていてもフェイトが『なんちゃって妄想幻像』を突破して追ってきますし

少しでも僕の安全を確保せねば……

近衛詠春さんにも石化の魔法を使っておきながら碎いてませんし……

殺す気は無いようすしね………

Side
Out

第26話（前書き）

遅くなっちゃってすいません

携帯で書いてるんですが間違って書いてる途中に電源ボタンを押して書いてる途中のやつが消えてやる気が激減してしまいました……

第26話

S i d e フェイト

ヒュッ！ヒュッ！ヒュッ！

ガンッ！ガキッ！ガキンッ！

くッ！……………

対処できない訳じゃない、威力が高い訳でもない
あらかじめ、障壁を張っていれば防げる攻撃だ
だけど……………

「ヴィシュ・タルリ・シュタル・ヴァンゲイト、小さき王、八つ足の
蜥蜴、邪眼の主よ、その光、我が手に宿し、災いなる眼差しで射よ
『石化の邪眼』」

ズシャアアアッ！

「キキッ」「ワザワザ詠唱など」「していては」「当たらないぞ？」

……………攻撃が当たらない…ッ！
恐らくは分身ではなく身代わり…
だけど、気配遮断能力とスピードが速いッ！

身代わりだとすれば攻撃が当たれば、札に戻る
近接に持ち込めば、比較的簡単に倒せそうだけど

ヒュッ！ヒュッ！

「ひ、ひゃ〜ッ!？」

クッ！また……ッ！

ガンガンッ！

近づこうとすれば、千草さんに攻撃が行く……
本当は守らずに近接に持ち込めば良いんだけど、
両面宿儺の封印を解けるのは彼女だけだからね……
このままだと時間だけが過ぎる……

……… 此処で、使うつもりじゃなかったけど………

「ラーク」

ボンッ！

この子を使うか……

このまま、近衛木乃香を逃がすわけには行かない……ッ！

「ルビカンテ、少しの間、彼女を守って」

コクッ

頷き、千草さんの所へ行くルビカント…
僕は……

ビュンッ！

「キッ！しまっ
」

ボツッ！

接近に持ち込んでかたずけるッ！

S i d e O u t

S i d e 偽慎二38号

「キッ！しまっ
」

ボツッ！

ああッ！偽慎二12号の頭がパンチで吹っ飛びましたッ！

ってか普通はパンチの効果音はせいぜい『シュッ』ぐらいでしょう
ッ！？

なんですか『ボツッ！』って、パンチの効果音じゃないですよッ！？

ボツッ！ビュオッ！ブウォンッ！

ああッ！あっという間に三体もの偽慎二達がッ！
クッ！

「全員散開ッ！あの女を狙えッ！」

……殺すつもりはありません

しかし、怪我ぐらいはしてもらいます

……誘拐しようとしたんです、自業自得だと思ってください

「ゲウウ」

ん？

あの悪魔、確かルビカンテでしたっけ、そのルビカンテが天ヶ崎を
抱えて上空に飛び上がりました……

……本体も身代わりも空は飛べないんですよ……

……どうしましょう

「……………ッ！」

ん？待てよッ！

フェイトはッ！フェイトは何処にッ！

「……………姿を現せ『冥府の石柱』」

.....

い~~~~や~~~~ッ！ 空から六角形の石柱が~~~~ッ！
デカツ！てか多ッ！

「君が千草さんを狙うのは分かってたからね、ルビカンテには君が千草さんを狙ったら上空に飛び上がる様に命令してある」

そ、そんな馬鹿なッ！

ってか、もう避けられない所までッ！

漫画じゃ分からなかったけど『冥府の石柱』って速いんですねッ！

「さよなら、名前も知らない暗殺者の身代わり君」

あ、もう間に.....

ズドオオオンッ！ズシャアアアッ！ガンガンガンッ！
ゴオオオオオンッ！

.....

「ここまで派手にやったら逃げられたかな

.....仕方ない、ネギ・スプリングフィールドの實力でも調べるか.....

.....」

S i d e O u t

S i d e 慎二

ズドオオオンツ！ズシャアアアッ！ガンガンガンツ！
ゴオオオオオンツ！

うえッ！なんだこの音ッ！
何か凄い音がッ！

「が、骸骨さんッ！
あ、あれ、あれ見てッ！」

「ん？つてうおッ！何やら巨大な六角形の石柱がッ！」

ま、まさか『冥府の石柱』ッ！
そんな、僕みたいな雑魚の身代わりに『冥府の石柱』って
無いでしょう普通ッ！

「な、なんなん？あれ？」

「貴殿は知らなくとも良い事だ……」

ど、どうでしょうッ！
桜咲さんの所へ行くよりも転移符連続使用して逃げた方が……
ああッ！ダメですッ！エヴァさんが来た時にこの場にいないければシ
バかれてしまいますッ！

……仕方ない

桜咲さんにさっさと近衛さんを押し付けて
フェイトの気を逸らしながらエヴァさんが来るのを待ちましょう……

「しっかりと掴まっている振り落とされぬ様にな」

「わ、わかったえ、そやからせつちゃんの所に」

「分かっている急ぐぞ」

このまま此処にいたら石にされちゃいますッ！

|||||||（移動中）|||||||

み、見えたッ！

鬼の集団の真ん中で竜巻が回ってますよッ！

ネギ先生が飛び立つ前ですか……

あ、竜巻がはれました……

強そうな鬼に不意打ちして、かたずけてあげますか……

ヒュンッ！ヒュッ！

ヒュッ！

「な、なんやッ！」

「ぐべッ！」

「不意打ちやッ！」

……なんとなくで造りましたが……
強いですね『なんちゃってダーク』

あ、桜咲さんがこっちに走って来てますね
さっさと渡しますか……

「貴殿が桜咲殿下……」

「このちゃんを放せッ！『斬岩剣』ッ！」

ブオンッ！

へ？

ぬおおおおッ！？

危ねえッ！

ガリガリガリッ！

か、仮面に斜め線の傷が……
仮面が無ければ即死だった……

というか何故いきなり攻撃をッ！

ん？髑髏の面を付けてこのちゃんを抱えている正体不明の男

……完璧に悪者です本当にありがとうございました

「ま、待つてくださいッ！桜咲さんッ！」

「ん？その声は…間桐…さん？」

ん？あれ？声が…　か、仮面がッ！
ぶち壊れてるッ！

「す、すいませんッ！間桐さんだと思わなかったものですからッ！」

まあ、仕方ないですか誰だって黒づくめの骸骨がこちら近衛さんを
抱えてたら誰だって誘拐だと思えますし……………

「せつちゃんッ！」

「このちゃんッ！怪我はないん？大丈夫やった？」

「大丈夫だったの木乃香？」

「無事ですか木乃香さんッ！」

何か感動の再会な展開になってますが
まずい、まずいですよこれはッ！

「このちゃんを助けてくれて、ありがとうございますッ！間桐さんッ！」

「いえいえ、仕事ですから……」

謙虚なアサシン……
似合わねー

てかそんなことより
こんな場所で名前なんて呼ばないでくださいッ！
もし、フェイトなんか来たら……

ザパアッ！

「へえ、君の名前は『マトウ』っていうのかい？」

……………マジで？

S i d e O u t

第27話（前書き）

慎二が付けているアサシンマスクは、
仮面に傷がついただけで、まだ慎二の顔にくっついてます

第27話

Side 慎二

「へえ、君の名前は『マトウ』っていうのかい？」

……………マジで？

……………そんな馬鹿な……………

なんかもう焦るとか通り越して冷静になっちゃってるんですけど……

……………

そんな、明らかに待ちしてましたってタイミングで出てこられても、

逆にどう反応していいか分からないんですが……………

「てつきりもう近衛木乃香を連れて

僕の手の届かない場所まで逃げてると思ってたんだけど……………」

ええ、その通り本当ならこんな場所来ずに逃げ出したかったんですが……………

もしエヴァさんが来た時

近くにいなかったらシバかれてしまいますから……………

「彼女達を見捨てられなかったのかい？ 甘い人間だね、君は」

「間桐さん……………」

いえ、桜咲さんに近衛さん押し付けようと思っただけです……

……だからそんな尊敬を含んだ目で見ないでください……

……桜咲さん……

……なんだか騙しているみたいで胸が痛みます……

「まあ、僕にとっては君のその選択のお蔭で近衛木乃香をもう一度奪うチャンスが手に入ったから別にいいけどね……」

「もう二度とお嬢様を奪われるなんてへマはしないッ！
お嬢様に指一本でも触れてみる、切り刻んでくれるッ！」

おおッ！桜咲さんッ！

なんて頼もしい……

……まあ、明らかに実力に差があるのが分かりますが……
エヴァさんはまだでしょうか……？

「ボソボソ（なあ、もう襲ってええんかいな？）」

「ボソボソ（ちょい待ち、今なんかええ所や邪魔したらあかんわ）」

「ボソボソ（まったく無駄にペチャクチャと……ずっと待つとる）
うちの身にもなれや）」

……なんかスゲー親近感が湧く鬼ですね……
普通に友達に成れそうです……

「君では無理だよ……
彼なら出来るかもしれないけど、君達を守りながらでは難しいだろうね……」

あ、僕ですか？

いえいえ、僕なんてあつという間にやられてしまつモブキャラに過ぎませんよ……？

「近衛木乃香を手に入れる前に『マトウ』君、
君を倒させてもらうよ……？君は僕達の邪魔になる、不確定要素を生かして置くべきじゃない……」

えええッ！『完全なる世界』は人殺しは好きじゃないんじゃないですか……？

「できれば殺すなんて事はしたくなかったけど君の力は異常だ

」

気配遮断を使い過ぎたッ！多分身代わりが結構なスピードだったのが拍車をかけちゃてますッ！

此処から逃げられるとは思いませんし……
腹を括りますか……

「……出来ると思いますか？」

やっぱり、声震えてないでしょうね？

「やってみなければ分からないだろう？」

やっぱりコレってイベント戦なんだろうか………
慎二は逃げ出したッ！

しかしこの戦いからは逃げられないッ！
的な………

「桜咲さんッ！周りの鬼をお願いしますッ！」

「えッ！？……はいッ！」

桜咲さんじゃロクに戦力になりませんし、逆に足を引っ張りかねませんからね

エヴァさんッ！早く来て下さいッ！

「ヴィシュ・タルリ・シュタル・ヴァンゲイトッ！」

「ライラ・ライル・ライド・ペルフォーソンッ！」

「『障壁突破・石の槍』ッ！」

「『戦いの旋律・三倍速』ッ！」

とりあえず逃げて逃げて逃げて逃げまくるッ！

S i d e O u t

S i d e ネギ

目の前で、あの白髪の男の子と間桐さんが戦っている……

僕じゃ見ることすら出来ない程のスピードで、移動して白髪の男の子の攻撃をすべて避ける間桐さんに

無詠唱呪文を駆使して戦う白髪の男の子も僕なんかじゃ話にならない、別次元の戦いを繰り広げてる

「な、なんだあの兄さんッ！

エヴァンジェリンの手下って言うから強いとは思ってたが、あんな別次元の強さとは思ひもなかったぜ………」

「まさか、間桐さんの本気があんなに速いとは………ッ！
私ではもう残像すら見えない……ッ！」

「ちょ、ちょっと待ってよッ！

あの人、確か間桐さんだっけッ！？
なんであんなに強いんだよッ！」

皆が驚いてる……

僕も強いつて聞いてたけどまさかタカミチみたいなデタラメな強さとは思ひもなかった

「ふんッ！」

ブウウオーンッ！

ガキンッ！

「くッ！？」

ッ！？

いつの間にか目の前に刀でこん棒を防いでいる刹那さんと

「ほらッ！兄さん達見とらんで、こっちに集中せいッ！」

大きなこん棒を担いだ怖い顔をした大きな鬼がいた

忘れてた……ッ！

そういえば僕等は鬼の大群に囲まれてたんだ……ッ！

「ネギ先生ッ！この鬼は私と神楽坂さんで受け持ちますッ！
ネギ先生はお嬢様を守りながら援護をッ！」

「えッ！？わ、私ッ！？

む、無理無理ッ！あんな強そうな鬼なんて倒せないよッ！」

「神楽坂さんのアーティファクトはこいつらと互角以上に戦う力を持っていますッ！」

た、確かに式紙っていう奴なら、アスナさんのアーティファクトは
凄い効くだろうけど……ッ！

「お嬢様を……このちゃんを守るためです
力を貸してくださいアスナさんッ！」

「……もうッ！仕方ないわねッ！木乃香のためよッ！怖いぐらい
我慢するわッ！」

「ネギ先生ッ！お嬢様をッ！」

「わ、分かりましたッ！任せてくださいッ！」

木乃香を守りながら、危なくなったらアスナさんと刹那さんを助け
られる様に注意しなくちゃ……ッ！

「アスナッ！、せつちゃんッ！無理せんといてな……ッ！」

間桐さんだつて頑張ってるんだッ！

麻帆良から頼もしい援軍を送るって学園長が言ってたから、
援軍が来るまで木乃香さんを守り通すッ！

「しょーがないわね、……」

じゃあ、鬼退治と行こうかッ！」

「はいッ！」

僕も援護をしますッ！頑張ってアスナさんッ！刹那さんッ！

鬼達は皆一斉に襲って来ずに数人は強そうな鬼は後ろの方で見てるみたいだ

だったら油断してる今、大技をぶつけるッ！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステルッ！」

S i d e O u t

第28話（前書き）

短
い
っ
す

第28話

Side 慎二

「『石の槍』ッ！」

ズッシャアアアッ！

ぬおッ！怖ッ！

でもさすがに『戦いの旋律・三倍速』の速度には追いつけない様で
すね……

この三倍速は龍宮さんでも見る事は出来ないでしょうし…

まさに赤い三倍の人の『当たらなければどうという事はない』状態
です

このままエヴァさんが来るまでの時間稼ぎが出来ればいいんですが

……

「『石の槍』ッ！」

うえいッ！掠った今掠ったよッ！

この速さで動いてるのに、残像を見て進行方向を先読みするなんてありえないですかッ！？

「ふう、中々当たらないね…

とりあえず君の顔だけは見ておきたかったんだけど……

……仕方ないか」

嫌ですよッ！顔を見られるなんてッ！

麻帆良まで追ってきて抹殺ルート確定じゃないですかッ！

「苗字だけでも分かれば君を特定するのも難しくない

『麻帆良関係者』で『マトウ』と言う苗字……

『マトウ』なんて苗字は中々無いからね……」

あ、……もしかしてもう死亡フラグ起っちゃってます？

……あれ？、僕死んだ？

いやいや、麻帆良には高畑さんやエヴァさんがいます

いくらフェイトでも麻帆良にやって来て高畑さんやエヴァさんみたいな猛者を倒すなんて無理でしょう………多分

「それに、此処で殺してしまえば早いしね

ヴィシユ・タルリ・シユタル・ヴァンゲイト

小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ、時を奪う毒の息吹を、『石

の息吹』」

ポフウウウウッ！

ぬあああッ！辺り一面に煙りがッ！

あんな触れたら石になる様な危険な煙りを撒くんじゃありませんよッ！

危なッ！てかマジで危なッ！

当たる所でしたよッ！

そんな大技使わないでくださいよッ！

僕みたいな貧弱魔法使いではあつという間にゲームオーバーですッ！

リセットボタンなんて便利な物は無いんですからねッ！

クソッ！エヴァさんはまだですかッ！

こんなの何回も続けてられませんかッ！

助けてーッ！エヴァえもんッ！

S i d e O u t

S i d e 刹那

クソッ！早く片付けて間桐さんを助けに行かなければならないのにッ！

「ほらほらッ！行くで嬢ちゃんッ！こんな機会滅多に無いからな、楽しもうやッ！」

クッ！天ヶ崎が私達を殺すなと命令したせいで、この鬼達、倒そうとせずに戦いを長引かせようとッ！

「しつこいぞッ！消えろッ！『斬岩剣』ッ！」

「な、しもうたッ！」

これで13体目ッ！

クソッ！後何体いるんだ……

お嬢様の魔力を大量に使ったからか、別格が何体が召喚されてると言うのにッ！

「さっさと終わらそうと思っとなるみたいやけどそうはいかんでえ」

チッ！何か手は無いのかッ！

龍宮がいたならまだ安心して戦えるんだが……

無い物ねだりしても意味が無いか……

「『雷の暴風』ッ！」

ドウンッ！ゴブアアッ！

「な、なんやとッ！」

「西洋魔術やッ！氣い付けッ！あのガキ厄介やでッ！」

な、これはッ！まさかネギ先生ッ！

まさかここまで大威力の攻撃が使えるとは……………

戦いは得意ではないと思っていたが……………

エヴァンジェリンさんと引き分けたというのは本当らしいな……………

「刹那さんッ！、援護は任せてくださいッ！それと、アーティファクトをッ！」

ッ！そういえばまだ、アーティファクトを使ってなかったっかッ！

どの様な物が分からないが……………

このまま戦うよりマシだろう……………

まだ鬼達が百体近くいるんだ、使わない手はない

「アデアットッ！」

間桐さんがあの白髪の少年を相手してくれている間に
全て片付けてみせるッ！

S i d e O u t

S i d e フ ェ イ ト

速いね……

もう目で見える事は出来ない……

まさか、ここまでとは……

厄介だな、残像を見る事すら困難なのに、攻撃を当てなくちゃならないなんてね……

さつきから動き回って、こちらの攻撃を警戒してるようだし……

さすがに何回も外す様なヘマは出来ないしね……
気を逸らすか……

「ふう、中々当たらないね……

とりあえず君の顔だけは見ておきたかったんだけど……

……仕方ないか」

少しの間、話をして隙を晒すのを待つか……

……返事は無いようだね

当たり前か、隙を晒す事は死を意味してるから

僕みたいな障壁を張ってないと戦いの最中に話すなんてしないからね……

「苗字だけでも分かれば君を特定するのも難しくない
『麻帆良関係者』で『マトウ』と言う苗字……
『マトウ』なんて苗字は中々無いからね……」

「少しずつプレッシャーを掛けて、動きが鈍るのを期待するかな……
……」

「……これが当たればいいんだけど」

「それに、此处で殺してしまえば早いしね
ヴィシュ・タルリ・シュタル・ヴァンゲイト
小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ、時を奪う毒の息吹を、『石
の息吹』」

「ポフウウウウッ！」

「やはり無駄かな……
だったら動き回れ無いように周りの地面を抉ってみるか……」

「ヴィシュ・タルリ・シュタル・ヴァンゲイト」

「……………（数分後）……………」

辺り一面を穴だらけにしてみたけど
こんな手には引つ掛からないか……

彼も身代わりも虚空瞬動や飛行魔法の類を使わないからもしかしたらと思っただけど……
無駄だったかな……？

「『石の槍』ッ！」

当たらない……か

ガッ！

「なッ！これはっ」

ッ！ふふ、運がいいね…

まさか本当に足を引つ掛けるなんて思わなかったよ

実力が上がるに連れてこういう古典的なミスをしてしまうのかもね

……

ヒュンッ！

「隙あり……だよ」

「な、しまっ」

この距離で外すなんて事は絶対にしない……
まさかこんなふうに決着が着くなんて思いもしなかったよ『マトウ』
君……

「さよならだ……」

グシャッ！

第29話（前書き）

後書きで他の人の事なんかの説明があるので見てねッ！

第29話

Side三人称

グシャッ！

少し離れてしまえば聞こえなくなる様な音が、周りでは鬼達が暴れている中、何故か妙に周りに響いた

「ガ、…ゴボツ！」

水が混じった様な音が響く……

（何故、どういう事だ……？）

フェイトは理解する事が出来ない

（確かに『マトウ』という名の存在を攻撃したはずだ
あの距離で外すなんてありえない……）

ポタン、ポタン、

「へ、あれ？」

自分が死んでいないと気付いた間桐慎二のマヌケな声が辺りに響く

（何故、何故『マトウ』という暗殺者が無事で『僕の体に穴が空いている』ッ！）

そして自分の攻撃が間桐慎二に届かなかった理由にようやく気づく

（な、これは……）

腕だった。

力を入れれば容易く折れてしまいそうな、細い腕

その腕が人の体など容易に貫通する程の威力を秘めたフェイトの攻撃を止めている

そして、その腕の主がフェイトと間桐慎二の間に悠然と立っていた

「……ゴボッ！……ゲホッ！

（これは、影のゲートッ！？僕が気づけない程の高度な物をッ！）」

そして、今まで影も形もなかった邪魔者がどうやって現れたかに気づくフェイト

そして、その姿はどうしようも無い程に隙だらけだった

「うちの馬鹿が世話になったな、若造」

「…ゴボツ！しまっ」

ドオオオオゴゴオオオオオンツツツ！

明らかに人の出せるパンチの効果音の限界を超えたような破壊音が鳴り響く、

そしてその破壊音の原因が颯爽と間桐慎二の前に立つ

「まったく、少し位良いところを見せれないのか……………
もう少しピンチになってから出るつもりだったのに……………、
あんな所でこけるなんてヘマをするんじゃないッ！
この馬鹿慎二がッ！」

「あ、あはは……………」

……………「面目ない……………」

「ふんッ！まあ、良い……………」

私が来たんだあの白髪の餓鬼は私が潰してやるっ……………」

私に泣いて感謝して忠誠を誓うんだなッ！」

余りにも傍若無人、しかし、その態度が不思議な程に似合う少女

『禍音の使徒』『人形使い』等の二つ名を持つ真祖の吸血鬼

『闇の福音』

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

がそこに居た

「はは、じゃあ、お願いしますね、エヴァさん……」

「任せておけ、私の最強っぷりをしっかりと目に焼き付けるがいい」

無然とした態度でフェイトが吹き飛んで行った方向を見るエヴァンジェリン、

その片手間の様に呪文を唱えだす

「とりあえずあの鬼共を吹き飛ばすか……」

リク・ラク・ラック・ライラック、

来たれ氷精、闇の精……」

いきなり大技をかまそうとするエヴァンジェリンと、驚きのあまりテンパる慎二

「さ、桜咲さんッ！他の人を連れて逃げてくださいッ！巻き込まれますよッ！」「えッ！？何ですか間桐さんってエヴァンジェリンさんッ！？

わ、分かりましたッ！逃げますよアスナさんッ！ネギ先生ッ！お嬢様を……」

「えッ！どうしたのよ刹那さんッ！？」

「あ、あれッ！？エヴァンジェリンさんッ！？」

後で説明しますッ！はやく逃げますよッ！アスナさんッ！木乃香さんもはやくッ！」

「な、なんなん？ネギくん、エヴァちゃんがどうかしたん？」

これからどうなるかが分かった、ネギと刹那に引かれてこの場を離れるアスナと木乃香

そこに、

「『闇の吹雪』ッ！」

辺り一帯を巻き込む氷属性魔法が鬼達を吹き飛ばし、凍らし、砕くネギとは比べる事すら出来ない馬鹿げた威力に騒然とする一同
その空間で

「フハハハッ！停電の時以上だッ！やはり、思いっきり魔法を打つのは良いッ！」

高笑いするエヴァンジェリン、
100近く居た鬼達は一体残らず砕け散り、まるで最初からいなか
った
かと思う様な光景が広がっている

そして、林の陰で覗く存在

「遅かった様だな……………」

「なんだか、出るに出られないでござるな……………」

「見たアルか楓ッ！氷がブワーって鬼みたいな吹き飛ばしたアルッ！」

……………出ようか出まいか迷う三人が居た

S i d e O u t

S i d e 慎二

はぁ、とりあえずもう命の心配はありませんね……………

というかエヴァさん…強すぎでしょうよフェイトのパンチも凄かったです、

エヴァさんのパンチ大砲みたいな効果音でしたよ……………

『うわよう！、よつよい』

みたいな……………

「おいッ！慎二ッ！何か失礼な事を考えなかったか？」

「い、いえッ！何も…ッ！」

「……そうか、ならいいんだが……」

エヴァさん鋭すぎでしょう……

まあ、これで僕の仕事はおしまいですね……

良く頑張ったぞ僕ッ！

偉いぞ僕ッ！

「ふん、あの白髪の餓鬼……、造り物だった……逃げた様だな……つまらん」

よっしゃッ！今僕の死亡フラグがへし折れて、生存フラグが起った事が確認されましたッ！

ここまで来たかがありましたね、
今回使った身代わりの代金を学園長に要求してもいいですが

なんやかんやの内にはうやむやにされてしまつてしょう……

ならば『貸しー』に持って行くのが理想ですね……、僕はこの『貸しー』が最大に活かせる状況を『知っています』

これは全て僕の平和の為の礎となります

ふ、ははは、ははははははははッ！

「慎二、さつきからニヤニヤとキモいぞ？」

ぐっはあああッ！

こ、心の柔らかい部分が大変な事に……ッ！

「エヴァさん、僕のガラスのハートがブローケン・マグナムなんです……」

「うるさいな、キモい物はキモいんだ、光にするぞ」

酷過ぎる……

「エヴァンジェリンさんッ！

助かりましたありがとうございますッ！」

「ふんッ！私の見せ場があっただけだ、貴様等を助けた訳じゃない……」

「あれ、なに、エヴァちゃん、照れてんの？」

「照れてなどおらんッ！馬鹿か貴様はッ！」

「照れない照れない、なんだ、エヴァちゃんも可愛い所あんのね」

「誰が照れているッ！後可愛いとか言っくなッ！」

……なんか、凄く微笑ましい光景ですね……

ま、一件落着という事で……

「間桐さんッ！危ないッ！」

え？

グシャッッ

「ガフッ！、え、あれ？」

あれ？なんで……腹が熱い……

「君だけでも消えて貰うよ……『マトウシンジ』くん」

「キ、キサマアアアッ！」

あ、え？

……暗、…寒

S i d e O u t

第29話（後書き）

慎二は狙うのはエヴァさんだし、エヴァさんなら刺されても平気だろう、と

油断してました

後、千草さんは、フェイトを追っかけてる途中で原作みたいにチャゼロに気絶させられてます

おまけ

その頃の小太郎

暗い林の中に立っている一人の少年

「……千草姉ちゃんがネギの奴が来るから、足止めせえって言われたんやけど

……来んなあ」

小太郎はその後千草を気絶させたチャチャゼロにボコボコにされました

完ッ！

第30話

Side 慎二

……ん、ん、

あれ、此処は？

板張りの天井、かなり和風チックですね……

……此処？どこでしょう？

……てか、なんで此処に居るんでしょう？

||||| (数分後) |||||

……ああ、確かフェイトに刺されたんでしたっけ、良く覚えてませんが……

痛く無くてよかった……

あの時は訳も分からずない内に意識が途切れましたからね……

もし痛覚が残ってたらあまりの苦しみに泣きわめいて恥を晒す所でした……

とりあえずお約束を果たしますか……

「知らない天井だ……」

「そんなくだらんジョークが言える様なら大丈夫みたいだな」

んッ!?

頭の方から僕の恥ずかしい台詞に突っ込む声が…

まあ、声の主は分かりますがね

「エヴァさんですか……僕が刺された後はどうなったんですか？
後、此処どこですか？

ついでに今何時ですか…？」

「お前が刺された後、あの白髪の餓鬼は逃げ出した、
その後、ぼーやと仮契約した近衛木乃香のアーティファクトでお前
の傷を治して関西呪術協会、つまり近衛木乃香の家でお前が起きる
のを待っていたんだ
後、今は朝の8時だ……」

成る程、刺されるのがネギ先生か僕かの違いはあれど概ね原作通り
ですか……

……イレギュラーがでしゃばるものじゃありませんね…
……危うく死にかけました

「大変だったんだぞ、近衛木乃香は泣きわめくわ、神楽坂アスナは
気が動転したのか泣き出すわ、
最終的に精神を安定させる魔法を使って無理矢理落ち着かせたんだ、
神楽坂は効きにくかったがごり押しだ
本当に大変だった……」

「…それは、……すみません…」

「まったくだ、この馬鹿がッ!」

さすがに目の前でスプラッタな光景見せられたらそうなりますよね
……

近衛さんはただの中学生ですし……

神楽坂さんは……ガトウさんと被ったんですね……

回想シーンでは胸だか腹だかに怪我をしましたし……

「ぼーや達はこの後、ナギが一時期住んでいたという別荘に行くそう
うだ、お前も行くか？」

「体が動きませんよ……、目線を上げる事すら億劫です、大分疲れ
ているみたいですネ……

エヴァさんはどうするんですか？」

「私か？…私は京都観光だこんな機会中々無いからな」

「いつもこき使っている下僕を心配して看病するって選択は無い
んですか……？」

「ふんツ！なんで私がお前の看病など「マスターは先程、お手洗
いに行かれるまで、寝ずに間桐さんの看病をしていました」しな……
ちや、茶々丸ツ！余計な事を言うなツ！」

居たんですか茶々丸さん、視線が天井から動かせませんかから喋って
くれないと誰が居るか分からないんですが……

「……………それにしても、意外と優しいんですねエヴァさん」

「な、誰がッ！、別にお前の為では」

「ツンデレ乙」

「~~~~~ッ！、行くぞ茶々丸ッ！ついて来いッ！」

「あ、マスター、すいません間桐さん、それでは……」

「構いませんよ、……では京都観光を楽しんで来て下さい」

そのまま、ドスドスと怒ったエヴァさんの足音と、まったく音がしない茶々丸さんの足音が遠ざかって行きますね……

「……………失敗したなあ」

近衛さんは攫われた時点でもう魔法に関しては知る事になりましたが西洋魔法使いの従者になったのは僕の責任ですね……

原作なら石化魔法を受けたネギ先生を助けるために仮契約を行いました、

つまり西洋魔法使いの従者になったのは僕の責任にはなりません

しかし、今回の話は別です

近衛さんは死にかけた僕を助けるために仮契約を行った

つまり、近衛さんがネギ先生の従者になってしまったのは僕の責任

学園長は進んで近衛さんを魔法に関わらせようとしてますが、明言した訳ではありませんからね……

学園長への貸しは無いですか……

いや、貸しは作れるかもしれませんが、魔法世界行きを断れるかどうか……

最悪の場合、魔法世界編でネギ先生達を助けるために魔法世界に行つて欲しい、と言われた時に断る材料が欲しかったです……

命張って頑張つても、せいぜいお褒めの言葉ぐらいですか……

学園長が責任を感じてくれてたら大きな貸しとして扱えるんですが

……

なんと言つか自分からお礼の事とか言い難いんですね……

がつついてると思われたくないと言つか……

………仕方ない

麻帆良祭編で学園長に恩を売れる様に情報やら何やらを流しますか

……

超鈴音の『魔法を世界にばらす計画』は僕の幸せな日常の破壊にしかありませんからね……

……はあ、

……割に合わない

S i d e O u t

S i d e ネギ

「慎二の奴が目を覚ましたぞ」

怒った様な態度のエヴァンジェリンさんが、皆が心配していた事を言った

よかった、木乃香さんのアーティファクトは強力ですけど、もしも、つて事があるから…

「本当ですかッ！だったら間桐さんも一緒に……」

「体が動かんそうだ、あの状態では立つ事すら出来まい」

「え、じゃあもしかして後遺症とかが…」

「いや、ただ疲れただけだろう……ほら、さっさと行け」

「あ、間桐さんにお礼と挨拶を……」

「良いから行ってこいッ！あの調子じゃもう今頃は寝てるだろ、ほ
ら行けッ！」

「うわッ！」

そのまま、別の部屋に押し飛ばされてしまった

痛たた、乱暴なんだから……

それにしても間桐さん、目が覚めたみたいでよかった……

エヴァンジェリンさんは寝てるって言うてたから、父さんの別荘を
見た後改めて挨拶とお礼を言いに行こうつと

「ネギーーッ！何やってんのよッ！皆準備出来ちゃてるわよッ！」

「あ、はいッ！今行きます待ってくださいアスナさんッ！」

この屋敷の入り口、階段の近くからアスナさんの声が聞こえる

もう皆、外でまってるや、急がなきゃッ！

急いで階段まで走ると少し怒った感じのアスナさん

「もう、何やってんのよ、ほらさっさとするッ！」

あれ？アスナさん一人、皆は？

「えと、皆は……？」

「もう先に下りちゃてるわよッ！あんた待ってて遅れてるんだからねッ！急ぐわよッ！」

わぁッ！、待ってくださいよッ！
もう、アスナさんってば……

ガシッ！

へ？

「ほらッ！行くわよッ！」

「あ、アスナさんッ！階段を駆け降りるのはッ！」

ズッダダダダダダダダダダダダダダダダッ！！

う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！

怖い怖い怖いッ！速ッ！ちょっと速過ぎますよアスナさんッ！

ズザアアアアアアアアアッ！

「ふう、着いたわね……」

「あ、アスナ、遅かったやん、どないしとったん？」

「ネギを待つてたらね、まったく」

「ふん、そかそかじゃどないして遅なったんネギくん……ネギくん？」

「怖い怖いッ！速い速いッ！まってアスナさん、まってくださいッ！こんなスピード出してたら死んじゃいますッ！あ、あああああああッ！」

「あゝ、……てやッ！」

ズベシッ！

「ふあッ！、あれ僕は何して……？」

「ネギくん遅かったな、何しとったん？」

あれ、確かアスナさんに抱えられて……あれ？

まあ、いつか

えと、遅くなった理由は……

「エヴァンジェリンさんと話してたんです、間桐さんが起きたって」

「ほんまかッ！」

「本当ッ！先に言いなさいよッ！お礼まだ言って無いのにッ！」

……話を聞かなかったのはアスナさんじゃないですか……

「でも、疲れてる様だからもう寝ちゃてるだろうって」

「なんや治ってない所あらへんかったか？間桐さんが……ああなって
もうたのはウチのせいやし………」

「木乃香さん………」

でもあれは………」

「ウチがわがまま言わへんかったら間桐さんもあんな大怪我する事
も………」

「木乃香………」

いつもぼやぼやしてる木乃香さんが悲しそうにしてる……
……なんとかしなくちゃ……

「だったら間桐さんが起きたらいっぱいいっぱい謝って、いっぱい
お礼を言いましょう、僕達が出来るのはそれだけです………」

「ほうか……そやな、帰った時に起きとつたらお礼言ってから謝ら
んとな………」

「私も、木乃香助けてくれたし木乃香を助ける為にあんな大怪我し
たんだしね………」

「帰ったら皆でお礼を言いに行きましょうッ！」

「……そうね、帰ったら皆で行きましょう」

「せやな、皆で行こか」

間桐さん、本当にありがとうございました

間桐さんが居なければ木乃香さんは攫われたままだったかもしれない
せん……

帰ったら絶対に言わないと……

S i d e O u t

第30話（後書き）

慎二は死の感覚と言つものを理解してません

気付いたら、あれ？胸が熱……気絶

と、痛みとか恐怖とかを感じる前に意識が切れたので
トラウマとかにはなってません

第31話（前書き）

説明の回

第31話

Side 慎二

……んあ……

………んん、ふわあ

寝ちゃったみたいですね……

……それにしても体が重い……、朝程ではありませんが動かすのに時間がかかりますね……

ふうあああああ

ゴキッゴキゴキゴキ

っはあ、体を動かして無いからでしょうか、首と背骨、腰の辺りが
すんごい音立ててますよ……

結構暗いですね…… もう夜って所でしょうか？

………あれ？

修学旅行って今日が自由行動の最終日じゃありませんでしたっけ……

……

………え？マジで？

「寝、寝過ぎたッ！」

は、早く帰らねば…ッ！

あ痛ッ！痛たたッ！

筋肉痛で体がッ！やっぱり日頃運動しない奴が三倍速で動き回るもんじゃないですねッ！

ガラガラ

「あ、起きたんですか間桐くん…」

「んあ、呪術協会の長の近衛詠春さんでしたっけ…」

やっぱり、詠春さんが帰ってるって事は、四日目の自由行動終わってるッ！

四日目は寝ただけですかッ！？

修学旅行の思い出、餡蜜食べて、刺されて、寝ただけですかッ！

そ、そんな……

「ど、どうしたんですか、先程から百面相を……まさか、怪我が治って無いのでは……」

「あ、いえいえ、何でもありません、それと怪我はもう治ってます」

「……そうですか？…なら良いのですが」

あはは、さすがに目の前で百面相は駄目ですよね……

というか今は何時頃なんでしょう…？

「すいません詠春さん、今は何時頃なんでしょうか……？」

「ああ、今は夜の１０時ですよ、起こすのも悪いのでそのままにしていたのですが……」

「思いの外起きるのが遅かった……という事ですか」

「ええ、まあ、そういう事です」

まあ、確かに１０時まで寝てるなんて思いませんよね、仕方ないと言えば仕方ないですか…

「他の皆は、やっぱり嵐山に……？」

「ええ、ネギくんとアスナくん刹那くんに木乃香は、間桐くんが起きるまで待つ、

と聞かなかったんですが遅いので帰らせました」

「まあ、仕方ない事ですから、それと僕の事は麻帆良の関係者には……」

「ええ、伝えてあります、間桐くんの身代わりも用意しましたし大丈夫でしょう」

……暴走はしませんよ……？今度はちゃんとした術者に用意させましたから」

ああ、良かった、さすがに男のストリップは目が腐りますからね……

もし、そんな事になったら僕の社会的地位は消滅してしまいます
次の日に自殺してもおかしくありませんよ……

「改めて、間桐くん、木乃香を助けてくれて本当にありがとうございます
いました」

「え、ちよつ、頭を上げてくださいよ詠春さんッ！僕はたいしたこと
としてませんし……」

いきなり正座して頭を地に擦りつける様に礼を言う詠春さん

ちょッ！さすがにそんな事されるとどんな反応すればいいかわからないんですけどッ！

「いえ、君が居なければ両面宿儺の封印は解かれていたでしょう

……途中エヴァンジェリンが来たとはいえ両面宿儺の攻撃がネギくん達に当たっていた可能性も有ました……

……それに最悪の場合、木乃香も無事ではすまなかったでしょう……

……」

「近衛さんが……ですか？」

原作では特にたいしたことは無かったと思いますが……

「ええ、言いたくはありませんが…… 木乃香が攫われた理由は魔力タンクとしてです、…… 魔力タンクに意思は必要ありませんから……」

それに、そのまま木乃香を人形にして、関西を牛耳る事も出来ます」

「……ッ！なるほど、そういう事ですか…… 確かに可能性としてはありますね……」

原作でも脅しとしてですが天カ崎も言っていましたからね……

関西を牛耳ろうと思う人間が近衛さんを人形にする可能性は充分にあつたんですね……

「間桐くんにはいくら感謝しても足りません…… 本当にありがとうございました」

「しかし、関西呪術協会の長の娘である近衛さんを、魔法使いの従者にしてしまったのは僕の責任ですし……」

「いえ、関西呪術協会にはまだ木乃香を利用しようとする人間はいらっしゃいます、

そんな場所に木乃香を置いておく訳にはいきませんから、そう遅くない内に木乃香は魔法使いの道を歩んだでしょう」

間桐くんには責任はありませんよ、遅いか早いかの違いです」

「は、はあ」

あれ？、もしかして僕が悩んでいた事って全然たいしたこと無かった？

え？、ていうか僕かなりのお手柄？

「私に出来る事なら何でも言ってください、君には返しきれない程の恩が有る」

「え、あ、あの、特には……」

学園長にお願いしたい事はありますが……

ていうか近衛さんがネギ先生の従者になったのが僕の責任じゃないなら学園長に大きな貸しがッ！

よっしゃッ！良く寝過ごした僕ッ！

「……そうですか、本当に何か無いんですか？遠慮しなくても……」

「いや、本当にいざそう言われると……何かお願いしたい事が出来たら、という事で……」

「そうですか、もし出来た様なら遠慮なく言ってください」

「あー、はい」

いやあ、一気に気が軽くなりましたね…
やっぱり責任が重大な事は苦手です

いやいや、しかし、このまま行けば学園長に大きな貸しがッ！

魔法世界編を回避出来る可能性がッ！

よっしゃッ！よっしゃッ！

ふふふ、ふははははははははははは

S i d e O u t

おまけ

四日目の偽慎二

「君達、地元の子？僕は麻帆良から修学旅行で来たんだけど、オス
スメの店とか知ってたら案内してくれないかな？」

「えーもしかしてナンパ？」

「あ、でもよく見るとこの人カッコイイかも……」

「え、本当？あ、本当だ結構カッコイイ」

「名前はなんてーの」

「慎二って言うてくれると嬉しいかな」

「ヘーシンジさんって言うんだ」

キャッキャッ

「た、隊長ッ！慎二の奴が女の子をッ！」

「な、馬鹿な、あいつは顔は良いがヘタレた雰囲気のせいでいつもは三枚目だというのにッ！」

「なんだ…ッ！？今日のあいつは変だぞッ！」

「そうだ…ッ！妙に輝いているッ！」

「抹殺をいや、虐殺をッ！」

慎二の知らない間に着々と死亡フラグを乱立していた……

「……………異端審問だッ！……………」

第32話

S i d e 三 人 称

早朝、関西呪術協会の入口、呆れる程クソ長い階段の前に二人の人影があつた

「すみません、お世話になりました、朝食まで頂いちゃって…」

「この程度は構いませんよ、貴方には返しきれない程の恩があると
言つたでしょう？」

何かしたい事が出来たら言つてください全力でサポートします」

申し訳なさそうにする間桐慎二と、朗らかな笑みを浮かべる近衛詠春

「あはは…、考えておきます……
それでは…」

「ええ、身代わりは間桐くんが触ると消える様にしてあります」

「何から何まですみません……世話になりっぱなしで…」

「気にしないで下さい、私が勝手にやっているだけですから…」
「改めてそれでは失礼します」

「はい、また何時でも来て下さい」

挨拶を交わし階段を下りていく慎二とそれを見送る詠春、律儀にも
慎二が見えなくなるまで立って見送っている
そして、慎二が完全に見えなくなると、

「彼には本当に世話になってしまいました……

本来なら関東魔法協会の人間はこの件に関係が無いというのに……、
彼が居なければ両面宿儺は復活し、一般人や関西呪術協会はかなり
の被害を受けていた事でしょう……

間桐くんには、頭が上がりませんね……」

目を閉じて、慎二が居なかった場合の事を想像し、今一度慎二に感
謝する詠春

そして、『ふう』、と一息つき少しの間、目を開けた……

そこには、温厚そうな父親の姿は無く

「天ヶ崎単独で今回の事を計画したとは思えない……

何時でも、木乃香が帰って来る事が出来る様に

……少し膿を弾き出さないといけませんね……」

鋭い眼光、辺り一帯の空気が重くなる様な威厳

今まで見せなかった関西呪術協会の長の姿がそこにあった……

「すみません間桐くん、君の願いを聞くにはまだ時間がかかりそう
です……」

そして、そう言った後ゆっくりと自身の仕事を片付けに、関西呪術協会に足を向けた……

S i d e O u t

S i d e 慎二

いやーいい人でしたねー詠春さん、何だかいい人オーラが体中から溢れ出してますね

しかし、麻帆良の学園長みたいな腹黒そうな人ならまだしも詠春さんみたいな人に頭を下げられるとテンパりますね

……小物臭さが魂にまで染み付いてます……

まあ、組織のトップに頭を下げられるなんて経験はそうそう出来ませんしね……

仕方ない事です

ん？そろそろ嵐山が見えてきましたね……

さっさと偽物と入れ代わりますか…

（移動中）

ん、気持ち良さそうに寝てますね

こっちは体動かすだけで筋肉痛でめちゃくちゃ痛いっていうのに……

それ、タツチ、

ポンッ！

おお、本当に触っただけで紙に戻りましたね……

本人が触ると戻る仕掛けなんですか？

しかし、今は…… 6時ですか

起床時間が確か、7時半でしたね

1時間半、時間がありますが……

お土産でも買いに行きましようか？

さすがに父さんと母さんにお土産買わなきゃいけませんし……

ハツ橋でも買ってきますか……

「 」（買物中）

ふう、今の時間で開いてるかどうか不安でしたが

開いてる店もあつて良かったです

「ん？んあ、早いな慎二、もう起きてるのか…」

「ええ、早く目が覚めてしましまして…」

「そうか……（チツ、制裁は帰る時か…）」

ん？なんか悪寒が……

「起床時間だッ！皆起きろッ！」

ん、鬼の新田が来ましたね…

さっさと移動しますか

「 」（電車の前で）

後は電車に乗って帰るだけですな

我ながら大変な修学旅行でした
死にかけましたが……………実感無いんですよ……………
気が付いたら

知らない天井だ…

でしたからね

「……………おい、慎……………」

「なんですか、全員そろ……………って？」

なんか全員、紫色のローブ着て木刀構えてるんですが……………

「な、なんですか、その格好は……………」

「……………間桐慎二、貴様を異端審問にかけるッ！……………」

「……………はあ？」

いや、何故いきなり異端審問？

「な、なんですかいきなり異端審問なんて……………」

「……………貴様ッ！知らぬと言っか……………なら教えてやるッ……………」

「まず四日目に女の子を口説きッ！」

「さらに、楽しげに会話をしッ！」

「オススメの店に連れてってもらいッ！」

「挙げ句の果てにはメルアドまで交換しやがってッ！」

「羨ましい妬ましい嫉ましいッ！」

ちよっ、僕の身代わり何してるんですかッ！

「「「「「よって、貴様を異端審問にかけるッ！死ねえッ！」「「「「」

木刀を振り上げ突っ込んで来るバカ×5、さすがに怪我ではすみませんね

ドカツ！バキッ！メメタアッ！メメタアッ！ゴスッ！グシャッ！

「げふッ！ば、馬鹿な」

「片付きましたね……」

5人をボコボコにして宣言してやります
僕が強かった事に驚いてますね

「お、お前はヘタレた、のび太みたいな奴では無かったのか……」

「ああ、勘違いしてる様ですが……僕のキャラはスネ夫です、強者に弱く、弱者に強いそんなキャラです」

「ば、馬鹿な……」

気絶したみたいです……

そろそろ電車が出てしまいますが……
放って置きますか……

S i d e O u t

おまけ

駅に横たわる紫色のローブを着た集団が叫んだ

「くそッ！ 慎二の奴があんなに強かったとは」

「予想外だ……」

「どうすればあいつを肅正できるんだ……」

「隊長……どうしますか……」

隊長と呼ばれた人物が呻く様に言った…

「……仕方ない、

総統に敵を討ってもらう、総統、須川総統ならあいつに裁きをッ！」

話が大きくなっていた

現在ステータス

主人公ステータス

慎二初期

Eは一般的な人間10人分（+は一時的に二倍、-は一時的に半減）

パラメータ

筋力 F -

耐久 F -

敏捷 A +

魔力 F -

幸運 F

宝具なし

保有スキル

【気配遮断 Rank A+】

自身の気配を消す能力。ただし、自らが攻撃態勢に移ると気配遮断のランクは大きく落ちる。

【黄金律 Rank A】

人生においてどれほどお金が付いて回るかという宿命を指す。Aランクの場合、「一生金に困ることはなく、大富豪でも十分やってい

ける」。

【矢避けの加護 Rank B】
飛び道具に対する防御スキル。
攻撃が投擲タイプであるなら、使い手を視界に捉えた状態であれば
余程のレベルでないかぎり通じない。ただし超遠距離からの直接攻
撃、および広範囲の全体攻撃は該当しない。

【道具作成：A】
魔力を帯びた道具を作成できる。擬似的だが不死を可能にする薬を
作ることができる。

から、

真名：間桐慎二
性別：男性
身長・体重：167？ 57？
属性：秩序・善
特技：賭け事、金儲け全般、
好き：平和、安全、のんびり出来る時間
苦手：戦闘、責任重大な事
天敵：エヴァンジェリン、学園長

パラメータ
筋力F
耐久F
敏捷A+

魔力 C -

幸運 F

宝具

【一撃必殺・痴漢抹殺・ジエノサイドスタンガン改】

麻帆良大学の科学部の女生徒が開発した痴漢撃退用のスタンガンを
道具作成のスキルで改造した物

相手の種族が【人間】であれば95%の確率で相手を気絶させる事
が出来る

【なんちゃって妄想幻像】

道具作成のスキルで改造した【身代わりの紙型】を使用して自身の
身代わりを作り出す

改造してあるので高度な知性と本体に近い戦闘能力を持つ

一枚約1000万円

保有スキル

【気配遮断 Rank A+】

【黄金律 Rank A】

【矢避けの加護 Rank B】

【道具作成：A】

【操影術：C】

影を操る魔法

Cランクならば影の槍、影を使つた盾、影を身に纏い身体能力を上げる事などが出来る

影で出来た使い魔などは使用不可

【影の転移：D】

影を利用した転移魔法

Dランクだと40？四方のゲートを作るのがやっと、江頭なら通れる

【戦いの旋律：B】

自身の肉体を強化する魔法

Bランクなら三倍速まで使用可能

【瞬動：B】

魔力・気を使つた移動術

Bランクなら精神が不安定な状態にならない限り成功する
精神不安定な状態だと成功率50%ダウン

【虚空瞬動：D】魔力・気を使つた移動術

Dランクだと精神が安定した状態でも70%の確率で失敗する

精神不安定な状態なら成功率0%

おまけ

完全態エヴァンジェリン

麻帆良の結界や登校地獄から解放されたエヴァンジェリン

パラメータ

筋力C+

耐久C+

敏捷B

魔力A

幸運B+

宝具

【真祖の肉体：EX】

長い時間を掛け弱点を克服した吸血鬼の頂点なる存在

不老不死であり体の一部が無くなったとしてもすぐさま再生する

幸運以外の全ステータスを2ランクアップ

保有スキル

【氷雪系魔法：A】

氷系統の魔法スキル

Aランクならば氷系統の魔法は全て使用可能

【闇の魔法：A】エヴァンジェリンが編み出した禁断の魔法
本来打ち出す魔法を自身の肉体に取り込む事で全ての能力を強化する

Aランクならば闇の魔法の精神汚染を受け付けない
自身の闇を飲み込んだ証

【合気鉄扇術：A】

百年程前にチンチクリンなオッサンに習った体術
Aランクは師範代を超えた最強レベル

【真租の肉体】の効果でパラメータは

筋力A+

耐久A+

敏捷EX

魔力EX++

幸運B+

強^くな^る.....

第33話

Side 慎二

「すまなかった、慎二くん」

今現在、学園長室にて学園長と対談中です、
修学旅行の件について謝罪やら何やらを聞いています

「あ、いえ、気にしないでください学園長」

最初からがつつき過ぎると御褒美目当てだって事が分かってしま
いますからね

気にしてませんよ

っていう雰囲気醸し出さないといけませんし……

「いや、そもそもはわしが今回の件を甘く見たのが原因じゃ
君を木乃香を助けに送ったのも、
君が怪我をしてしまったのも、
わしが関西と関東の確執を理解して無かったのが原因じゃ
すまなかった」

「ああ、いえ気にしないでください学園長、誰だってミスはありま
すし……」

「ミスで済む問題じゃないのじゃよ、
危うく君が死んでしまう所だったのじゃぞ？
本当なら君に罵倒されても文句はいえん程の失態をしたのじゃ」

学園長も反省してますね……
さすがに人死には避けたかったんでしょうね……
仮にも学園の長ですし、生徒が危険な目に会うのを、心配しない訳
ないですか……

「慎二くん、わしに何か出来る事はあるかの？
婿殿も同じ様な事を言ったそうじゃが、これくらいしか出来んから
の、
木乃香を嫁にくれとかは無しじゃぞ？」

ふむ、学園長にはとりあえず僕を巻き込むと損をする
という事を教えなければなりませんからね、
まずはコレですね……

「学園長すいません、近衛さんを救出する際に使用した魔道具の件
なんです……」

「ほ、なんじゃそんな事が任せるがよい、わしがちゃんと……
……おっかしいのう、
わしはボケてしまったのかの？
0の数がとっつっても多い気がするのじゃが……」

「学園長はまだまだお元気ですよ
目の錯覚ではないと思います」

さすがに、4の後ろに0が8個も並んだ請求書を見せられたら、誰でも自分はボケてしまったのかと思ってしまいますよね……

「え？……………慎二くん……………これマジ？」

「マジです、お願い出来ますか？」

「お、お、おう、ま、ま、任せるがよい、わしがしっかりと払っておこう……………」

「すみません、それともう一つお願いがあるんですが……………」

「ま、まだあるのか……………ッ！、つ、次はもうちょっと、爺に優しいお願いだとありがたいのじゃが……………」

大丈夫ですよ学園長、4億払うよりもとても簡単なお願いです……………
本当に簡単で些細なお願いですよ……………

「一度だけ、学園長の命令を絶対に拒否出来る権利をください」

これこそ、修学旅行編で頑張った真の理由ッ！

これさえあれば魔法世界編をパパッと拒否出来て、
ネギ先生達が魔法世界から帰って来た時にはハッピーエンドを迎えているという

最高にして最強の権利ッ！

「ほッ！？、……そんな物でよいのか？」

「ええ、さすがに死ぬ様な目に会うのはコリコリですので……」

少し表情に影を落とす事によって、まるで戦いを心の底から恐怖しているかの様な表情にッ！

……まあ、戦いは死ぬ程怖いんですがね？

「……そうか、あい分かったッ！
この請求書と先程君が言った権利、
学園長として、そして関東魔法協会の長として
しかと承ったッ！」

「ありがとうございます学園長……
それではエヴァさんの所に行くので失礼します……」

「うむ、本当にすまなかった、
そして、木乃香を助けてくれて、本当にありがとう……」

その声を聞いて、学園長も、ただのぬらりひょんじゃ無くて、孫を想うちゃんとしたお爺さんなんだな、と思った……

4億、請求したの悪かったかな………？

S i d e O u t

S i d e エ ヴ ア

「まずは足をなめろ
我が下僕として永遠の忠誠を誓え、
話はそれからだ……」

今この場には、ぼーやと神楽坂アスナ、近衛木乃香、桜咲刹那が居る

慎二の奴に謝罪と礼をしたくてこの場に來たそうだ……

今慎二はじじいの所に居るから帰れと言ったのだが……

私にも話があると言うから家に上げたが、
この私の弟子にな……

面白いかもしれん……

慎二の奴は弟子としては最低レベルだったからな……

修業をしようとなると、逃げる、嫌がる、怠けたがる、

…… 本当に弟子としては最低だったからな……

英雄の息子を闇の福音がきたえる……

ふむ、中々いいな……

「アホかあッ！……！」

スツッパアアアンツ！

「へぶうツ！？」

「何、突然子供にアダルトな要求してんのよッ！」

「あああ、貴様、神楽坂アスナッ！」

弱まってるとは言え真祖の魔法障壁をテキトーに無視するんじゃないッ！」

「アスナさん……、こちらは頼んでいる側ですから……」

「まあまあ、アスナ、落ち着いて……エヴァちゃんも、な？」

「近衛木乃香ッ！馴れ馴れしくちゃん付けで呼ぶんじゃないッ！」

クソッ！この私を叩きおつてッ！

あのアーティファクトが……

クソッ！契約カードをへし折ってやろうか……

「それに、エヴァちゃんッ！ネギがこんなに一所懸命頼んでるのに、ちよつと酷いんじゃないッ!?」

「そうやよ、エヴァちゃん、ネギくん鍛えたってもいいやろ？」

「だから、お嬢…このちゃんもアスナさんもこちらは頼んでいる側だという事を忘れずに……」

「だから馴れ馴れしくちゃん付けで呼ぶんじゃないッ！
そもそもッ！頭下げたくらいで物事が通るなら世の中苦労せんわッ
！」

まったくこれだから餓鬼は……

ん？、ああ成る程…

「ハンッ！それより貴様等……」

何で、ぼーやにそこまで肩入れするんだ？
やっぱりホレたのか？

10歳のガキに」

「な、ちち、ち、違うわよッ！」

「んゝ、確かにネギくんは可愛いしなゝ」

「わ、私にはこのちゃんという人が……」

「って何普通に答えてるのよ、木乃香ッ！
後、桜咲さん何言ってるのッ！？」
ん、近衛木乃香の方は特に何もいない……
桜咲の方は……ノーコメントだな……
神楽坂アスナの方が……

「ハハハ、どうした？」

耳まで赤くなってるぞ、カワイイじゃないか神楽坂アスナ」

「ち、違っ、私はただ……」

「ムキになって否定とは、ハハハ、つまり凶星かッ！？」

これはこれで……

中々面白いな……

慎二はこんな風に突っ掛かって来ないからな……

「違あああうッ！」

スパコオオオオンッ！

「ぱふぁッ！？」

ガチャ

「エヴァさーん、いますグハァッ！」

「「「あ、」「」」」

ん？痛くないな……

おおッ！慎二が下敷きになってるな…、
身をていして主を守るとは見上げた奴だ……

「「ま、間桐さん大丈夫ですかッ！？」「」

「間桐はん、大丈夫なんかッ！？」

「間桐さん、大丈夫なのッ！？」

慎二の心配をしてるのが、
つておいッ！

「私を心配しないかッ！私をッ！」

何、慎二の心配をしてるんだッ！

「エヴァちゃんだし……」

「エヴァちゃんやし……」

「「エヴァンジェリンさんですし……」「」

「まったく茶々丸ッ！起こせ…」

ふざけた奴らだ…

そんなんで私に弟子入りしに来たのか…

「はい、マスター、……大丈夫ですか間桐さん？」

「ああ、はい大丈夫ですよ茶々丸さん」

「おいッ！茶々丸ッ！私だッ！私ッ！」

ふざけおつてッ！

アレもコレもドレも慎二のせいだッ！

クソッ！面白くないッ！

「すみませんでした間桐さんッ！」

「ごめんなさい間桐さんッ！」

「ウチのせいであんな大怪我させてもって本当にごめんなさいッ！」

「私がお嬢……このちゃんを守りきっていたなら間桐さんが怪我する事も……ッ！」

「え？は？ええッ！？」

何私を無視して、話を進めてるんだッ！
この馬鹿共ッ！

S i d e O u t

第33話（後書き）

エヴァに弟子入りした理由は『おわるせかい』でスクナボコボコに見せたからじゃね？

と思う人もいるかもしれませんが
この作品のエヴァは『桜通りの吸血鬼編』でカリスマバリバリの無敵モードだったし

修学旅行でフェイトをぶっ飛ばしたりしてるのを見たので、
ネギが知ってる人間で1番強い人がエヴァだったからです

第34話

Side三人称

慎二が暇さえあれば入り浸っているエヴァンジェリンハウス、
その中では四人の人間が床に頭を擦りつける様にして、
一人の人物に頭を下げていた

「え？あの、え？何ですかこの展開？」

一人、この状況に付いていけない慎二、
まったく言っていない程、この状況を理解しておらず
何故自分は四人に頭を下げられているのだろうか？
と考えているのがまる分かりであった

「「「ごめんなさいッ！」

それと本当にありがとうございましたッ！」「」「」

「へ？……ああッ！修学旅行の件ですか」

慎二の中で修学旅行の件は終了しており、何故今更謝られているの
だろうと感じていた

むしろ、わざわざお礼を言いに来るなんて律儀だなあ、とさえ思っ

ていた

「すいませんでしたッ！間桐さんッ！私がお嬢……このちゃんを守れなかったからあんな大怪我を…
本当にすいませんでしたッ！」

「そんなせつちゃんッ！あれはウチが間桐さんに無理言っただけで
もうたから……
本当にごめんなさい間桐さんッ！」

「私だって全然役に立たなくて……私がもっと強かったら間桐さん
もあんな……
ごめんなさい間桐さんッ！」

「それなら僕だって役立たずで……修学旅行でも足を引っ張ってば
っかりで……
間桐さんッ！ごめんなさいッ！」

「あ、はあ、いえいえ構いませんよ？」

一気に謝られて、何だかどうでもよさそうな返事をする慎二

むしろ、無様に刺されて皆さんに心配を掛けておいて、自分の方が
駄目じゃね？

とか思っていた…

「「「ごめんなさい」「」「」

一斉に謝られ、後ずさる慎二、ここまで口を出さずに見ていた、エヴァが呆れた様にため息をついていた

（さっさと許さんと日が暮れるまで謝り続けるぞ…こいつ等

まあ、いいかコレはコレで面白いし）

内心そんな事を考えていたがまったく表情に出さず我関せずな態度を貫いていた

「僕は気にしてませんから、皆さんも気にしないでください」

「しかし間桐さんッ！」

「はいッ！僕が許すと言ったんだから許します、むしろ、このまま謝り続けられる方が困ります」

ハッキリと謝られる事の方が迷惑だと伝える慎二

それを聞き、しぶしぶと引き下がる四人

を確認して

「他に用件はありますか？」

「あ、はい、用件というかお礼を……このちゃんを助けてくれて本当にありがとございました」

「「「「ありがとございました間桐さん」」」」

「いえいえどういたしまして」

とりあえず、一旦は落ち着きを見せた四人と落ち着かせた一人

少しは落ち着いてきたので、自身が来た時の状況を質問した

「あの、家に入った時、いきなりエヴァさんが吹っ飛んで来たんですが……何があつたんですか？」

いきなり腹の上にエヴァンジェリンが飛んで来た事について質問する慎二

そして、一斉にアスナを見る三人と、目を逸らす一人

「あゝ、あれは、ネギ先生がエヴァンジェリンさんに弟子入りしようとしたんですが……」

少し話が拗れてしましまして……」

誰も説明しようとしないので自分がするしかない、と慎二に説明を始める刹那

「……でちょっとした乱闘になった所に僕が入って来て、エヴァさんと衝突した、という事ですか」

冷静に聞いている様に見える慎二だったが、内心、

（弟子入りフラグ来たッ！この後、古菲さんに弟子入りして、後の
NEG Iの誕生ですねッ！）

などと考えていた……

ネギに強くなってもらってハッピーエンドで終わらせてもらうには
弟子入りは必須であり、慎二も賛成していた

「良いじゃないですかエヴァさん、ネギ先生は育てがいがありそう
ですし、エヴァさんも楽しんで鍛えられると思いますよ？」

（エヴァさんに弟子入りしないと小太郎君にすらギリギリ勝てるか
分からない強さですからね
ガンガン鍛えてもらわないと………）

周りから見ると善意100%の笑顔で腹黒い事を考えながら、エヴァ
アンジェリンに告げた

「そうか？………まあ、お前がどうしても、と言っなら仕方ないな

……

良いだろうまずは弟子入り試験を受けてもらう」

（よく言った慎二ッ！

これなら神楽坂アスナやばーやの言う事を聞いたのではなく、
慎二がどうしても頼んだから弟子入りを許可した、という風にと
れる

私の望む展開に持つて行くなんで、この2年間で慎二の奴も私の下僕として成長しているみたいだな…)

腹の底ではそんな事を考えながら、まるで仕方ないな、と言う風に弟子入りを許可するエヴァンジェリン

……………紛れもない似た者主従であつた…

「弟子入り試験は……………そうだな、今度の土曜日にもう一度此処に來い、そこで試験の内容を教えてやる」

「…本当ですかッ！

間桐さん、エヴァンジェリンさん、ありがとうございますッ！」

二人が腹の中でイロイロな事を考えている事を知らないネギは満面の笑みで感謝を告げた

その純粋な笑顔を見せられた二人は

「あはは、気にしないでください、僕はちょっとエヴァさんに口ぞえしただけですし、

試験の合格、不合格はネギ先生に掛かっています、頑張ってください
い」

(そんな純粋無垢な笑顔で見られると、まるで自分が酷く汚い存在に見えてしまつて大分、心にダメージが来ますね……………)

「そつだぞぼーや、試験で手を抜く気は一切無い、全力を出さないとあつという間に不合格になってしまふぞ？」

（まあ、そんな勿体ない事はせんがな……

慎二にやろうとしたが試せなかった事は沢山有る、意地でも合格してもらつぞぼーや…）

二人は内心正反対な事を考えていた

しかしそんな事を気付く人間はおらず

ネギの弟子入りに希望が見えた事を四人全員で喜んでいた

（絶対に合格してもらつぞッ！）

（絶対に合格してもらいますッ！）

ネギの合格は決まったも同然だった…

第35話（前書き）

今回は間の話

第35話

Side 慎二

「「「お邪魔しました」」」

帰りましたか……

エヴァさんが弟子入りに関して妙に気合いが入ってましたが、……

…原作ではあんなに乗り気でしたかね？

……まあ、ネギ先生が強くなる分には全然構わないんですがね

「慎二ッ！、茶々丸ッ！

私は別荘で訓練メニューを考えて来る、邪魔をするんじゃないぞッ
！」

そのまま別荘が置いてある地下室に走って行くエヴァさん

乗り気ですね〜

原作以上に修業が厳しくなりそうですね、まあ、するのは僕じゃないから良いんですけどね

しかし、このまま進めばヘルマン、麻帆良祭、魔法世界ですか……

もし、もしもッ！の話ですが巻き込まれてしまった場合、逃走用の

アイテムを増やすべきですね

なんちゃって妄想幻像やスタンガンでは足りませんからね……

逃走を強化するアイテムですか……

「茶々丸さん、逃走を強化するアイテムと言ったら何がありますか？」

茶々丸さんならイロイロと、知ってそうですしね、
コンピュータを内蔵してますし、良い情報を教えてくれそうですね

「逃走を、ですか？」

……相手の五感にダメージを与える様な物などはどうでしょう？」

「成る程、五感にダメージですか、中々良い案ですね……」

ふむ、龍宮さんからイロイロ仕入れてた中にスタングレネードとか
有りましたね……

確か、部屋に隠してましたから、取って来ますか

「茶々丸さん、アイディアありがとうございます、ちょっと良い物
を作れそうなので材料を取って来ますッ！」

「あ、はい、間桐さんいつてらっしゃいませ」

そうと決まればさっさと取って来て、改造始めますか……
エヴァさん家は周りに家が無いから、結構大きい音出しても怒られ
たりしないんですねー

「……………」
(移動中)

えーと、確か、この辺に……………あつたあつた、マホネットで取り
寄せた『見た目と入る量が一致しない不思議なアタッシュケース』
……正式名が分からなかったんです

はッ！、今なんか電波が……
まあ、良いですかさ々とエヴァさん家に急ぎましょうか

「おい、慎二どこ行くんだった！？」

「ええ、ちよっとッ！では」

さっさと行きましょう

「……………」
「怪しい」

「……………」
(移動中)

ガチャ、

「入りますよ茶々丸さん」

「早かったですね、間桐さん、荷物をお持ちします」

「あ、いえ、お構いなく」

居間まで、移動してアタツシケースを開きます

中には先程言ったスタングレネードやら、催涙ガスやら、暴徒鎮圧用ゴム弾やら、ゴチャゴチャとしてます

ふむ、催涙ガスにスタングレネードを足して……他に何を足しましょうか……？

コショウとかも良いですね

「茶々丸さん、目や鼻にダメージを与えるには何を足せば良いと思いますか？」

「目や鼻、ですか？」

マスターは花粉が苦手ですが……他には唐辛子でしょうか」

「唐辛子ですか、その発想は無かった、ありがとございます」

ふむ、花粉は今からでは集められませんか、そもそも集めるのが面

倒ですし

唐辛子、良いですね、今から買ってきますか

「茶々丸さん、またまた失礼します」

「え、はい、いつてらっしゃいませ、間桐さん」

パパッと買ってきますか

||||||| (買物中) |||||

ふむ、コシヨウも唐辛子も手に入りましたね、
これで逃走用の煙幕が手に入ります……

「慎二ッ！こんな所にいたのかッ！」

「ん、どうしたんですか？」

そんな息を切らせて……」

自転車に乗ったバカが息を切らせてますね……、乗り回してたんでしょか？

「僕は用があるので失礼しますよ」

「あ、おい、慎二ッ！」

さっさと行きましょう

「……………（移動中）……………」

「失礼しますよ、茶々丸さん」

「間桐さん、勝手に入って来てもマスターも私も気にしませんよ？」

「いや、何というか、癖で……………」

ではでは、始めますか……………」

スタングレネードに催涙ガスにコショウに唐辛子に……………」

カンカンッ！

ガチャガチャッ！

ギューイーンッ！

デュクシヨンッ！

メメタアッ！

タッタラーッ！

…… 完成しましたね、名前はどうでしょうか？

…… 普通に『超煙幕』で良いですね

エヴァさんはまだ別荘から出てきませんか……

ふむ、量産しますか……

S i d e O u t

S i d e ? ? ? ? ?

「隊長ッ！報告したい事がッ！」

「貴様、挨拶も無しに……」

「構わん、言ってみろ」

暗い一室で会話をする人物達がいた
全員が紫色のローブを羽織り、顔を隠す様に先が尖ったマスクを付けていた

「はッ！、今日、間桐慎二が寮に帰ってから直ぐに出かけるという行動をしたため、後をつけようと思ったのですが速過ぎて一時は見失ってしまいました」

「『一時は』という事は、間桐慎二をつける事に成功したのだな？」

「はいッ！間桐慎二が近くのスーパーでコシヨウや唐辛子を買っていたのを発見し、その時は見失わない様に自転車を用意していたので後を追いつける事に成功しました」

「ッ！」

リーダー格以外の紫色のローブを着た集団に動揺がはしる

「して、奴は？」

「はッ！あろう事か奴はマクダウエル嬢の家に入り、
更には絡繰嬢の話している内容に寄ると、
定期的にマクダウエル嬢の家に入り浸っている事が判明しましたッ
！」

「なッ！」

あまりの事態に全員が驚きを示す

「ば、馬鹿なッ！あの『マクダウエル嬢』の家にだとッ！」

「ありえんッ！そんな事はありませんッ！」

「しかも定期的に入り浸っているだとッ！」

「まさか絡繰嬢やマクダウエル嬢が奴の毒牙に……ッ！」

ガヤガヤガヤガヤ

「静まれッッ！！」

「……ッッ！！」「……」

「事の信憑性を調べる為に間桐慎二とマクダウエル嬢の家を監視ッ
！、

他に間桐慎二の毒牙に掛けられた人間がいなか調査しろッ！

後、相田審問官はこの事を須川総統に伝えるッ！」

「……はッ！！」「……」

「間桐慎二の余罪が判明したら私に伝えるッ！拷も……審問をより
過酷な物しなければならないッ！」

「……了解しましたッ！！」「……」

「間桐慎二に自らの罪を数えさせるのだッ！」

一斉に散らばる紫ローブ

……イロイロと大変な事になっていた

S i d e O u t

第36話（前書き）

ついでに言うておきますが

慎一は原作31巻までの原作知識しか持ってません

第36話

Side 慎二

いつもの様に学校が終わってから、エヴァさん家にやって来た訳ですが……

「……………」

何やらソファーに寝転がり妙にムスツとしたエヴァさん、……………拗ねた子供みたいですネ

修業のメニューを考えていた昨日とは随分と違いますね

「あゝ、何があったんですか？」

「……………なんでもない」

プイッ

顔を背けて、そのまま寝転がり続けるエヴァさん、……………ガチで子供みたいですネ……

こついう時は保護者の方に聞くのが一番ですから

「ボソボソ（茶々丸さん、一体何があつたんですか？）」

「ボソボソ（マスターはネギ先生が、自分に弟子入りすると言っておきながら、古菲さんに弟子入りしたのが気に食わない様です）」

「ボソボソ（古菲さんに？）」

「ボソボソ（はい、今日の放課後にネギ先生が古菲さんに弟子入りしたらしく、それを聞いたマスターが拗ねてしまったのです）」

……何ともエヴァさんらしいと言うか、

いや、まあ魂は肉体に引つ張られる、と言いますしエヴァさんが子供っぽいのは今に始まった事じゃないんですが……

原作では描写されてませんでしたけど、こんな風に拗ねてたんでしょうか？

「何をゴチャゴチャ話してるんだッ！」

いつのまにか、こちらを睨みながら八つ当たりの様に怒鳴るエヴァさん

「いや、特に何も」

「嘘をつくなッ！明らかに何か話してただろうッ！」

「…………ネギ先生の修業内容やら、試験やらは決まったのかな？
と思って茶々丸さんに聞いていました」

「む、……………」

言葉に詰まりましたね、昨日修業メニューを作る、と張り切ってる
のを見られてるからでしょうか、凄く居心地が悪そうにしていますね

「弟子入りは無しだ無し……………ぼーやの奴、あろう事が私に弟子入
りすると言っておきながら、バカイエローに弟子入りしおった」

「それは……………」

…………それは困りますね、弟子入りするのは分かっていますが何かイレ
ギュラーが起こって弟子入りしない、なんてなったら僕の平和は遠
退きます

此処はエヴァさんに乗気になってもらいましょうか…………

「それは、エヴァさんは体術も出来るという事を知らなかったのだ
は？」

「修学旅行である白髪の餓鬼の攻撃を止めたり、ぶっ飛ばしたりし
たぞ？」

……確かに、
フェイトの攻撃を素手で止めたり大砲みたいなパンチをしてました
ね…

……そうですね、ならば

「エヴァさんは真祖の吸血鬼じゃないですか、
エヴァさんみたいな『凄い』パンチを打つことは出来ませんから、
古菲さんの中国武術を習おうとしたのでは？」

ピクッ

おッ、反応してますね畳み掛けますか……
エヴァさんは煽てるのに弱いですから、

「エヴァさんみたいな『強力』な攻撃は出来ないから、
それを補う為の中国武術、エヴァさん、『それくらい』エヴァさん
の『寛大な心』で許してあげたらどうですか？
ネギ先生はそうそう、エヴァさんみたいに『強く』なれないんです
から」

どうですか……？

エヴァさんの性格から考えるとこれで完璧に納得したと思うんですが……

「…………まあ、それもそうだな、そんな些細な事で一々怒っていたら器がしれるしな……」

計画通り……ッ！

ガバッとソファーから起き上がり、こちらを見ながら言うエヴァさん

「まあ、アレだ、ばーやごときが私のパワーに近づけるハズも無いからな

中国武術に逃げようとするのも仕方ない、10歳の餓鬼だ現実を認めたくないのも分かる、

そういう事を怒らないでいてやるのも師匠の勤めだしな」

大分、曲解してますが………

まあ良いですね

結果的にエヴァさんはやる気になってますし………

ん？あれ、

「エヴァさん、どこに行くんですか？」

「修業の準備だ、メニューを考えただけだからな、他にも準備をしてくる」

そのまま地下室に向かうエヴァさん、
言っちゃ悪いですが……単純ですね

「ケケケ、オマエモ悪い奴ダナ」

「ぬおッ！この声はッ！」

「姉さん、どうしたのですかいきなり」

姉さん？、ああ、チャチャゼロですか、……ソファアの上に座らせて
ありますね

「姉さん、ですか？」

「間桐さんは知りませんでしたね、マスターの最初の従者で私の姉
に当たる……」

「チャチャゼロダ、ヨロシクナ、ワカゾウ」

「ああ、はい、間桐慎二です、よろしくチャチャゼロさん」

いきなり何も無い所から声を掛けられたらビビりますからね、気を
つけて欲しい物です

「ケケケ、サツキカラ見テタガ、オマエモ中々悪い奴ダナ、……ゴ
主人ガアホ過ギルダケカ……」

「ああ、秘密ですよ?」

「サア、ドウスルカナ、オレハドツチデモ良インダゼ?」

む、……チャチャゼロが好きな物は酒でしたっけ?

ふむ、マホネットで取り寄せますか…

「今度金に物を言わせて最高級品質のワインを贈呈しましょう、いかがですか?」

「オッ! ヨクオレガ好きナ物が分カタナ、……マアイイダロウ、忘レンナヨ?」

「ええ、ではこの事は、内密に……」

「マカゼロ」

チャチャゼロが現金な人……人形で助かりましたね

主より酒ですか……

S i d e O u t

次の日の朝

S i d e エヴァ

ぼーやが中国武術を練習してるのは此処だったな……

おっ？あれか？

ザッ、パン、ダンッ！

あれは……カンフーの八極拳だったか？、

ほう、昨日始めたばかりだと聞いたが中々様になってるな

ぼーやは魔法だけでなく、体術の方の才能もかなりの物の様だな

ますます、鍛えるのが楽しみになったな

ん？、佐々木まき絵もいる様だな、まあ、別に構わんか

「ずいぶんと熱心じゃないかぼーや」

「あれー？エヴァさま、茶々丸さん、おはよー」

「あ、おはようございます！」

ん？、『さま』？、吸血鬼化した時の記憶が残ってるのか？
……まあ、そこまで残ってる訳でも無いし別に構わんか……

中々熱心にやってるな、少しからかってやるか…

「カンフーの修業をする事にしたのか？

じゃあ、私への弟子入りの件は白紙という事でいいんだな？」

「うえッ！？」

（あれ……「さま」……？）

ははは、中々愉快的な表情だな
思いもしなかったという顔だ

「あつ、いえ、これは、そのつ……あの少年の戦い方の研究でっ……」

「ククッ、冗談だ、真に受けるな、此処に来たのは、弟子入り試験
の事についてだ」

「へ？、あ、そうなんですか？…良かった」

見事にテンパってたからな
中々見物だったぞ

「どういつ事、ネギくん？」

「えと、あの、エヴァンジェリンさんに弟子にしてもらったもりな

んです」

「弟子？……何の？」

「えーと、それは……」

「ま、いつか！それでその弟子入り試験って言うのは？」

「ぼーやの奴が混乱してるな…」

「まあ、助け舟を出してやるのも師匠の仕事だな」

「……まだ合格はしてないが」

「それは今から説明する」

「試験の内容はある人物にどんな手を使っても良いから一撃入れる事だ」

「へ？そんな事で良いんですか？」

「は、確かに聞いただけでは簡単に聞こえるだろうな
……しかし」

「その人物に一撃入れる事はまずぼーやでは無理だ、正確にはぼーやがどこまで食らいについて行けるかを見る試験だ」

「（もし、不合格になってもらったら私が困るから……、ここまで準備しておいて不合格など私が許さん）」

「む、……」

はっ、頭にきている様だがまず入れる事は不可能だ『速過ぎて』見る事すら不可能だろう

伝える事は伝えた、さっさと帰るか

「じゃあな、ぼーや、頑張ると良い」

「え、ま、エヴァンジェリンさんっ」

くくく、ぼーやにはなにがなんでも弟子になってもらっぞ
私の楽しみの為に

S i d e O u t

第37話

Side 慎二

「慎二、ぼーやの試験をしに行く、お前も『見学』に来い」

エヴァさんがそう言うのと茶々丸さんが立ち上がり、エヴァさんの隣に立ちます

エヴァさん家に来たときに、今日は泊まっていけ、と言ったのはこの為ですか…

まあ、見学くらいなら別に構いませんか

「場所は何処でしたっけ？」

「ついて来れば分かる」

む、いくら原作知識があると言っても、細かい所まで覚えてませんからね

確か階段があったと思うんですが

ついて来れば分かる、なんてまた、適当な……

「オイッ！慎二、オレモ連レテケ」

「はいはい、分かりましたよ……」

ソファーに寝そべってたチャチャゼロを引つ掴んで、玄関へと歩を進めます

「モット丁寧ニ運ベヨ慎二」

なんで動けないくせにこんなに偉そうなんでしょう？

エヴァさんに影響されてるんでしょうか？

茶々丸さんはあんなに素直ないい子なのに………

「ほらッ！さつさと行くぞッ！」

……はあ、まあいつか

行けば分かるさ迷わず行けよッ！、てね

||||| (移動中) |||||

ああ、そつえば世界樹が見える所でしたね、名称は世界樹前広場、

でしたっけ？

ネギ先生の他にも生徒の皆さんもちゃんといますね、
概ね原作通りですか

「ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けに来ました
ッ！」

「よく来たな、ぼーやでは早速始めようか」

ん、始まる様ですね

さすがに10歳の子供がボコボコにされるのは見たくありませんが、
主人公ですし我慢してもらいましょう

「お前のカンフーもどきで『慎二』に一撃入れたら合格だ、他にも
ぼーやのガッツを見る」

「……………はあ？」

何言ってるんですか、このツンデレ少女は……」

「誰がツンデレ少女だッ！」

……………はッ！口が勝手に……

しかし、何故僕がやらなきゃいけないんですか……

「いいからやれッ！」

む、理由を聞かないと納得できませんよ、とりあえずエヴァさんを連れて柱の影に移動しますか…

「ちょっと待ってて下さいね」

ダダダッ！

「ボソボソ（何勝手に僕が試験官をする事になってるんですかッ！茶々丸さんで良いじゃないですかッ！）」

「ボソボソ（馬鹿がッ！いくら試験だからと言ってもぼーやをボコボコにする事になったら茶々丸が傷つくだろうがッ！茶々丸は繊細なんだぞッ！）」

「ボソボソ（否定はしませんがッ！、僕だつてボコボコにしたいくらいじゃないし、ネギ先生に一発入れられたくもありませんッ！もしネギ先生を失格にする事になったらネギ先生の応援してる生徒から

『うわ、こいつ空気読めよ…』って目で見られちゃうじゃないですかッ！）」

「ボソボソ（ボコボコにする必要は無い
適当にお前が攻撃を避けてある程度時間が経ったら、
ぼーやの熱意は伝わった、って言う事にして合格にするつもりだったんだッ！）」

「ボソボソ（攻撃は受けなくても良いんですか………？）」

「ボソボソ（構わん、そのつもりだったんだぞッ!）」

「ボソボソ（それなら………まあ構いませんが）」

ふう、そうならそうと初めから言っておいて欲しい物ですよ、まったく……

「ボソ（その『つもりだった』んだ）」

「何か言いましたか？」

「いや、なんでもない」

（この私を言うに事かいて、『シンデレレ少女』だとッ！………覚悟するがいい）

ゾクッ！

何だか背筋に寒気が……

まあ気のせいですよね

さっさとネギ先生の所に行きますか

|| || || || || || || || || || ||

「よ、よろしく願いします間桐さん」

（ま、間桐さんが相手なんて聞いて無いよッ!？）

「こちらこそよろしく願いします、ネギ先生」

（とりあえず攻撃は避けまくりですか……当たったら痛そうですね……）

「それじゃあ始めるぞ?……始めッ!」

ふむ、攻撃してカウンターを喰らいたくありませんね……
出方を待ちますか

「ボソ……（『契約執行90秒間、ネギ・スプリングフィールド』
ッ!）」

（間桐さんを相手にするなら速攻で決めるッ!）

ダウンッッ!!

な、しまっ

Side Out

Sideネギ

ドゥンッ！

……手応えが無いッ！？

なッ！？、ま、間桐さんがいないッ！？
ど、何処にッ！

「ふう、危ない危ない、危つく当たる所でした……」

後ろッ！？

速い、速過ぎて見えなかった……

エヴァンジェリンさんが絶対に当てられないって言う理由が『コレ』ッ！

間桐さんのスピードで攻撃に移られたら反撃する事すら出来なくなる、

反撃に移させないッ！連続攻撃ッ！

ヒュンッ！ダンッ！パンッ！

……当たらないッ！

しかも、全部紙一重で躲されてる
こんなの無理だよッ！古老師だってこんなデタラメな事は言っ
て無かったのに

『古老師ッ！僕が絶対に攻撃を当てられない人、と言ったらどんな人を想像しますか？』

『絶対に？そうアルネ……自分より格上の八極拳を修めた格闘家ネギ坊主が攻撃する隙が無いくらい攻撃される事くらいアル力……それ以外なら大体は反撃出来るアルヨ』

（まあ、単純に速過ぎて攻撃が当たらないなんて物もあるアルガ、そんなのは普通じゃないアルからな）

『格上に、連続攻撃……
それに対応しようとしたらどうすれば？』

『ううむ、気長に真面目に鍛練をするしか無いと思うアルヨ？、相手の攻撃のカウンターを狙うなら相手が油断してたなら可能性があるかもしれないアルガ』

間桐さんのスピードはカウンターなんて言ってられるレベルじゃないッ！
攻撃して来ないけど攻勢に移ったらアウトだ……

クッ！、『契約執行』の効果が切れたッ！
もう一度ッ！

「『契約執行180秒間、ネギ・スプリングフィールド』ッ！」

ぐ、やっぱり連続で使ったら負担が……

「契約執行の連続使用は体に悪いですよ？何度も使っていたら体を壊します」

これは、……このままじゃまずいッ！

間桐さんが言ってる様に何度も使える方法じゃないッ！

「やああああッ！」

せめて、間桐さんが油断している今の内に何とかしないとッ！

S i d e O u t

第38話

Side 古菲

……む、また避けられたアル力……

ネギ坊主が言っていた絶対に攻撃を当てられない相手、

試験が始まるまでは隙だらけで簡単に倒せそうだと思っていたアルが……

速い……『単純に速過ぎて攻撃が当たらない』、なんてそんな馬鹿な事、あるわけないと思ってたアルよ……、

最初の不意打ちを外したのは致命的アルね……

さつきからネギ坊主が速くなったり、急に遅くなったり、また、速くなったりしてるアルが、その間隔も短くなってきたアル……

技のキレも段々と悪くなって来てるアル、空振りというのは意外と体力を奪うアルからな……

「く、くーふえツ！何とかならないのツ！？」

ネギの攻撃、全然当たらないんだけどツ！」

「む、そうは言ってもあの……『間桐』と言ったアルか？

その『間桐』が攻撃して来たならまだカウンターの余地があるアルが……

さつきから全然攻撃して来ないアル、カウンターが使えばまだ可能性が……」

「くーふえ、それやとネギくんが怪我せえへんか？」

む、ネギ坊主はム力つく程、才能があるから何とかなる可能性が…
…無い事もないアル

「……おそらく、それも無理でしょう間桐さんはまだ本気を出して
いません

カウンターをしたとしても避けられるのがオチかと……」

「なッ！まだあれより速くなるアルかッ！？」

避ける時は、殆ど見えるかどうか…と言ったスピードアルよッ！？」

「じよ、冗談でしょッ！？」

刹那さんッ！私なんか全然見えないんだよッ！？」

気が付いたらネギの後ろに間桐さんが立ってるのにッ！」

「……私や古菲さんがまだ『見る事が出来る』、それが間桐さんの
手加減の証明です

本気になった間桐さんは私では影を捉える事も出来ません……」

なッ！………気迫や闘気がまったく感じられなかったのに、そこ
まで強いアルか……
これは、もう……

「うぁッ！」

ザッサザッ！

む、空振った拍子にコケてしまった様アル

立ち上がったみたいアルがこれじゃあもうネギ坊主に勝ち目なんて

……

「ぼーや、分かっただろう？お前じゃ慎二に勝つ事は無理だ」

「ま、まだやれますッ！制限時間は決めてないんですッ！まだ勝負はついてませんッ！」

「……ふむ、熱意は十分だな、いいだろう第一次試験は合格だ」

「……へ？」

……へ？、合格？ネギ坊主が間桐と言う人に攻撃を当てたら合格だったんじゃないアルか？

「忘れたのか私は言ったはずだぞ？

ぼーやではどう頑張っても勝つ事など出来ん、ぼーやのやる気を見る試験だとな？」

「……じゃ、じゃあ、もしかして僕、合……」

「浮かれるのはまだ早いぞぼーや、あくまで第一次だ、

二次試験は………どんな手を使っても良い、ぼーやの出せる全力の攻撃を慎二にぶち込めッ！

それで慎二を倒せたら合格だッ！」

「え、ええッ！間桐さんに全力で、ですかッ!？」

「ちよっ、エヴァさん、聞いて…ムゴッ！」

「仮にも私の下僕だぞ？、全力で構わん

……後、私はどんな手を使っても良いと言った、『サギタ・マギカ』は拳に纏わす事が出来る

……ここまで言えば分かるな？」

サギタ・マギカ？サギタ・マギカってなんアルか？
なんか強そうな名前アルが…

む、ネギ坊主が最後の攻撃に出る様アルッ！

Side Out

Side 慎二

「忘れたのか私は言ったはずだぞ？

ぼーやではどう頑張っても勝つ事など出来ん、ぼーやのやる気を見る試験だとな？」

「…じゃ、じゃあ、もしかして僕、合…」

これで僕の仕事は終わりですか……
始めの不意打ちは冗談抜きで当たるかと思いましたが……
しかし、第一次？原作では二次試験なんて無かったのに……

「浮かれるのはまだ早いぞぼーや、あくまで第一次だ、
二次試験は………どんな手を使っても良い、ぼーやの出せる全力の
攻撃を慎二にぶち込めッ！
それで慎二を倒せたら合格だッ！」

……え？

………ええ？

ええええッ！？

な、なんですかそれッ！？

「え、ええッ！間桐さんに全力で、ですかッ！？」

「ちよつ、エヴァさん、聞いて…ムゴッ！」

なッ！、口が開かないッ！？

………これは糸？

なッ！、今まで見えなかったのに、辺り一面に糸がッ！
まさか、あの一瞬で糸を張ったんですかッ！？

グッ！首からしたが動かないッ！
ヤバイヤバイヤバイッ！？

「仮にも私の下僕だぞ？、全力で構わん

……後、私はどんな手を使っても良いと言った、『魔法の射手』は拳に纏わす事が出来る

……ここまで言えば分かるな？」

エヴァさああんツ！？

何言ってるんですかツ！そんな事されたら死んじゃいますよツ！

ちよっエヴァさん、助けッ！

……………ヤバイ、エヴァさんの目から言いたい事が分かります……………

『この私を言うに事かいてツンデレ幼女だと？覚悟しろよ？…慎二』

いいいやあああツツ！！

すいませんッ！言った事は撤回します、助けて下さいエヴァンジェリン様ッ！

「……………行きます、間桐さん」

来んなボケエエツ！

そんな覚悟を決めた感じの目で見ないで下さいよツ！

え？手加減は？手加減はツ！？

「ラス・テルマ・スキル・マギステルッ！」

そんな人前で呪文詠唱したら生徒の皆に……

距離がありすぎて何言ってるか分からないかッ！

魔法の射手も、矢として打ち出さなきゃ分かりにくいだろうしねッ！

え？何この展開……

ナツクル？ナツクルなのか？

HUNTER×HUNTERのナツクルなのかッ！？

ジャジャン拳ではないけど明らかに僕ごときはオーバーキルでしょうッ！？

「光の精霊11柱、集い来りて敵を射てッ！、『魔法の射手・集束・光の11矢』」

ヤッバイッ！マジで？マジでッ！？

障壁を影で出来た障壁を張らねばッ！

カゲタロウがしてたやつ、影布。重対物障壁、僕の実力では二重程度が限界ですが、無いよりマシですッ！

服の下に張らねば……ッ！？、

腹ですよねッ！？殴るとしたら腹ですよねッ！？

ゴン君だって腹でしたよッ！！

信じます、信じますよ、ネギ先生ッ！

「行きます、間桐さん『光の射手・集束・崩拳』ッ！」

「『影布二重対物障壁』ッ！」

『説明しようッ！、雷華崩拳は古菲とカモが考えた名前なので今の段階では雷華崩拳と言う技は無いのさッ！』

パリイインッ！

割られたッ！ヤバッ！

「ガッ！……ガハアッ！」

グッ！内臓や骨に異常はありませんね……

……やっぱり、防げませんでしたか
しかし、

「信じてましたよ、ネギ先生」

……貴方ならきつとお腹を殴るだろうと

ガクッ！

S i d e O u t

S i d e ネギ

パリーインッ！

やったッ！間桐さんの防御を抜けたッ！
これならッ！

「ガッ！……ガハアッ！」

あッ！、間桐さん、大丈夫ですかッ！
しまった本当に全力で攻撃しちゃった…
は、早く治療しないとッ！

「信じてましたよ、ネギ先生」

え？

バタンッ！

「あッ！、間桐さんッ！大丈夫ですかッ！？間桐さんッ！」

「……ふん、いい気味だ……、ばーやこの程度なら大丈夫だろう、
ちゃんとガードしたようだしな……
……茶々丸ッ！」

「はい、マスター」

そう言つてエヴァンジェリンさんが、茶々丸さんと呼んだら茶々丸さんが間桐さんを抱えて、行つてしまいました……

「ああ、そうそうばーや、明日から稽古をつけてやる私の家に来るといい」

「え？あッ！じゃあ」

「ああ、合格だ…

…慎二の事は心配するなちゃんと治療はする」

（茶々丸がな……）

「や、やったあッ！エヴァンジェリンさん、ありがとうございます、間桐さんも……って気絶してるんだった」

明日、間桐さんにお礼を言わなくちゃ

「ネギーッ！おめでとうッ！」

「おめでとうございますッ！ネギ先生ッ！」

「おめでとうッ！ネギくんッ！」

「」「おめでとうッ！ネギ先生ッ！」「」

「よく諦めずに頑張ったアルなッ！」

アスナさん、刹那さん、木乃香さん、古菲さん、皆も……

「はいッ！ありがとうございますッ！」

「もう、間桐さんも、もっと手加減してくれればいいのに……」

「しかしアスナさん、試験なんですから……」

あ、

「アスナさん、その事なんですけど……」

間桐さんが倒れる前に『信じてましたよ、ネギ先生』って言ったんです」

「へ？どういう事？」

「……おそらく間桐さんはネギ先生を落とすつもりは無かったんじゃないでしょうか」

「？、どういう事？せつちゃん」

「間桐さんならネギ先生を落とすつもりならネギ先生の攻撃を防ぎきる事も出来たんじゃないでしょうか？……分かりませんが」

「……間桐っていう人は良い人みたいアルね」

「間桐さんはネギくんが合格するの信じとったんやね」

……間桐さん、……僕を信じてくれて、ありがとうございます

エヴァンジェリンさんの修業も絶対に最後までやり遂げてみせますッ！

見てて下さい、間桐さんッ！

S i d e O u t

ネギパーティーの慎二に対する好感度が10上がった

第38話（後書き）

慎二の『影布二重対物障壁』がやられたのは慎二の魔力量と技術の問題です

カゲタロウなら二重でも十分防げました

第39話（前書き）

久びさに北斗無双をやったんだ……

サウザーが大好きです

レイも好きです

退かぬ、媚びぬ、省みぬッ！帝王に逃走は無いのだああッ！

慎二は絶っっっ対に言いませんね……

第39話

Side 三人称

麻帆良の郊外にあるエヴァンジェリンハウス、その中、本来なら学生は学校に行っている時間に、ソファアの上で一人の人間が悶えていた

間桐慎二その人である

「……ま、まって下さい、エヴァさん、……」

『おわるせかい』なんて避けれません、

……ああッ！E F BがE F Bがあッ！
エターナル・フォース・ブリザード

ガバッ！！

と上半身を起こしてボー然とする慎二、何故自分が此処にいるのか、此処は何処なのかさえ理解していない

「あれ？此処は…、……エヴァさん家？なんで……」

理解はしていないがとりあえず立ち上がる、そして何故自分が此処にいるのか、に思いをはせ……、

（……そうだ、弟子入り試験でネギ先生の攻撃を受けて……）

ズウキイインッ！

「~~~~~ッ！？」

何故今まで気づかなかったのか？
と思う程の痛みが慎二の体を貫いた

「ん~~~~~ッ！？」

ガタンッ！！

痛みに耐える事が出来ず、思いつ切りソファーの前にある机に突っ込む

しかし、それすら感じられない程の痛みに悶える事しか……否、悶える事すら出来なかった

その慎二の目の前に机の上に置いてあったのだろっ、一枚の紙が落ちてきた

痛みに耐えながら紙を見ると……

『間桐さんへ

間桐さんを置いて行く事は、心苦しく思えたのですが、マスターの命令ですので、学校へ行かせてもらいます

すいません間桐さん

間桐さんはネギ先生の攻撃で5本の肋骨にヒビが入った状態でした

それをマスターの別荘に保管してあった秘薬で回復させたので少しの間、かなりの痛みが続くと思います
マスターと共に学校から帰って来る時には痛みは引いていると思われます

食事に関しては冷蔵庫の中に準備してあるのでそれを食べてください
すいません間桐さん』

茶々丸が慎二の事を心配して書いたであろう容易に想像できる、それを見た慎二は

「ハッ！？~~~~ツ！？ガッ！？」

あまりの痛みになんかを考える事すら出来ず、文字を見る事は出来ませんが、その意味を理解する事が出来なかった

………慎二の痛みが引き、まともに動ける様になったのはこの3時間後、
エヴァが修業を受けにきたネギー行を連れて帰ってくる1時間前だった

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

学校からの帰り道ネギー行（・アスナ&のどか）はエヴァンジェリンの家を目指していた

原作通り綾瀬夕映、宮崎のどかを連れて図書館島に赴き
茶々丸に助けられ、修業をつけてもらった後、ネギが不用意な言葉
でアスナを傷つけ喧嘩をした帰り道であった

「ううう、アスナさんに嫌われちゃった……
何がいけなかったのかな……？」

自分の発した言葉がアスナの乙女心？を傷つけた
という事を理解していないネギは何故アスナがあそこまで怒ったか
が理解出来ない

「……ま、まあアスナさんも本気でネギ先生を嫌いになった訳では
なく、ついカツとなってしまうただけでしょうし……」

「そやで、ネギくん

アスナはネギくんを嫌いになったりなんかせえへんよ
でもネギくんはアスナに酷い事を言ったんよ？分かつとる？

時間が経てば落ち着くやろうし、時間を置いて謝ったほうがええよ
？」

会話を聞いていなかった刹那は

きつとネギ先生が何か言っただろうなあ

と当たりをつけていたが、どんな事を言ってアスナを傷つけたのか
が、分からない為どうしても説得力がなくなってしまう

それに対して木乃香は会話の一部始終を聞き、アスナが何故怒ったかも理解していたが
今回の件は全面的にネギが悪いと思っていたので、あえて、解決の答えを言わずネギに自分がアスナを傷つけた事を理解させようとしていた

それを見ていたエヴァは

（こんな事でこの先大丈夫なのか？
まあ、神楽坂アスナには辛酸を舐めさせられたからな……いい気味だ）

と、考えていた

アスナに舐めさせられた辛酸の数々、
具体的には顔面を蹴り飛ばされたりとか、ハリセンでぶっ叩かれたりとか……
を思い出し、体を震わせる

「……？、マスター体が過剰に震えています、大丈夫ですか？」

「ん？ああ、大丈夫だ問題ない」

従者に心配されたりもしたがそこは、イーノック的な名ゼリフで従者の不安を取り除く

家に着くまであと30分程、その頃の慎二はようやく動かせる様になった体で、かなり遅めの昼食を取っていた

||||||||||||||||||||

「帰ったぞ慎二ッ！、……………生きてるか？」

勢い良く扉を開けたが、ソファーにぐったりとまるでさつきまで、激しい戦闘繰り広げた様に倒れる様に座っている慎二を見て、つい慎二の安否を聞いてしまう

なんだか一気に老けた様な慎二が、ゆっくりとエヴァ達に顔を向ける

「ああ、エヴァさんですか…

それに茶々丸さん、ネギ先生達も……………」

まるでラオウに新血愁の秘孔を突かれた後、トキに心靈台の秘孔を突かれたレイの様に体中から、謎の輝かしいオーラが吹き出ている

……………後、ちよっぴり髪に白髪が混じっている

「な、なんか雰囲気が全然違うぞッ！？？」

本当に大丈夫かッ！？」

「大丈夫ですよ…

明日になったら治ってるでしょう、気にしないで下さい」

儂い笑顔でそんな事を言われたエヴァは、慎二が何か変な物でも食べたんじゃないかと心配になる

茶々丸は昨日との違いからネギ先生の攻撃でなんらかの秘孔を突かれたのか？と心配する

ネギや刹那、木乃香達は慎二の雰囲気がまるで悟りを開いた様に感じられ、ますます尊敬の念を深めていた

……また、勘違いを深めている事に誰も気づく事がなかった……
…

第40話（前書き）

今回もヘルマン編までの間、

もうちょっとでアーティファクトが出せるッ！

第40話

Side三人称

麻帆良男子中学校付近にある男子寮、その中を歩く一人の人間
青に近い黒髪に若干白髪が混じっている

「ふう、ネギ先生達は原作通り南の島に行った様ですね……………」

一日経ち、賢者モードが終わった慎二である

昨日、痛みに悶絶していたら何を間違えたのか、世紀末で奇跡を起
こす男に延命の秘孔を突かれた『義星』の様なオーラを撒き散らし
ていた

……若干、秘孔を突いた本人、激流を制する次兄に似てなくもない
むしろ、セツカツコーと言わせたら似合いそうだった

ネギがアスナと仲直りする為に必要な事でもあり、二人の絆を高め
る事にも繋がる

そのかわり、ネギの修業を楽しみにしていた、エヴァに扱かれる事
になるので

慎二にとって今のエヴァンジェリンハウスは鬼門であり、迂闊に近
寄る事が出来ないでいた

（今、エヴァさん家に行けば昨日見た夢の様な目に……………今日は寮で過ごそう）

今、行けば夢の様に氷漬けにされると思い込んでいる慎二は気安くエヴァに近づく様な事は控えていた

（茶々丸に今日は用事があるから行けないと電話する程の徹底ぶりだった）

実際、エヴァは昨日の慎二を見てしまっているので逆に慎二の心配をしていたのだが……………慎二はその事を知らなかった

「……………おい、慎二、聞きたい事があるんだ……………」

そこで慎二に話し掛ける馬鹿が一人、クラスメートの鈴原コウジである

決意を秘めた様な目で慎二を睨みつけている、普段の軽薄そうな雰囲気は一切なかった

「……………？、どうしたんですか？」

その目を見た慎二はあまりの事なのだろうと考え、真面目に相手をする

「ああ、その、なんだ、

……お前、昨日何処にいた？」

「……は？」

質問の意味を理解出来なかった慎二がマヌケな声を出す

逆にその声を聞いたコウジは激昂した様な声を上げる

「だっ、だからッ！昨日何処に居たんだッ！寮に帰ってなかっただろッ！

何処でナニしてたッ！」

「……？、昨日はエヴァさん家に……はッ！」

あまりの勢いで叫ぶコウジについて正直に答えてしまう

そして、答えた後に自分が言った言葉の意味を理解した

「やつ、やっぱりッ！女の子の家に泊まってたのかッ！

それもマクダウェルさんの家にッ！

何処まで行っただッ！？

何処まで行っただんだ慎二ッ！」

「ちょ、静かにしてくださいッ！他の人に聞こえたらどうするんで

すかッ！？」

「Aかッ！？」

もしかしてBまで行っただのかッ！？

ま、まさかCッ！？」

「いや、なんで例えが古いんですか……」

時代遅れの言葉に呆然とする慎二、それを意に解さず続けた叫ぶコウジ

「どつちだッ！？」

マクダウエルさんかッ！？

絡繰さんかッ！？

…ま、まさかッ！両方なのかッ！？

マクダウエルさんと絡繰さんに『では 今死ね！！』して『てめえらの血は何色だああッ！！』をして『南斗水鳥拳奥義、飛翔白麗』したのかッ！？」

「……いい加減に黙れッ！！」

ドスウッ！

「グベッ！？」

細身ながらも激しい蹴り、手加減したとはいえ、敏捷A+の蹴りを

受けたコウジは腹を押さえて呻く

「こんな所で放送禁止用語言ってんじゃないですよ、誰かに聞かれたらどうするんですか？」

「……ぎ、ぐえ、貴様、慎二……」

「この事を知っている人間は他に何人いるんですか？」

いきなりの質問に戸惑うコウジ、しかしこの質問を無視すると蹴りが飛んで来ると理解しているコウジは正直に話した

「……俺だけだ、とりあえず皆に報告するのは本当かどうか確かめてからにしようと思ってたからな」

「成る程、そうですね、それは良かった……」

嬉しそうに、安心した様に話す慎二に違和感を感じ、それを問いただそうとしたら

「……どういう意味だ？何を言ってるんぐハアッ!？」

鋭い蹴りがコウジの意識を吹き飛ばす、
その亡骸を前に（死んでない）慎二が優しく話す

「こんな所で、そんな事を言い触らされたら、大変な事になりますからね

安心して下さい、起きた時には全部忘れてますよ

ライラ・ライル……」

コウジの記憶を消そうとする慎二

しかし、慎二は気づく事が出来なかった、慎二に見えない位置に一人の『構成員』がいた事を……

（急いで総統に知らせなければ……ッ！）

勘違いは広まる……

||||||||||||||||||||

その頃のネギ達

「ネギくん、しつもん

パクティオーってキス以外にやり方ないん？」

大声で秘匿事項をネギに聞く木乃香と、顔を真っ赤にしながら追い掛ける刹那

「え……キス？
キスって……？」

「宮崎も修学旅行でやったじゃん、つまりな……」
「きゃああッ！ちっち違うのです、のどかッ！」

魔法を教わろうと思っていたのどかと夕映がもたらされた情報に驚愕する

「木乃香さん、急にどうしたんですか？」

急な質問に理由を尋ねるネギ

「うん、ウチなあれから考えてやっぱり魔法使いになる事にしたんですよ」

「えッ！そうなんですかッ！」

「うん、それでウチせつちゃんにパートナーになって欲しいんやけどせつちゃんが女の子同士がキスするのはアカンゆーんよ
ウチは別にえーんやけど……」

「いえっ、その……」

赤面する刹那と、微笑む木乃香、驚愕するネギと、誤解を解こうと

する夕映達、
ちよつとした力オスになっていた

「つ、つまり、朝倉、『アーティファクト』という物を手に入れるにはキスしなければならないと……」

「ま、そういう事、他の方法は知らないなあ」

朝倉と夕映の会話を聞いたネギの脳裏に一つの事柄が過ぎる

「そういえば、間桐さんのアーティファクトってどんなのだろう？」

「「「「「？」」」」」」

「……そういえば考えた事無かったな…、間桐の旦那がアーティファクトを使ってるの見た事ないし

……はッ！、エヴァンジェリンと仮契約してるって事は、まさか、
間桐の旦那……ロリコ……」

「失礼だよ、カモくん、……そうだなあ、間桐さんみたいに強くなるとアーティファクトも必要ないのかなあ？」

「…私も間桐さんがアーティファクトを使っているのを見た事ありません

もしかしたら戦闘用ではないのかもしれませんが……」

「あッ！、そうかつ、アーティファクトは戦いにしか使えない訳じゃないんですよね」

刹那の答えに納得したネギ、しかし、聞き覚えの無い、名前を聞いた好奇心の塊達はそれが誰かが気になる

「間桐…さん、ですか？」

その方はどなたですか？」

「うーん、私も聞いた事ないなあ

話からすると、その人も魔法使いなんだよね？」

それを聞いたネギが夕映や朝倉は直接会った事が無いのを思い出し

「ああ、夕映さん達は知りませんでしたよね、間桐さんはエヴァンジェリンさんのパートナーをしてる人です」

「話からすると、かなり強いみたいですが、そんなに強いんですか？」

「はい、…間桐さんは手加減してもらっても僕じゃ、攻撃を当てる事すら出来ないくらい強い人なんです」

「そんなにですかッ!？」

「ネギくんって子供にしたらかなり強い方なんだよね、それって凄くないッ!？」

「ええ、とっても凄い人なんです、僕も何度も助けられてます……」

「そうなんですか……」

「へえ……」

……勘違いはかなり広まる

S i d e O u t

第40話（後書き）

エヴァが下僕って呼んでるからパートナーって思っても仕方ないよね！

第41話（前書き）

結構無理矢理です

拒絶する人もいるかも

第41話

Side 慎二

「まだまだッ！全然なっていないぞ、ぼーやッ！」

「は、はい、師匠ッ！」

はぁ、よく頑張りますねえ、僕だったら始まって数秒で諦めますよ……

修業が始まってからはエヴァさんにボコボコにされ、それ以外の基礎訓練や、自主トレでもサボらずやっていますし……

さすが主人公といった所でしょうか……それに信じられないスピードで成長してます……

『戦いの歌』だってもう殆ど完璧に出来てますし……

まあ、僕も『戦いの旋律』だけは一日で習得しましたが……それ以外は全然、いまだに中級呪文だって撃てるかどうか怪しいですし……

世の中、厳しいですね……

「慎二ッ！、私はぼーやから血を吸ってくる、お前もたまには真面目に修業したらどうなんだッ！」

「嫌ですよ、修業なんて面倒臭い、そんな事をしてるくらいなら」

逃走用の）道具を作ってる方がマシですッ！」

ネギ先生に修業をつけ出してから、エヴァさんが僕もついでに修業させようとしてますからね……

……………面倒臭い、むしろ僕は此处まで頑張った方ですよ？

ネギまの魔法は日本語じゃなく、ナントカ語（確か……ラテン？）で詠唱しなくちゃいけませんからね……………

例えば『雷の斧』は
日本語では

『来れ、虚空の雷、薙ぎ払え。』『雷の斧』

ですが、呪文として発動しようとしたら

『ケノテートス・アストラプサトー・デ・テメトー』『ディオス・テ
ュコス』

ですからね……………

無理無理無理、覚えられませんかよ普通、この『雷の斧』ですら短い方ですからね……………

『魔法の射手』みたいな短い呪文なら

とりあえずカタカナの羅列として覚えましたが……

なんで魔法使いはあんなクソ長い呪文を囃まずに言えるんでしょう？

ていうかなんで覚えられるんでしょう？

いまだに理解出来ませんよ……ナギ・スプリングフィールドがあん
ちよこに頼ったのも分かります

ナギ・スプリングフィールドはかなりの上級呪文を使っていますし…

……
全部、覚える方が無理ですよ……

はあ、エヴァさんの修業に巻き込まれてくありませんし……道具
作りでもしますか……

ブオンツ！

ん？……あれは

S i d e O u t

S i d e ネギ

「嫌ですよ、修業なんて面倒臭い、そんな事をしてるくらいなら道
具を作ってる方がマシですッ！」

……間桐さんって修業しないんだ……
それなのにあんなに強いなんて……

もつともつと沢山修業して、間桐さんに追いつける様な強い魔法使いにならなくちゃッ！

それに………道具？

「師匠、間桐さんがさっき、道具を作る方がマシって言ってましたけど………、間桐さんって何か作ってるんですか？」

「ん？、ああ、慎二は戦闘用にイロイロな道具を作ってるからな、まあ、大体は逃走用だな………」

「逃走用？………間桐さんでも逃げる事なんてあるんですか？」

「ああ、修学旅行の時の白髪の餓鬼と戦った時はかなり大量に使ったと言っていたからな………ついでにバリエーションを増やすとも言っていたか………」

やっぱりあの時の白髪の少年はかなり強い人だったんだ………でも逃げるなんて………倒そうとはしないのかな………？

「間桐さんは他の、攻撃用の道具とかは持ってないんですか？
間桐さんがそういう道具を持って戦ったらもつと強いと思うんですけど………」

「あゝ、確かにそうなんだが………あいつは戦う事自体を嫌ってるかな

良く言えば『平和主義』悪く言えば『ヘタレ』だ
絶対にならないだろうが

もし、もし慎二の奴が『殺す気』で戦ったら完全な状態の私ですら
苦戦するかもしれん」

「そつ、そんなにですかッ!？」

師匠を苦戦させるなんてッ! 間桐さんそんなに強んですかッ!？
僕なんて別荘に入ってるから、少し魔力が使えるけど封印された師
匠に一撃も当てられないのにッ!？

やっぱり間桐さんって凄いんだ…………… でも

「間桐さんはなんで逃げるんですか？ 間桐さんみたいに強いならち
ゃんと戦っても十分強いと思いますし…………… 逃げるなんて」

「…………… ふむ、ぼーや、ぼーやは『逃げる』という事についてどう
考える？ 正直に答えろ」

「え?…………… やっぱりカッコ悪いと思います…………… 逃げるのは」

「ふむ、慎二はな『自分では絶対に勝てない』と感じたら即座に逃
げに転じる、
それをカッコ悪いとも感じてないだろう……………」

「え?…………… な、なんでですか?」

「『死にたくない』と思ってるからだろう、あいつは前に『正々堂

々と戦って死ぬぐらいなら、僕は泥を嚼つてでも生き延びます』と
言っていたからな」

「……ッ！」

「ぼーや、逃げる事は恥ではない、意地を張って死ぬ方がよっぽど
カッコ悪い

そついう所は慎二を見習った方が良いな」

「………はい」

そつなんだ………間桐さんは凄い魔法使いで怖い事なんて無いと思
つてたけど………

僕だって、間桐さんだって、死んだりしたくない………

そつか、そつなんだ………

「まあ、真面目な話はこれまでだ、さあ腕を出せ」

「や、やっぱりですか？」

「当たり前だ、さあ早くしろ」

「ううう」

噛まれるのって結構痛いんだけど………修業の授業料だし………

「では、貰うぞ？」

かぶ、

ちゅ~~~~~

~~~~~

「し、師匠ッ！吸い過ぎです、死んじゃいますッ！」

「…………ふふふ、いいだろ？もう少し」

「も、もう限界ですよッ」

「少し休めば回復する、若いんだからな…」

「あっ、ダメッ」

「いいから早くだせ」

「ダメですよ、エヴァンジェリンさん…………」

「ふふ、私の事は師匠と呼べ……………」

あ、うつうつ、意識が…………

「コ、コココ、コラァアッ！、子供相手に何やってんのよッ！」

「ん？」

「エヴァンジェリンさん、そそそ、それ以上は〜」

「だから言っただしょう？神楽坂さん達が考えてる様な事は無いって」

ん？アスナさんに間桐さん、それに皆も……

S i d e O u t

S i d e 慎二

神楽坂さん、思いつ切りうなだれてますね……

まあ、勘違いした事が事ですからね……

さすがに恥ずかしさで死にたくなりますか……

「このジュース美味しいッ！」

「うまいアル〜ッ！」

「バカッ！それは秘蔵のッ！

わ、バカッ！、未成年がそんな物を飲むんじゃないッ！」

エヴァさんも大変そうですね……

女子中学生ってなんであんなに元気なんだろう？  
麻帆良だからでしょうか？

「神楽坂さん、皆と一緒に楽しんできたらどうですか？  
今日の事は忘れて……」

「そ、そうよね、ありがとう間桐さん、じゃあ」

「はい、行きましょうか」

さすがに恥ずかしいみたいです……  
原作だとこんなシーンはカットしてあったんでしょうか？

「ん？来たか慎二ッ！このバカ共を抑えるのを手伝えッ！」

「頑張ってください」

あ、茶々丸さんお茶もらえますか？」

「かしこまりました間桐さん」

「おいッ！、コラアッ！」

頑張ってください、応援しています、僕はエヴァさんを信じています  
ああ、茶々丸さんが煎れたお茶は美味しいですねえ  
……ん？

「間桐さん、聞きたい事があるのですが……」

「私も私もッ！聞きたい事があるんだッ！」

「……何ですか？綾瀬さん、朝倉さん」

綾瀬さんと朝倉さんとはもう自己紹介済みです

そういえば自己紹介した後、ネギ先生の声がするから、と言って皆でエヴァさんとネギ先生の会話を聞いてましたが……  
何か聞きたそうにしてましたね

「そうそう、エヴァちゃんにも関係あるからね」

「ん？私にもか？」

後、エヴァちゃん言うな」

何か目を凄いきらきらさせた綾瀬さんが見て来るんですが……

「間桐さんは魔法使いなんですよ、私達に魔法を教えてもらいたいのですがッ！」

ああ、

「無理だな」

「無理ですね」

「な、何故ですかッ！」

「慎二には魔法の才能は全然無いぞ？  
それならぼーやに習った方が断然マシだ」

「そついつ事です」

「「「「ええッ!?」「」「」」」

おおッ!、耳がッ!キーンってなりますッ!

「ほ、本当ですか間桐さんッ!?」

「ちよつ、それ本当なのッ!?」

「ほんまなんか、間桐さんッ!?」

「私は、間桐さんはあまり魔法を使わないのは、知ってましたがそれは聞いた事がありませんよッ!?」

魔法関係の人は知らなかったんですか?  
見れば分かると思うんですけど…

「僕が『戦いの旋律』以外に魔法を使つたのを見た事ありますか?」

.....

「……そういえばないです、修学旅行の時も身体強化しか見てません」

「『戦いの旋律』ってのがイマイチ分からないけど……ネギが使ってるみたいなのを使ってるのは見た事ないわね」

「ウチもよう分からんけど……無いなあ」

「確かに……間桐さんが魔法を使ってるのは精々『魔法の射手』ぐらいしか……」

「まあそついう事です」

「……あの、間桐さん、『戦いの旋律』、『魔法の射手』とは？」

「あゝ、綾瀬さん、ネギ先生に聞いた方が早いですよ、教わるのもネギ先生の方が良いと思います」

魔法関係を僕なんかにお習おうと思うのがそもそも間違いですからね……

「はいはいッ！じゃあ次は私ねッ！

間桐さん、エヴァちゃん、キスした時の感じはどうだった？」

ブフウウッ！

ブフフウウッ！

「な、何を言ってるんですかッ！」

「何を言ってるんだッ！」

吹き出したじゃないですかッ！

何言ってるんですか一体ッ！

「え？、だから仮契約の時の感想を……」

「僕はエヴァさんとは仮契約してませんよッ！何言ってるんですかッ  
！」

「「「「「えッ！してないの（んですか）ッ！？」」「」「」「」

「なんで皆したと思ってるんですかッ！？」

「いや、ねえ」

「はい、間桐さんと師匠は」

「うちからみても仲良さそうやったから」

「てっきりしたものかと……」

「うーん、これじゃインタビューできないなあ、エヴァちゃん、間桐さん、どう？今からブチューっと」

「あ、あわわわわ……」

「落ち着くのですのどかつ、朝倉何を言ってるんですかッ！」

……………はあ、まったく

「エヴァさんからも何か言って……」

エヴァさんからも叱ってもらおうと振り向くと

「ほら、真祖の姐さん、どうだい間桐の旦那と」

「な、何を言ってるんだこのクソオコジヨがつ、な、何故、私と慎二が……」

「でもよ、修学旅行の時は間桐の旦那、かなり危なかったぜ？  
旦那を助けられるアイテムがでる可能性だってあるんだ」

「いや、確かに、あの時は私が油断したからだが」

「あの時の事、間桐の旦那に悪いと思ってるんだろ？ だったらそれくらい良いじゃねえか

旦那の事、嫌いなのか？」

「いや、別に嫌いと言う訳じゃ」

「だったら良いじゃねえか、それにキス一つで名実ともに間桐の旦那は真祖の姐さん『だけ』の下僕になるんだぜ？」

「私だけの……」

「そうそう、それに仮契約する事で間桐の旦那に魔力供給したり『好きな時にいつでも呼び出したり』出来るんだぜ？」

それにゴニョゴニョ（間桐の旦那は意外とイケメンだからな、他の誰かに横取りされるかもしれねえぜ？）

「……………よし、わかった仮契約陣を書け」

「了解ッ！」

……………説得されてるッ！？

あのオコジョッ！そこまでしてオコジョドルが欲しいんですかッ！？

「ほら、慎二、来い、主からの褒美だ」

「いやいやいやいや、落ち着きましょうよエヴァさん、今エヴァさんは混乱してるだけです、落ち着きましょう」

「なんだ嫌なのかッ！？チンチクリンは嫌だと言っのかッ！？」

「別にそんな事言ってませんよッ！？」

（なんか大変な事になっちゃったね？）

（いいんじゃない面白いし）

(いや、止めなくていいの?)

(エヴァちゃんは間桐さんの事好きなんかなあ?)

(ええッ! そうなんですかッ!?)

「だったらこれでいいだろうッ!」

ボンッ!

エヴァさんを中心に煙りが出たと思ったら、20歳ぐらいの金髪の  
………っ

ちよっ、顔近い、顔ッ!

「なんだ真っ赤になって以外と初心なんだなあ?」

「落ち着きましょう、オコジヨに騙されてるだけですからッ!」

「気にするな私は気にしない」

えっ、あっ、ちよっ、~~~~~ッ!

Side Out

#### 第41話（後書き）

600年近くチャチャゼロと暮らしていた

エヴァさんの独占欲が、目茶苦茶、強そうと思っるのは自分だけでしょうか？

## 第42話（前書き）

結構無理矢理ってか、最近うまく話が浮かばない……

すいません、あと、これから結構の間  
更新を停止します

デイスガイアの4を買ってしなければ……

デスコ可愛いよデスコ

## 第42話

Side三人称

口元を手で隠して、顔を真っ赤にする慎二

紅潮する事なく素面でニタニタと笑っているエヴァ

顔を赤くしながらも経験があるのでしっかりとガン見しているネギとその従者達

顔を手で覆い隠しながらもしっかりと指の隙間から覗いている綾瀬

満面の笑みでカメラのフラッシュを焚いている朝倉

仮契約成功だッ！と体全体を使って喜んでいる小動物

今まで厨房で料理していたのにしっかりと記録している茶々丸

ケタケタと笑っているチャチャゼロ

…… ちょっとしたカオス空間が広がっていた

「な、な、何をするんですかエヴァさん、自分が何をしたか理解してるんですかッ!？」

キ、キキ、」

震える声で叫ぶ慎二

「本当に初心だな……キスぐらいで取り乱すな、ぼーやを見習ったらどうだ？」

ぼーやなんかもう四人としてるんだぞ？

……ん？これが仮契約カードか」

「なんでエヴァさんは恥ずかしげもなくそんな事が言えるんですかッ！？」

やれやれっと、いったふうにため息を吐きながら、慎二の仮契約カードを拾うエヴァ

自分だけが恥ずかしい思いをしているのが納得出来ない慎二

せめて頬を染めるぐらいしてくれたなら慎二も納得出来ただろうが素面で恥ずかしげもなく言われたら慎二だってショックを受ける

そこに……

「ねえねえねえエヴァちゃんッ！

どんな感触だったッ！？味はッ！？」

突撃リポーターが現れた

「ん？……まあ、あれだ  
プニプニだったな、味はしなかったな」

「何、恥ずかしげもなく言ってるんですかッ！？」

「うおおおおッ！？もしかして脈ありですかッ！？、間桐さんは具体的にどういう関係でッ！？  
やっぱり恥ずかしかったッ！？」

「ちよっ、朝倉さんッ！？」

楽しみにエヴァに質問する朝倉と恥ずかしさで本気で焦る慎二

「なんで慎二とキスするくらいで照れねばならんのだ  
後、ちゃん付けするな」

ピシッッ！！

空気が凍った音がした

……………主に慎二の立っている位置から

木乃香以外が目を見開いてエヴァを凝視する

木乃香は妙にニコニコしていた

「えっと……恥ずかしくないのエヴァちゃん？」

妙な空気に耐え切れなかったアスナが質問する

「だから何故、慎二『ごとき』とキスするのを照れねばならんのだからちゃん付けするな」

グシャッ

見えない矢が慎二のハートを貫く

「えっと、普通キスしたら恥ずかしくなるものじゃないんですか？」

ネギもあまりの言い方について質問してしまう

「ふん、慎二はあれだ、『ペット』みたいな物だ、犬とキスするのが恥ずかしいか？」

ズグッツシャアアッ！

見えないライフル弾が慎二のハートを打ち砕く

「あ、あの、ペットはどうかと……」

エヴァの後ろで小さくなっている慎二が哀れでならない刹那

「ペットで十分だペットで、仮契約など弱い癖に戦場に行く馬鹿を繋ぐ為の鎖代わりだ」

スウウグツツツシャアアアツツ！！

聖帝十字陵の頂上で仁星を貫いた槍そっくりの槍が慎二のハートを吹き飛ばす

崩れ落ちる姿が同情を誘う

木乃香はエヴァの言葉が照れ隠しだと気付いていた

600年の経験に物を言わせた、超ポーカーフェイスである

しかし、木乃香は気付いていた、という事は逆に言えば木乃香以外は気付いていないという事であり

『うわああ………』

木乃香を除く全員が声を揃えて言った

そこに一つの声が……

「間桐の旦那、男以前に人として見られてなかったんだ……」

その一言が妙に響いた

イロイロとダメージを受けていた慎二の堪忍袋が切れた

ボフウウウツ！

慎二を中心に空気が渦巻く

「元と言えば貴方が原因でしょうッ！僕は怒ったぞッ！アルベール・カモミールッ！」

慎二の体を金色のオーラが包む

「ぬおッ！、間桐の旦那から金色のオーラがッ！  
超かッ！？超野菜人なのかッ！？」

「馬鹿が、ただの気だ、小動物が」

「えッ！？、間桐さんは気を使えないんじゃないじゃなかったんですかッ！？」

「む……、何かの間違いで悟りを開く奴だ何があっても驚かん」

エヴァが説明している間に、慎二が呪文を紡ぐ

「裏蓮華をお見舞いしてやりましょうッ！ アルベール・カモミールッ！」

「あ、おいッ！、慎一やめろッ！」

「ライラ・ライル・ライド・ペルフォーンス！ 戦いの旋律・三倍速」ッ！」

「ぼーや、障壁を張れッ！」

「え？」

「速くッ！」

バチンッ！

$$\begin{matrix} \neg \\ \wedge \\ \vdots \\ ? \\ \neg \end{matrix}$$

**ズガアアアアアアアアアアアアアアンツ！**

「ふべらッ!？」

慎二を中心に爆風が広がる

結果を張らせたのでネギ達に被害は無い

目を開けると焦げた床に煤だらけの慎二が倒れている

「な、何があつたんですか？」

「気と魔力の反発だ、魔力を大量に込めてたからな、まあ死んではないだろう、まったく」

「ま、間桐さんッ！大丈夫ですかッ！？、このちゃん、治療をッ！」

「分かった、せつちゃんッ！まかせときッ！」

「はぁ……、よく考える馬鹿慎二が……」

Side Out

Side 慎二

ここは……？

…体が痛い……魔力も殆ど無い……

あ痛、あ痛たたた

「ん……はあ、確か呪文を唱えて…」

「起きたか馬鹿、全身火傷で（近衛木乃香が）治療しなければ大変な事になってたぞ」

「…はは…すみません、何があっただんですか？」

「気と魔力の反発だ、『咸卦法』が出来たらまだしも、貴様の様な無能がやっていい事ではない」

「む、無能……」

「事実だ能無し、言われなくてはせめて中級魔法ぐらい覚えろ」

「あははは……考えておきます」

『咸卦法』つて高畑先生が別荘で何年もかけて成功したんでしたっけ？

僕じゃ、百年はかかりますね……

「ほれ、カードだ、受け取れ」

「ん、何々、称号『甘さを捨てきれぬ臆病者』………な  
んだか僕の未来が凄く不安になってきました

……『444』………不吉ですね

……色調は『青と黒』微妙ですね、ノーマルカードですかね

…属性は『秩序』……秩序？、僕が秩序？  
星は『水星』ですか…」

「特に見栄えがない、普通のカードだな」

「言わないで下さいよ」

アーティファクトは『拒絶する聖なる領域』ですか  
……防御系でしょうか？、それともフィールド系？」

「出してみれば早いだろうが、さっさと出せ」

「はいはい、分かりましたよ、………そういえば皆は？」

「上でぼーやの夢を見ている、私は途中で抜けて来た」

「………いいんですか？」

「構わんだろう………さっさと出せ」

「はいはい、『来たれ』ッ！」

まったく、アーティファクトは僕も気になりますが  
もっと別の言い方はないんでしょうか

ん？これは………

「ビー玉？」

黒い紐がついた赤いビー玉……、レイジング。ートツ!?、時空管理局でも出て来るんですかッ!?

ど、どうしよう、僕はおそらくユーノより劣りますよッ!?

ん?……エヴァさん、何読んでるんですか?

「……成る程な……、ああ、説明書だ、さっきアーティファクトと一緒に出て来たこのアーティファクトは使用者の『拒絶』によって効果を発揮するらしい」

「『拒絶』……えっとどういう事ですか?」

さっぱり分からないんですけど『拒絶』って、イマイチ具体的にじゃない様な……

「つまり、攻撃を拒絶する事で相手の攻撃を防いだり、一定方向の空気や重力を拒絶して空中を走ったり出来るとい事だ、説明書に書いてある」

「それは……地味に強くないですか?」

「……まあ、地味に使えるな  
ふむ、付けてみる」

「あ、はい、付けましたよ?」

「行くぞ、慎二ッ！」

「へ？」

ガスッ！

「たわらッ！？  
って何するんですかッ！？」

「む、……ああ、そうか、慎二、今から殴る、私の拳を拒絶してみ  
ろ」

「は……？、いや意味が分からないんですけど……」

「行くぞッ！」

拳を振りかぶるエヴァさん

「え、ちょっ」

ガキイイイインッ！

ぬおッ！、エヴァさんの拳が赤い壁に……ってこれATフィールドじゃないですかッ！『聖なる領域』ってカヲル君も言っていましたねそつえばッ！

「中々の強度だな……これならお前が死ぬ可能性も減るだろう」

死ぬ危険が減るのは嬉しいですが……

……これ、失敗してLCLに戻ったりしませんよね……

S i d e O u t

## 第42話（後書き）

もう一つ、超不定期更新で書く予定です

ネギ弟もの

まあ予定ですが……

## 第43話（前書き）

大分遅れました……

次からはかなり不定期な更新になりそうです

## 第43話

エヴァの別荘の一室出て来たアーティファクト（以降AF）を手に、困惑した表情をしている

ネギま世界なのに、明らかに他作品のアイテムが出て来たので戸惑っている様だ

（何故、他作品のアイテムが……と言うかATフィールドはアイテムですら無いんですが…

まあ、かなり使い勝手の良いAFですし…

ATフィールドを元として造られた物なら防御力の心配は無くなりましたね

……あれ？

自身のAFについて考えていると、ふと疑問が過ぎる

（なんで最初のエヴァさんのパンチは、防げなかったんだろう？）

最初、AFの力を確かめようとしたエヴァのパンチは、防ぐ事が出来ずに顔面に直撃した

しかし、二度目の攻撃はしっかりと防ぐ事が出来た

この二つの違いがイマイチ理解出来ない様だ

そして……、慎二は…

（困った時のエヴァえもんッ！）

安易な方法に頼った

「エヴァさん、最初に殴られた時は、エヴァさんのパンチを防げませんでしたよね？」

あれってなんでですか？」

正直に分からない事を告げると、返ってきたのはバカにする様な視線だった

「……分からんのか？」

「いや、分からないから聞いてるんですが…」

「……はあ」

仕舞いには溜息までつかれてしまった

「……説明してやる、一度しか言わんから良く聞け」

いつの間にかどこから取り出したのか眼鏡をかけて

出来の悪い生徒（慎二）に懇切丁寧に（エヴァ主観）教えだした

- - - - -

「え〜と、つまり…」

「お前のAFは防御力自体は中々の強度だが、防御する対象はお前

自身で選ばねばならん

最初の一撃に関しては、お前が防ごう等と、拒絶しようと、考える前に攻撃が当たったからな」

慎二のAFは自動防御ではなく、自身で防御する対象を選ばなくてはならないという事であり

つまりその意味する所は

「つまり……不意打ちなんかには……」

「何の意味も無い」

「そんな馬鹿なッ！」

慎二が最も欲しかった能力は無く

慎二にとって戦闘を行うという事は最悪の事態であり

戦闘から出来る限り関わらない様にする慎二にとって

無意味なAFであった……

しかしッ！

転んでもただでは起きない慎二の頭脳は新たな代案を弾き出した

それは某学園都市の第一位の様に無意識の内に、あらゆる攻撃を防御する案であり

もし成功したならば無意味なAFから、かなり便利なAFに進化する

しかし、第一位のロリコンの反射はスパコンを凌駕する驚異的な演算能力があつてこそその物であり、貧弱一般人である慎二には到底出

来る事ではない

しかし慎二には勝算があつた

とある世界と、ネギま世界の違い

それは魔法と魔術の違いであり、ネギま世界の魔法はかなり無茶の効く、無意識の内に攻撃を防ぐ暗示ぐらい掛けられるかもしれない

更に言えば、慎二のAFは演算能力を必要するものではない、と言うのも大きな理由だった

暗示をかける様な事は慎二には出来ないしかし、600年を生きたエヴァがいる

こちらではしていないが、原作ではネギの記憶を覗くのに魔眼による暗示の様な物を使っていた

慎二に暗示をかける位簡単だろう

よって慎二は

「エヴァさん」

「ん、なんだ？」

「僕に暗示をかけて、無意識の内に攻撃を防ぐ様に出来ませんか？」

- - - - -

結果を言えば成功

しかし、あくまで無意識の拒絶の為それ程硬いA Tフィールドを張ることは出来なかった

精々魔法の射手を防ぐ程度だ

しかし、魔法の射手はそこら辺の岩を打ち砕く威力がある

事実上、慎二は近代兵器の殆どを無効化出来る様になったのである

それを知った慎二は

（キタツ！キタコレツ！これで不意打ちによる恐怖に怯えなくて良くなりそうですッ！

常日頃からA Fを出しっぱなしにする予定ですから、僕の危険はかなり少なくなりましたッ！やったッ！）

と、ハッスルしていた

誰が見てもご機嫌な慎二

その隣でエヴァが妙に満足げな顔をしていた

慎二は気付いてない様だが、見るものが見れば（木乃香など）分かる程であった

その理由は暗示をかける時に考えた事が原因である

- - - - -

「僕に暗示をかけて、無意識の内に攻撃を防ぐ様に出来ませんか？」

「暗示…だと？」

「ええ、無意識の内に攻撃を拒絶する様に暗示をかけてくれたら、不意打ちも無効化出来る様になるかもしれません」

「ん、…確かに可能性は高そうだな」

「でしょうッ！、と言つことをお願いします」

「…まあ良いだろう」

その答えを聞いた瞬間に、その場で正座する慎二と、正座している慎二の頭を掴むエヴァ

「では、お願いします」

「……………」

今から暗示をかけられる、というのに不安等が一切無い慎二

それを見て、妙な考えが過ぎる

（まったく、何を安心してるんだか……

私とその気なら意思を無くし私の下僕になる可能性すら有ると言うのに

信頼……とは少し違うな、私がそんな事しないと考えているのか？

……ん？、そういう事を信頼と言わないか？

……なんだ、こいつ私を信頼してるのか？

闇の福音を？

真祖の吸血鬼を信頼してると？……バカバカしい、そんな事が有る訳ないだろう

……いや、しかし……

ならここまで無防備な姿を晒せるか？

こいつ本当に……

いやいやいや、待て待て、論点がズレている）

「……エヴァさん？終わりましたか？」

「ッ！？、まだだッ！もう少し待てッ！」

考え事をしている途中に話しかけられた事によって少し声が上擦る

「は、はあ……」

あまりの反応にどう返していいか分からない慎二

「ほら動くな、すぐ終わる」

（まったく何を考えてるのか……

こいつは私の下僕だ、私に疑いを持たないのは当然の事だな

まあ、こいつが私を信頼していようと、していまいと、別に構わな

いか…

特に変わる訳でもあるまい

こいつは私の下僕だ、何も変わらない)

- - - - -

「それじゃ、ネギ先生の所に行きましようか、ここに居てもする事  
もありませんし」

「だな、ぼーやの記憶を覗きに行ったのがついさっきだったからな  
もしかしたら、まだ覗いているかもしれん」

(原作では、宮崎さんを唆したのはエヴァさんでしたが……

朝倉さんあたりに唆されたんでしょうか？

.....？

何か忘れてる様な？)

出そつで出ない疑問に、頭を傾げる慎二

その後、慎二達がネギの所へ来たのは

記憶を覗き終わりネギの父親探しを協力する、とネギの生徒達が宣  
言している時であり

結局、慎二は忘れていた事柄を思い出す事は無かった



## 第44話（前書き）

ひたすら微妙……

## 第44話

「な〜んか忘れてる気がするんですよ……」

土砂降りの雨の中

エヴァさん家からの帰り道、エヴァさんから（正確には茶々丸さんから）傘を借りて寮に帰る途中の道、何か大事な事を忘れてる気がしてならない

思い出しそうで思い出せない、喉に小骨が引つ掛かった感じというか、なんとも言えない感覚が先程からして止まない

「本当、なんだったかな…」

絶対に忘れちゃいけない事だった気がするんだけど……」

雨が降っているおかげで、首を傾げ、頭をひねり、唸りながら歩く姿が人目につかないのはありがたい  
もし誰かに見られたら完璧に不審者だと思われるから、今だけは雨に感謝したい気分になる

「ふう、考えてても仕方が無い…か」

こういう時は、さっさと帰って寝るに限る

「さっ、帰る帰ろッ！」

タッタッタツと軽やかなステップで自分の住む寮に向かう

離れた所で、その背中を見る一つの人影があった

「……はあ、『あれ』か、聞いた限りではもう少し楽しめそうな少年だと聞いたんだがね……」

さっさと終わらせて『本命』に専念した方が良いようだな……」

その人影はゆつくりと慎二の後を追いはじめる

――――

一方その頃、女子寮では

「はむ、むぐ、んぐ」

女子寮には似つかわしくない盛大な咀嚼音が、とある一室に響く

「うひゃー……、良く食べるねえ……」

「はぐ、これ美味いわッ！おかわりッ！」

「あら良かった、どんどん食べてね」

その音の原因の一室には犬耳の少年、そばかすが目立つが顔の造りの良い少女、中学生とは思えな……

ゾクツツッ！

「な、なんやッ！殺気ッ！？」

「ち、ちづ姉どうして急に変な所睨んでるのッ！？」

「あらあら、何か不穏な発言をされた様な……」

……素晴らしいプロポーションを持つ美【少女】が居た

「あらあら、ウフフフ」

（ど、どうしたんや、アレ……）

（わ、わかんないよッ！）

お互い会ったばかりなのにアイコンタクトで会話する二人

「それはさておき小太郎君」

「な、なんや……？」

「名前以外の事は思い出せた？」

犬耳の少年、小太郎の記憶に関しての事柄を問う、美【少女】那波  
ちづる

それを心配そうに眺めるそばかすの少女村上夏美

「んゝ、うん、さっぱりや」

胸を張って自慢にならない事を自慢する小太郎

「あッ！、小太郎君寝言で『ネギ』とか『ドグサレ人形』とか言ってたよッ！」

夏美が偶然聞き取った寝言を小太郎に教える  
それを聞いて

「『ネギ』『ドグサレ人形』……うん、よーわからんわ  
でも……『ドグサレ人形』って聞くとなぐんかイライラすんやけど  
な……」

「『ネギ』の方に聞き覚えはあるかしら？」

「『ネギ』……、『ネギ』の方も何となくム力つくなあ……」

「両方とも頭に来る事だけなんだ……」

あまりの答えに呆然とする夏美

ホホホと笑っているが何を考えているかさっぱりわからない那波  
まだ、うんうん言いながら首を傾げる小太郎

本来は無かった、小太郎のイラつき、これにはしっかりと理由はある  
った

時は修学旅行の三日目に遡る

-----

両面宿儺の封印の近くの林

そこに一人の少年がウロウロと歩き回っていた  
小太郎その人である

「ああッ！もうッ！

ネギの奴はこーへんし、千草姉ちゃんも千草姉ちゃん、りよ、り  
よう……なんたらスクナとか言う奴を復活させるって言うったの  
に全然出て来んし、なんやねんな一体ッ！？」

千草が言っていた事

『今からネギとか言う坊主が追って来るさかい、封印の近くの林で  
相手したり』

それを信じてずっと待っているのに、ネギは来ないし、スクナの復  
活する気配も無い

あまり気が長くない少年はすぐに限界が来てしまう

「ああああッ！もうッ！まだかいなネギイッ！」

イライライライライライライライライラ

ガッ！

背後の茂みから物音がする、漸く来たのかと小太郎の体から気が放  
出される

「ッ！……やつと来たんかいなッ！白黒決ちゃ……」

「アア？ナンダデメエハ」

出て来たのは待ち焦がれていた少年ではなく可愛らしい小さな人形

「な、なんやお前……ッ！」

声をかけ、気づく、その小さな人形が人形の数倍はありそうな荷物を引きずっている事に

荷物を引きずっている事自体は別に問題はない

ただ、その引きずっている荷物は人型で、千草と呼ばれる人間だった事が問題だった

「千草姉ちゃんッ!？」

「オ!、コイツノ知り合イカ?、安心シロ、死ンジャイネエヨ俺モ丸クナツタモンダゼ」

やれやれつと肩を竦める人形、外見と中身が一致していない闇の福音の口の悪い従者、チャチャゼロ

「何者や、お前ッ!」

「テメエハ知ラナクテ良インダヨ、ツーカコイツノ知り合イッテ事ハ、才前モブツ潰シテモ良インダナ?」

「やってみいッ!、せあッ!」

掛け声と共に小太郎の右手から漆黒の狗が飛び出る

激昂しながらも冷静さを失っていない様で、狗神を牽制にだしながら近づく小太郎

千草を倒しているという事は千草の猿鬼、熊鬼を倒しているという事である

その事を甘く見ている訳ではない様だ

「ハッ、軽イナ、オイッ！」

何処から取り出したのか、自身の身長程もあるナイフ二本を使い、  
狗神を切り裂くチャチャゼロ

狗神を一匹、二匹、とギリギリの所で躲し、攻撃した後の隙だらけ  
の所にナイフを突き立てる

「ハッ、そんなギリギリの避けかたで何言つとんねんッ！」

更に十匹、狗神を増やし、チャチャゼロを追い立てる

しかし、数を増やしても変わらずギリギリの所で攻撃を躲されあつ  
と言う間に十匹全部がやられてしまう

「な……ッ！」

「ハッ、才前コソソノ程度力ヨ、ダッタラ期待ハズレダゼ」

「ぬかせッ！」

狗神が無駄だと悟り一気に突っ込む、そして、相手に攻撃させる暇  
すら与えぬ速攻

「おらおらおらおらぁッ！」

右、左、フェイントを入れた蹴り、近距離での狗神召喚、その全てを防がれ躲される

「チツ、ツマンネエ」

「なんやと……ガッ！」

頭に響く鈍痛、いつ攻撃されたかが全く分からなかった  
チャチャゼロの動きをずっと見ていた筈なのに、全く気がつかなかった

手に、足に、力が入らない

「くそっ…たれ……」

バタンッ

膝が崩れ落ちる、顔にへばり付く草が鬱陶しい

「コレナラサツキ逃ガシタ神鳴流ノ変ナ餓鬼ノ方ガヨッポド強力ッタゼ」

「この……ドグサレ人ぎよ……」

「ケケケ、確力二速カッタガ、慎二比ベリヤ、マダマダダナ」

-----

「小太郎君、なんでム力つくか分かる？」

「ん、分からんけどなんかム力つくわ」

「分かんないんだ……」

小太郎の答えを聞き、ポンツ、と手を打つ那波

「こういうのはショック療法の出番ね」

「ちょ、そのネギで何する気なんツ!？」

「大丈夫よ、すぐすむからね」

「『ね』、じゃないわツ!？」

「『愁傷様……』」

「ちょっ! まっ!」

-----

「ん?、今、どこからか悲鳴が聞こえた様な……」

気のせいでしょうか?

酷く同情を誘う悲鳴だったんですが…

………気にしない方向で行きましょうか…

さっさと帰って寝ましようか……

「すまない、『間桐慎二』と言つのは君だろうか？」

後ろから声をかけられる

うん？、こんな渋い声の知り合いは居ないんですが……

「はい、そうですがなんでしょ……」

ゴウウウツ！

振り返った僕の目に映つたのは、僕の頭程度なら容易く砕く事の出  
来そうな  
凄まじいスピードで風をきる拳だった

## 第45話（前書き）

長い事書いてなくてすみません……

続きもまた、かなり時間がかかるとおもいます

……すみません……

## 第45話

ギャリギャリギャリッ！

目の前に発生した赤い障壁に防がれるマツハパンチ（仮）

「は？」

予想外な展開に間抜けな声が出てしまう

ぶっちゃけてしまうと訳がわからない

今の展開も何故こんな展開になっているかも全く持って理解出来ない  
なんだこの展開……

ピシッピシッピシッ！

目の前の赤い障壁に蜘蛛の巣の様なヒビが入っていく

この赤い障壁は常日頃からカードから出した状態にしているAFの  
物だから結構な硬度がある筈なんですけど………

ビキッ！

その音と一緒に一気に広がるヒビ

あ………何か決定的な音がしましたね

ヒビだらけですし、もうもちそうにありませんか………ってッ！？

「ッ！」

ズドンッ！

半ば本能的に右方向に横つ飛びすれば  
さっきまで僕の頭があつた場所を撃ち抜き、更には拳から飛び出した衝撃波が建物の壁すら破壊する

危つなッ！あまりの展開に思考がフリーズしてましたよッ！？

誰だこんな危ない事する奴はッ！

死ぬかと思つたッ！

拳が飛んできた方向に目を向けると

黒いコートを羽織り、黒い帽子を被つた愉快的な髪型をしたダンディズム溢れる老人

.....

思い出したッ！？

あの特徴的な髪型はヘルマンだッ！

そうだ、そうだよ、原作ではネギ先生が記憶を見せた後に襲つてきたんだッ！すっかり忘れてたッ！

A Fが無ければ即死だった……ってネタに走つてる場合じゃないッ！

つて言うか、なんで僕を狙つてるんですかッ！？

貴方の目的はネギ先生御一行でしょうがッ！

「ふむ、中々硬い障壁だな、あまりにも隙だらけで弱そうだったからガツカリしていたのだが……これなら楽しめそうだ」

ニツコリと微笑むヘルマン……怖ッ！

「楽しまなくて結構です、と言うか、僕が狙われる理由が理解でき

ないんですが……」

あれですね、イロイロとテンパリ過ぎて逆に冷静になれる……  
と言うか、本当になんで狙われるのか理解出来ないんですが……  
イヤ、本当はなんとなく分かるんですが、分かりたくない……

「ふむ、冷静だね、まず自己紹介と行こう

私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵

伯爵とは言っているが没落貴族だね

今はしがない雇われの身だ」

「それはそれは、そのヘルマン伯爵が僕に何の用があるんですか？」

何となく理解できてしまうのが嫌ですね……

イヤ、まだ僕の考えとは別の可能性も……

「なに、私の雇い主がね、麻帆良に『マトウシンジ』という名の魔法関係者が居る

それを可能ならば抹殺して欲しいと言われていてね

どんな強者かと思ったらあまりにも弱そうだったからね、せめて痛みを感じる前に殺してあげようと思ったままでだよ」

やっぱり……

原作は31巻までしか読んでないから、ヘルマンを麻帆良に送ったのは『完全なる世界』か『MM元老院』のどちらかだと考えてましたが……

まず間違いなく『完全なる世界』ですね……

僕を知ってるのは麻帆良の関係者か、修学旅行で会ったフェイトだ

けですし

「なんで、僕が『間桐慎二』だと分かったんですか？  
姿は麻帆良関係者以外に見せた覚えは無いんですが……」

僕の問いを聞いたヘルマンはニヤリと口を歪めながら言った

「麻帆良の魔法関係者で名前は『マトウシンジ』だと分かっていたんだ

調べるのは容易い、まあ、教員ではなく学生だとは思わなかったがね」

最後の方は本当に意外だったのか、少し予想外だった様な顔をしている

皆が敵の前で名前を連呼したからかッ！

それさえ無ければ帰って寝る事も出来たのに……

「私としてはありがたい事に君は中々強いらしい、存分に闘おうじゃないか……」

うわあ、殺る気満々ですよ、満面の笑みですよ……

「……………」

出来れば関わりたく無い、しかし、何とかヘルマンのやる気を削がないといつまでも自分を捜していそうなので、何とかしてヘルマンのやる気を無くしたい

対強敵用に考えて居た【必殺技】を使うときが来ましたか……

これを使えば大抵の敵は間違いなく萎えますし……

いざ……

「良いでしょう、行きますよ」

「ほう、やる気になったのかね、なら、先手は譲ろう」

僕が真正面から闘うとは思って無かったのか意外そうな顔をしている

「…………後悔してもしりませんよ？」

「構わないよ、来ると良い」

余裕の表情のヘルマン、僕の攻撃程度防げるといふことでしょうか

なら、喰らってから後悔するといふ……

「行きますよッ！」

無詠唱で身体全体に【戦いの旋律】をかける  
準備完了ッ！

「喰らえええええッ！」

勢いをつけて右腕を振り上げるッ！

僕のあまりの気迫の入れように驚くヘルマン、しかし、もう遅いッ

！

「必いつつさああつツ！」

そのまま勢いをつけて左足を踏み出すツ！

驚いている様なヘルマンだが、動こうとしていない所を見ると『先手を譲る』発言をわざわざ守るつもりらしい

それはそれで好都合……

そしてっ振りかぶるツ！

「超 煙玉アアアツ！」

掛け声とともに右腕に【握っていた物】をヘルマンの足元に投げつけるツ！

「は？」

ボツフウウウツ！

という音と共に比喻表現では無い、真っ赤な煙がヘルマンを包む

麻帆良祭編の為に学生服には『イロイロ』と細工を施してあるんですよツ！

学生服のポケットにはコレの他に『イロイロ』詰め込んであります

「なっ、なんだこの煙はツ！？ゴホツ！の、喉がツ！グツ！鼻がツ！？」

目がツ！目がアアアッ！」

作戦成功ッ！

ここからが本番ですッ！

「ではッ！、僕は失礼させていただきますッ！」

――――

「グッ、クソッ！」

赤い煙の中で悪態をつく

鼻、目、喉、に痛みが走り涙で前が見えなくなる

まさか、煙玉を投げつけられるなんて夢にも思わなかった

正々堂々とした闘いを望んだ訳ではない、しかしこれはあんまりだ、酷すぎる

「ではッ！、僕は失礼させていただきますッ！」

煙の外から声が聞こえて来る

「なっ、逃げる気かッ！」

わざわざここまで来て逃げられるなど恥さらしもいいところだ

「逃がすかアアッ！」

まだ、視界がハッキリしないが、そんな事は後回しだ

一気に駆け出す

ボフッ！

煙を抜ける、そこには、間桐慎二の姿は無い

煙を抜けるまで数秒、その数秒の間に完璧に見えない場所まで逃げ仰せたということなのだろうか

ありえない

と、いうかあそこまで自信満々に『行きますよッ！』とか言っていないと、何の躊躇いもなく逃げるなんてイロイロありえない

ザアアア……………

あまりの出来事に呆然としている老人を無視して雨が降りつつける

「ちよつ、……………本当かね？」

今、起こった出来事が信じられず、嘘であって欲しいと口から言葉が漏れる

もはや、やる気とか殺る気とかが諸々消え去っていた

身体全体から虚しいオーラが立ち上るヘルマンは30分程、その場を動く事が出来なかった

## 第46話（前書き）

第四話の内容を変えました

慎二の父親の「悠久の風」の退団理由が、長時間の【魔力暴走】の副作用による魔力低下にしました

## 第46話

土砂降りの麻帆良の街道を疾走する影がひとつ

濡れる事も構わず、ただ一向に、逃げる様に走る

「っはあ、はあ、はあ、……………撒いたかな？」

全く、あんなの相手にしてられないですよ…

伯爵が打つ、悪魔パンチは多分、通常時の高畑先生が打つ居合拳よりも強いですし。絶ッッ対に危ないですし、怪我しますよ……

撒いたと思い、ふう、と息をつく慎二

修学旅行の時を考えると考えられない程ヘタレている

しかし、これが本来の慎二である

修学旅行の時は学園長と言う逆らうことの出来ない存在からの【お願い】であつたし、慎二にも下心があつた

慎二はこの14年間で原作の事は少々忘れて閉まっているが大体のストーリーは覚えている。（ヘルマンを忘れていたのは修学旅行と麻帆良祭に比べると地味だったからである）

魔法世界編ではどういう理由かは解らないが何故か麻帆良の魔法生徒がいた

高音や愛衣は、本編では活躍の場が無かったが優秀な魔法生徒だ、しかし戦闘面では殆ど活躍出来ないが春日美空までいたのだ

純粹に魔法世界に來ただけなら良いが、もし学園長が送り込んだのなら自分も巻き込まれる可能性がある

ココネと春日を二人でワンセットだと考えた場合、全員ネギと知り合いである

なら、学園長が関わっている場合、自分が送られる可能性が高くなる  
だからこそ、修学旅行は無理をしても頑張ったのだ

もし、魔法世界に行くように命令されたら、学園長の命令を無視して夏休みの間、エヴァの家を引きこもり別荘にちよくちよく行っていれば良い

夏休みも長く過ごすことが出来、学園長の命令を突っぱねる事ができる

家に直に來られた時は本気で走って逃げれば良い  
外で会った時も同様

学園長には修学旅行の時、どんな命令でも一度拒否出来る権利を貰っているので表向き、後で文句を言われる事はない

自分は修学旅行で死にかけたのだ。フェイトは人間は出来るだけ殺したくない。みたいな事を言っていた癖にあっさりと殺しに來たのだ

もう、無理だ、もう、危険な事は勘弁して欲しい

だからこそ今の慎二は今までで一番逃げに徹している

「……………」

気配遮断を使いながら、なんとも言えない顔で自分の右手を見る慎二  
慎二が見つめている手の中には携帯が握られている  
紛れも無い、自分自身の携帯電話だ

「……………はあ」

かけたくない、電話かけたくないなあ、でも一応魔法生徒だし原作  
との誤差が出る可能性もありますし……………報告したくないなあ…

溜息と共に慎二の心の声が透けて聞こえて来る

「……………よしッ！」

覚悟が出来たのか、ゆっくりと魔法生徒に教えられている学園長室  
に直接繋がる電話番号をプッシュしていく

pullllllllッ！pullllllllッ！pullllllllッ！  
pullガチャッ！

『間桐くんか、どうしたのじゃ？何かあったのかの』

まだ麻帆良に入り込んだ悪魔の事は知らないのだろう。呑気な調子  
で内容を聞かれる

「えーと、先程、麻帆良商店街の付近で爵位持ちの悪魔と接触しま  
した」

『ふお、爵位持ちの悪魔にのう……………ふおッ！？爵位持ちの悪魔ッ！

「それは本当か間桐くんッ！」

一瞬、何を言われたのか理解出来ていないのだろう。少ししてから随分と大きな反応が返ってきた

「はい、僕では対処出来ないと思って撤退しました。判断をお願いします」

とりあえず学園長の指示を仰がねばなりません

『むう、良い判断じゃ間桐くん。至急麻帆良商店街に魔法先生を派遣』『学園長ッ！大変ですッ！』『…なんじゃッ！今は電話中じゃぞッ！』

誰か学園長室に入って来た様だ。電話口から学園長と入って来た誰かの会話が聞こえて来る

『電話なんかしている場合ではありませんッ！一大事ですッ！』

『むう、なんじゃと言っくんじゃ。まったく…』

『三ーAの生徒がスライムのような悪魔に攫われた。と私の担当の魔法生徒から連絡がッ！』

『ふおッ！？なんじゃとおおおッ！？』

「いッ！？」

電話口から学園長の叫び声が耳を貫く

不意に喰らった為悶絶している所に、更に学園長の会話が聞こえる

『い、今さっき間桐くんから爵位持ちの悪魔との接触があったとの報告を聞いた。それとの関連性はッ！？』

『スライムのような悪魔自体はあまり力の強い悪魔では無いようです。恐らく捕縛専用かと、その悪魔は術者を護っているのでは？』

『ま、間桐くんッ！悪魔の近くに悪魔を召喚した術者を見なかったかねッ！？』

「……いえ、悪魔の近くには居ませんでした。どこかに隠れていたのかもしれませんが……」

ヘルマン伯爵は多分フェイトが召喚してるんでしょうし、フェイトは麻帆良に居るはず無いですし……

『むう、スライムと爵位持ちの悪魔が仲間の可能性は高い。三ーAの生徒達を人質を取られている以上下手な行動は出来んか……シャークティー君、誰が攫われたかわかるかの？』

話してる相手はシスターシャークティーでしたか。だとしたらスライムが三ーAの生徒を攫ったのを見たのは春日さんでしょうね

『朝倉和美、宮崎のどか、古菲、綾瀬夕映の四名ですッ！』

『ネギくんのクラスの人間ばかりか……ッ！だとしたら他にも人質がいる可能性が高いのう』

『学園長……私達魔法教師は何をすれば……』

『可能な限り学園長室に集め、相手の出方を待つしかないのう、間桐くんも来てくれんか?』

いやいやいや、ここは魔法先生だけで頑張るべきでしょう人質が取られているんですし

「……………わかりました、すぐに行きます」

携帯を切り、嫌々学園長室を目指す慎二

気持ちが表に出ているのか普段より随分と遅い足取りだ

「……………はあ、原作と随分と乖離しそうですね……………原因は僕ですが」

溜息をつきながら重い足取りで雨の中学園長室を目指す慎二であった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2685q/>

---

戦い？ しませんけどなにか？

2011年8月17日00時31分発行